愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第14号
2013.5
1-10p

奥三河地域の縄文時代後晩期の様相について

—東栄町引田遺跡・本郷桜平遺跡を中心に—

川添和暁

東栄町引田遺跡および本郷桜平遺跡について、近年の調査成果をもとに分析結果を提示したものである。引田遺跡では、これまで広く知られていなかった縄文時代後期の様相を、本郷桜平遺跡については近年の発掘調査をもとに立地する地形などを復元した。周辺を含めた遺跡の分布を縄文時代後期（晩期前半も含む）と晩期後半以降とに分けて、その様相の差について指摘して、若干の私見を述べた。

1．はじめに

本稿は、北設楽郡東栄町引田遺跡および本郷桜平遺跡の様相について、近年の調査成果をもとに分析結果を提示したものである。両遺跡は、東三河奥部の縄文時代を代表する遺跡として学史的にも広く知られているものの、現状では断片的な情報に留まっている。特に、両遺跡については、たとえそれが些細な情報であったとしても、情報をつなぎ合わせることによって、遺跡の構造の解明を行なう必要が、継続的に必要であるといえる。

筆者は、この東栄町域の資料について、調査する機会を得ることができた。そこから得られた知見については、東栄町教育委員会に報告書を提出して、一旦はその責務を果たした。その成果の一部は、2005年に刊行された『東栄町誌 自然・民俗・通史編』に掲載されているが、今後は所蔵資料の内容物やそこから明らかになる成果を、できるだけ遺跡の理解につなげることが重要で、これがある意味では資料の活用といわれることにつながると、筆者は考えている。

本稿とともに『東栄町誌 自然・民俗・通史編』も併せて参照願えれば、幸いである。なお、以下の本稿では、これを『東栄町誌』とのみ表すこととする。

図1　東栄町の位置

2．東栄町域の地理的環境

東栄町は、愛知県北東部の北設楽郡内に位置する（図1）。北は豊根村、西は設楽町、南は鳳来町、東は静岡県浜松市天竜区佐久間町に接する。町域は東西約15km・南北約10kmの範囲に及び、面積は123.4㎢である。町内中央には、天竜川水系の大千瀬川が西から東の方向に流れており、周囲は標高1,016mを測る明神山をはじめ、900～1,000m代の山に囲まれた地形を呈している。その中では、西側から東側に向かって地形が傾斜しており、町東端の大千瀬川周辺が標高200m程度と最も標高が低い。

地質的な環境では、東栄町の南西側には花弁状を呈する設楽層群があり、東側には天竜川に沿って中央構造線が走っている。設楽層群では、棚山累層・神田累層・尾篭累層と、熔結凝灰岩の中でも剥片石器石材に適したガラス質の石材を産する層群が含まれている。中央構造線の東側（外帯）・西側（内帯）で岩帯を構成す

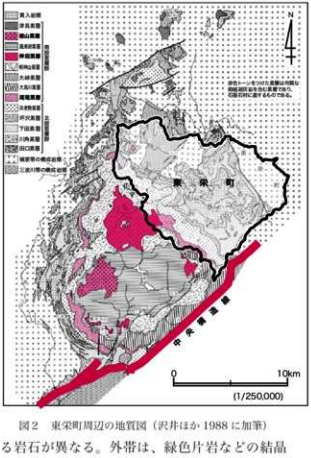


図2　東栄町周辺の地質図（沢井ほか 1988 に加筆）

る岩石が異なる。外帯は、緑色片岩などの結晶片岩などのある三波川変成帯であり、一方、東栄町が立地する内帯は、花こう岩・片麻岩で構成される領家変成帯であり、白色の安山岩もしくは流紋岩などの貫入岩類が認められるという。このように、東栄町域は多様な石器石材が所在するところという、立地的特性が認められる土地柄である。

表1　東栄町内の調査の歴史

年月	調査など	機関	担当	調査の種類	調査立会	調査対象地など	検出遺構など	出土遺物等管理および場所	備考	文献	時期の内容
1925年ごろ	本郷桜平遺跡	遺跡発見				佐々木茂八郎		佐々木茂八郎			本郷桜平遺跡の紹介
1925年	本郷桜平遺跡	学会報告		佐々木茂八郎資料調査		夏目・平・窪田正好		佐々木茂八郎		夏目 1925	
1932年	本郷桜平遺跡	遺跡発見		佐々木茂八郎資料調査		小屋敷北部		佐々木、東		小栗ほか 1932	
1943年～1952年ごろ	引田遺跡	工事中	個別				土師器集中	東栄町民俗資料		鈴木・岡田ほか 1968	
1953年	本郷桜平遺跡	工事中	事前発掘調				掘形埋土から土師器・平安灰釉陶器の一部	東栄町民俗資料		鈴木・岡田ほか 1968	町内遺跡の調査と『北設楽郡史』の刊行
1954年2月	西向遺跡	工事中調査	個別	その他調査		掘削土区画	第1住居跡（焼失住居）	東栄町民俗資料	木村の前角平氏調査	鈴木・岡田ほか 1968	
1955年	本郷桜平遺跡	遺跡調査	発掘調査	発掘調査		主郭南側	竪穴群・掘建柱入ラセン土師器等	東栄町民俗資料		鈴木・岡田ほか 1968	
1958年9月	ブヤキ遺跡	遺跡調査	有志による分布調査	発掘調査	北設楽郡史編纂委員会	東谷一平・村松昌司・岡田松三郎・三木勇次	窯跡	東栄町民俗資料		鈴木・岡田ほか 1968	
1970年10月	下平遺跡	工事中	個別					東栄町民俗資料			
1980年9～12月	引田遺跡	遺跡調査	発掘調査	立会調査	東栄町教育委員会	中川真次	竪穴遺構・土師器等	東栄町民俗資料		井元・吉原編 1987	
1986年3月	越沢洞遺跡	遺跡調査	発掘調査	立会調査	東栄町教育委員会	中川真次		東栄町民俗資料		加藤・三浦編 1988	
1987年8月～9月	大谷洞遺跡	遺跡調査	発掘調査	発掘調査	東栄町教育委員会	洞窟内全域		東栄町民俗資料		加藤・加藤編 1988	行政発掘調査の成果
1993年10月～1994年3月	上ヶの洞遺跡	遺跡調査	発掘調査	発掘調査	愛知県埋蔵文化財センター	地蔵・跡	土坑など	愛知県埋蔵文化財調査センター		松田編 1995	
1997年9月	上ヶの洞遺跡	遺跡調査	東栄町教育委員会	立会調査	東栄町教育委員会	県道311号		東栄町民俗資料		鈴木・岡田ほか 1998	
2013年12月～14・15日	本郷桜平遺跡	確認調査	本郷総合地区開発計画	試掘調査	東栄町教育委員会	個別参加	土坑・溝状地など本郷総合開発地区	東栄町民俗資料		本報	『東栄町誌』の関連調査とそれ以降
2015年	長倉洞内調査向調査		『地域再生』補助により	再利用調査	東栄町教育委員会	洞内全域・川道400m		東栄町民俗資料		東栄町埋蔵調査報告2015	

※その他、本調査書は報告調査地区図作成は記載されていない。

3．東栄町域の考古学・埋蔵文化財調査の経緯

東栄町域における考古学・埋蔵文化財における調査について、表1にまとめた。大きく以下の四時期に分けることができる。

第1期：本郷桜平遺跡の紹介　本郷桜平遺跡は、明治期以降、地元の佐々木友八郎によって熱心に表面採集が行なわれた。遺跡が学界に紹介されたのは1925年のことであるが（夏目・窪田1925）、夏目らの報告によると、佐々木所蔵資料とともに、坪井正五郎や大林意備らの書簡が保管されていたという。このことから、本郷桜平遺跡の資料は、佐々木の熱意と人的交流もあってか、近代考古学の黎明期から学界には知られていたようである。小栗鉄鐵郎の報告では、本郷桜平遺跡の出土資料として、膨大な量の遺物写真が掲載されている（小栗ほか1932）。

第2期：町内遺跡の調査と『北設楽郡史』の刊行

本郷桜平遺跡以外も遺跡の所在が知られるようになった時期であり、岡田松三郎らによる業績が大きい。戦中・戦後の水田開発により、引田遺跡では土器棺墓などをはじめ大量の遺物が出土したという。西向遺跡やブヤキ窯跡の調査も行なわれた。また、本郷高校新校舎建設に伴って、本郷桜平遺跡では土器棺墓や竪穴建物跡の一部が見つかった。その後、校地整理にともなう調査により、竪穴建物跡と土器棺墓が見つかった。これらの成果は、『北設楽郡史』にすべて掲載された（鈴木・岡田1968）。

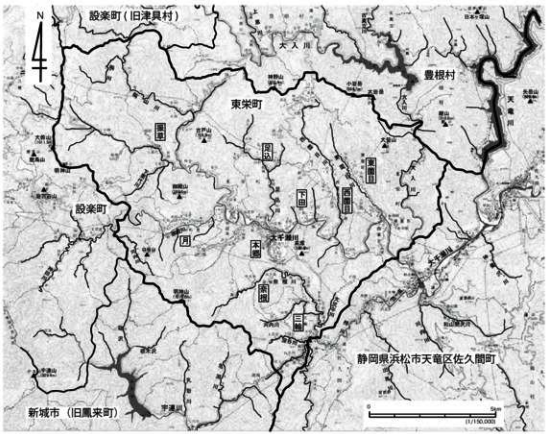


図3　東栄町の地形（国土地理院刊行５万分の１地形図「田口」より）

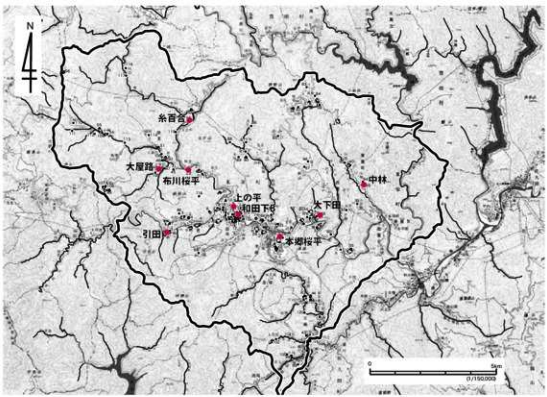


図4　東栄町の遺跡分布【赤色は縄文時代後期～弥生時代前期の主要遺跡】（国土地理院刊行５万分の１地形図「田口」より）

第３期：行政発掘調査の成果　文化財保護法に基づく発掘調査などが行なわれ、多くの成果が知られるようになった。広い面積を調査したものに、上の平遺跡の調査がある（松田編1992）。また、後で詳しく述べる引田遺跡の調査もこの時期に行なわれたものである。

第４期：『東栄町誌』の関連調査とそれ以降

永井宏幸と筆者は、東栄町教育委員会の依頼を受け、2003年から民芸館所蔵資料の調査を行い、『東栄町立民芸館所蔵遺物調査報告書』を提出した（永井・川添2005）。その後刊行された『東栄町誌』では、この報告書の内容を受けて執筆・刊行が行なわれた経緯が記されている（東栄町誌編纂委員会2007）。発掘調査としては、小学校建設に伴い、本郷桜平遺跡の試掘調査が行なわれた。

4．東栄町域における遺跡の分布

東栄町域では、現在120遺跡が知られており、各時代別の累計遺跡数では、縄文時代53、弥生時代26、古墳時代14、古代31、中世91、近世13遺跡を数える。遺跡数が最も多い中世では、町内中央を流れる大千瀬川流域を中心に遺跡の分布が認められる。縄文時代では、早期前半の押型文土器期から活動痕跡が確認できるが、遺構の展開が認められるのは縄文時代後期以降である。東栄町域では、縄文時代後期から晩期にかけての活動痕跡が確認できる遺跡として、引田遺跡・本郷桜平遺跡のほかに、大屋路遺跡・布川桜平遺跡・和田下Ｂ遺跡・大下田遺跡・中林遺跡を挙げることができる。また、弥生前期の条痕文期に当たる糸百合遺跡では、土器棺墓に由来すると考えられる深鉢がまとまって出土している（図４）。

5．遺跡の検討

ここでは、上述した遺跡の中で、特に引田遺跡と本郷桜平遺跡について、近年の調査成果をもとに紹介していく。

a. 引田遺跡（大字月字引田）

大千瀬川の支流、御殿川の左岸、南向する緩斜面の段丘上に立地し、標高は420mほどである。この遺跡は、戦時中の開田工事中によってすでに遺物の採取などが行われており、大量の遺物が知られている。このとき採取された遺物は、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期にかけてのもので、特に条痕文期の土器棺墓がよく知られている。これらの遺物群がこれまで引田遺跡の特徴づけるものと考えられていた。

1985年に、圃場整備事業に伴う立合調査が行われている（図５・表２）。調査は、字引田・字中貝津・字木戸口にわたって行われた。この調査では、引田遺跡ではこれまで知られていなかった、縄文後期を中心とする資料がまとまって出土した。特に、遺物が多量に出土したのは、字引田６番の１である。出土遺物は、縄文時代前期から見られ、後期・晩期が最も濃厚である。遺構としては、縄文時代の土器埋設遺構や配石遺構があった。土器埋設遺構に由来すると考えられる土器は、２個体が別個で出土した。一個体は後期中葉の蜆塚KII式と考えられるもので、深鉢が逆位状態になって出土したものである。別の一個体は後期前葉の堀之内１式併行と考えられるもので、これも逆位の状態で出土した。前者は、記録により６番の１からの出土が確実視できるものである。後者は出土地点の記録がないものの、遺物の出土傾向などから、６番の１から出土した可能性が高いと考えられる。配石遺構もこの縄文時代後期に属するものと考えられよう。また、弥生前期の条痕深鉢を複数個体つかった土器棺墓は、現在では出土地番が不明である。いずれにしても、これら遺構群のより詳細な位置関係は不明である。配石遺構は、大きめの河原石を円形に配し、さらにその中心部にも礫が配されているようである。

遺物の種類は、大きく土器類と石器類に分けられる。土器類は多く見られる深鉢のみならず、壺型土器や注口土器も見られる。土器片を円形に加工した加工円盤も存在する。石器には、石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・有溝石錘・敲石などが見られ、石棒などの石製品も確認できた。

b. 本郷桜平遺跡（大字本郷字上桜平）

大千瀬川の右岸、北向する広い緩斜面の河岸段丘上に立地し、標高は230mほどである。旧愛知県立新城東高等学校本郷校舎の敷地とな

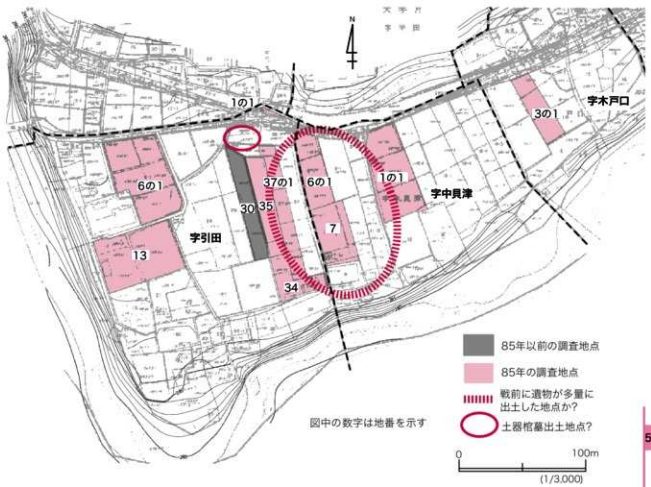


図5　引田遺跡全体図

表2　引田遺跡85年調査の一覧

字	地番	遺物の時期	遺構など
引田	1の1	縄文晩・弥生前	
	6の1	縄文前・縄文中・縄文後・縄文晩・弥生前	土器埋設遺構
	13	縄文晩	配石遺構などもこの地点からの出土か?
	34	縄文晩・弥生前・弥生中	
	35	縄文晩・弥生前・弥生中	
	37の1	縄文後・縄文晩・弥生前・弥生中	土器棺墓?
中貝津	1の1	中世	
	6の1	弥生前	
	7	弥生前	
木戸口	3の1	石器のみ	

□は、特に遺物量のまとまっている時期を示す。

写真１　85 年調査土器出土状況１【東栄町教育委員会提供】

写真４　85 年調査土器棺墓検出作業【東栄町教育委員会提供】

写真２　85 年調査土器出土状況２【東栄町教育委員会提供】

写真３　85 年調査土器棺墓検出状況【東栄町教育委員会提供】

写真５　引田遺跡の現況（北東より・2004 年撮影）

っていた当遺跡は、戦前よりの報告・調査によって古くから知られた遺跡である。明治期の研究動向については、上で述べた通りである。

戦後すぐに当地に高校が建設され、大量の遺物が出土したという。その後も校地の整理や校舎の拡張工事などで、土器棺墓８基や平地式住居跡が見られたとのことである。1955 年の校地整理時に住居跡が見つかり、庄田靖彦によって調査が行われた。住居跡は１辺約３ｍの隅丸方形を呈し、主柱穴は４本、中央には河原石によると思われる石囲炉が作られている。住居跡内からは大洞 C2 式の土器が出土していると

されている。また、土器棺墓がこれまで数基出土しているが、弥生時代以降に属するものと考えられる。

近年、小学校新設に伴う、試掘調査が東栄町教育委員会によって行なわれた。1×2m のトレンチを調査対象地域内で９ヶ所を任意に設定して調査が行われた。その中で、T-5・T-6 としたトレンチから炭化物を含む多量の遺物を含む包含層が、良好な状態で存在することが明らかとなった（写真７）。明治時代の地籍図を参照すると、現況ではグランドの整地によって北東および東方向に平坦面が伸びているが、この付

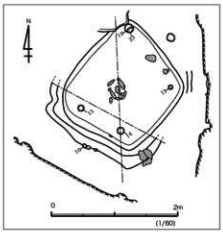


図６　本郷桜平遺跡の竪穴建物跡

写真６　本郷桜平遺跡の竪穴建物跡（南東より）【東栄町教育委員会提供】

近にはかつては水田が展開しており、地形が下がることが窺えられる（図８）。今回の調査成果と、遺跡分布地図や地籍図からの情報を総合すると、遺跡の範囲は北東方向の傾斜地の縁辺部に、約 200×100m の三日月状の範囲に遺跡が展開している可能性が考えられるといえる（図７）。

遺物は土器類と石器・石製品に分けられる。土器類は縄文時代晩期中葉以降から晩期末・弥生時代以降にかけて見られ、深鉢のみならず、有文浅鉢も見られる。土製品では土偶が特に注目される。土偶は胴部部分と考えられ、表裏両面に沈線が１条ずつ見られる。この事例が、現在までのところ東栄町内唯一のものとなっている。石器・石製品では石鏃・石錐・打製石斧・磨製石斧・磨石敲石類・切目石錘・有溝石錘・石棒・石剣・石冠・環状石斧・環石などが見られる。当遺跡の特徴として、有頭石棒の残存が良好なことや凝灰岩で作られている環石が多く出土していることが挙げられる。また、石冠が１点存在する。石冠は飛騨地域を中心に東日本一帯に見られる遺物であるが、愛知県内では約 30 遺跡からおよそ 60 点、尾張より渥美半島を含めた東三河に多いとされる。石冠は東栄町ではこの１例のみの確認となるが、近隣では豊根村宮嶋遺跡や鳳来町西向遺跡でも報告されている。

６．今回の調査の意義

ここで、両遺跡で明らかになった事実について、その意義を述べておく。

引田遺跡においては、これまで知られていた条痕文期のみならず、縄文時代後期前葉～中葉の時期を中心とする時期にも遺跡形成がなされていたことが明らかになった。主要遺構としては土器埋設遺構と配石遺構がある。条痕文期が字引田から字中貝津の西側にかけて広く展開するのに対して、後期前葉～中葉の主たる範囲は遺跡のより西側を中心とするものと考えられる。周囲で同様に配石遺構が確認されている遺跡には、静岡県浜松市天竜区佐久間町の半場遺跡が古くから知られている。形成時期も縄文時代後期前半と、引田遺跡の事例と併行する。両者の距離は直線で 13.4km ほどあり、それぞれの遺跡が縄文時代後期の複合的な活動を行なった場所とすれば、別集団の活動場所であったと想定することが可能といえる。その他、東栄町内での後期前葉～中葉を主体とする遺跡では、大屋路遺跡で注口土器が大型破片の状態で出土していることが知られている。

一方、本郷桜田平遺跡は、晩期中葉以降から遺跡形成が活発化し、弥生時代前期の条痕文期まで継続する。これまでの調査で、土器棺墓と竪穴建物跡が見つかっており、豊川市の麻生田大橋遺跡と同様の活動時期であったといえる。上述した引田遺跡でも、以前から条痕文期の土器棺墓がまとまって見つかっている。引田遺跡

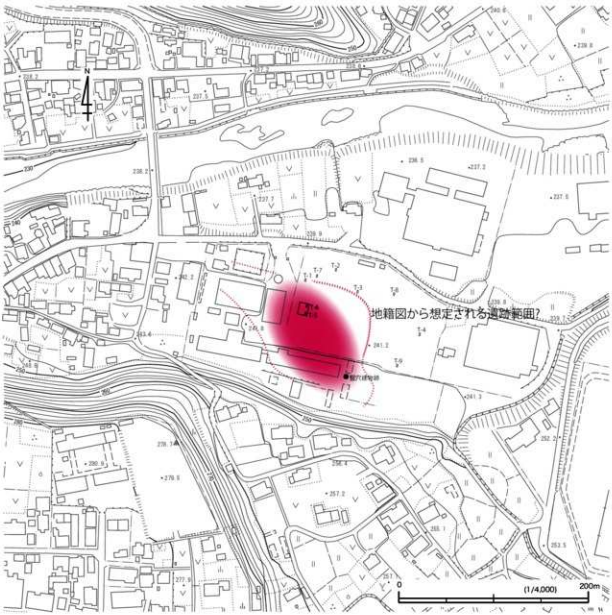


図7　本郷桜平遺跡全体図1

と本郷桜平遺跡の距離は、直線で4kmほどである。埋葬遺構と遺物を多量に含む包含層の形成など、複合的な活動を行なった遺跡が、後期の段階よりも密に出現している傾向があり、条痕文期の糸百合遺跡もそのような状況の中で遺跡形成が行なわれたものと考えられる。

東栄町周辺も視野に入れて遺跡分布をみると(図9)、縄文時代後期から晩期前半と晩期後半以降とでは、前者の遺跡が多く見つかる作手地区と後者の遺跡の多い新城市風来地区北西域という差はあるものの、他の地区では、両者の遺跡が散在している様子が窺えられる。ところ

写真7　本郷桜平遺跡T-6包含層検出状況(西より)

図７　本郷桜平遺跡全体図２

が、縄文時代後期の様相に比べて、晩期後半以降（一部条痕文期を含む）の様相では遺跡間距離が狭くなる傾向がある。痕跡の残る形での活動内容の顕在化ということになるであろうが、その社会的要因を、今後検討する必要がある。

7．今後の課題

本稿では、近年の調査成果をもとに、引田遺跡と本郷桜平遺跡について紹介し、両遺跡は当地域の縄文時代後期から弥生時代にかけての変遷を考える上で重要であることを示した。東栄町・設楽町の町境付近は、矢作川水系・豊川水系・天竜川水系の河川の水源が迫っている地域であり、現況でも設楽盆地では、縄文時代後晩期の遺跡が集中する地域として知られている。今回は、引田遺跡と本郷桜平遺跡の分析結果（図９）の提示に留まったが、その他各遺跡についてもできる限り詳細な様相を検討し、各遺跡の特性を加味した上で、再度遺跡分布の問題を検討すべきと、筆者は考えている。今回は、今後の検討を行なうための覚書として提示するものである。

一方で、図９の範囲内で、宇連川流域に当該時期の遺跡が知られていない点は、注目される。図２と比較すると、この場所は設楽層群の東側に当たり、ここは、ガラス質の熔結凝灰岩が分布している地域からはずれる範囲である。一方、設楽層群の北から西側にかけては、少ないながらも後晩期の遺跡の展開が確認できる。図９内の宇連川流域で、今後も新規の遺跡が確認されないのであるならば、この石材の分布域と遺跡所在の有機性を考える、好例になるかもしれない。

このことは、拙速には結論を出せないことであるので、今後の課題として提示しておく。

謝辞

本稿は、永井宏幸氏と筆者による東栄町立民芸館での所蔵資料調査作業が基となっている。また、記録に際しては、石黒立人・宮腰健司・堀木真美子・長田友也・増子康眞の各氏のご協力を賜った。この調査の機会と本稿の作成にご協力賜った、東栄町教育委員会の金田新也氏に

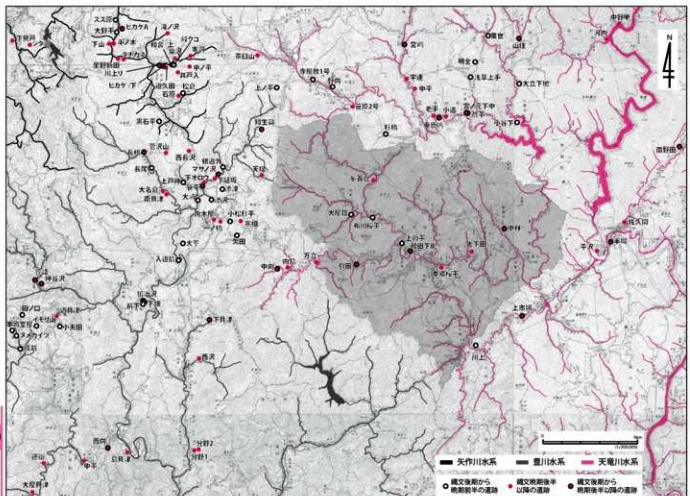


図9　東栄町域周辺の縄文時代後晩期（一部条痕文期を含む）主要遺跡分布図
（国土地理院刊行５万分の１地形図「明智」「足助」「御油」「根羽」「田口」「三河大野」「天竜」「佐久間」「満島」より）

は、感謝の念を絶えない。本郷桜平遺跡の調査は、愛知県教育委員会文化財保護室の伊藤太佳彦氏の支援で行なわれたことを付記しておく。

なお、本稿は、2012年9月22日・23日に南山大学で行なわれた、三河山間部研究会の発表内容である。発表の機会を与えていただいた、黒沢　浩氏にはお礼申し上げる次第である。

参考文献

夏目一平・窪田五郎,1925「三河国北設楽郡本郷町字桜平石器時代遺跡に就いて」『考古学雑誌』15-8.22～26頁。考古学会。
小栗鐵次郎,1932「北設楽郡に於ける先史時代及原始時代の遺蹟」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』10. 愛知県。
紅村弘,1963『東海の先史遺跡　総括編』名古屋鉄道。
鈴木冨美夫・岡田松三郎ほか,1968『北設楽郡史』原始-中世。　北設楽郡史編集委員会。
小畑頼孝ほか,1985『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編1. 愛知考古学談話会。
沢井誠・設楽部研グループ,1988「南設亜層群」『日本の地質　中部地方II』123～125頁。東京　共立出版
松田訓編,1992『上の平遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第41集。
加藤安信・宮腰健司,2003『愛知県史資料編2　考古2　弥生』愛知県。
永井宏幸・川添和暁,2005『東栄町立民芸館所蔵遺物調査報告書』愛知県埋蔵文化財センター。（東栄町提出報告書）
東栄町誌編集委員会,2007『東栄町誌　自然・民俗・通史編』東栄町。
川添和暁,2007「東海地方の諸遺跡」『季刊考古学』101.76～81頁。東京　雄山閣

愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第14号
2013.5
11-22p

知多式以前

—松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器—

早野浩二

松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器を改めて分類し、編年的位置、系譜、出土状況について検討した。その結果、松崎遺跡における知多式０類以前の製塩土器は系譜が不連続であることを確認した。また、土器製塩の操業も小規模で、知多式１類以降の操業とは明らかな飛躍があることを示した。

はじめに

伊勢湾・三河湾沿岸における脚台式製塩土器については、立松彰（立松 1994）、森泰通（2005）による基礎的な研究がある。研究の流れと、論点の整理もこれらに詳しい。東海市松崎遺跡・上浜田遺跡は古墳時代から古代を通じて知多式製塩土器による土器製塩を大規模に行った知多半島随一の遺跡で、1976 年（松崎貝塚第１次・第２次発掘調査）、1998 年（上浜田遺跡発掘調査）、2004 年（松崎遺跡確認調査）に東海市教育委員会、1988・1989 年、2008・2009・2012 年に愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施されている（杉崎他 1977、立松他 1984、立松・永井 1999・2005、福岡他 1991）。

その松崎遺跡の脚台式製塩土器については、第１次調査Ⅰ区において出土した１点が「５類」として呼称され、「渥美式第１様式（A 類）に通ずるもの」で、田原市青山貝塚（遺跡）の調査を参考にして、その帰属時期は「５世紀後葉」か「少しさかのぼる」時期に求められた（杉崎他 1977）。同様の脚台式は第２次発掘調査Ⅵ区の「地山面上に堆積する」９層においてややまとまって出土し、改めて青山遺跡における渥美式Ａ類の出土状況に類似することが指摘された（立松他 1984）。

立松彰はこれらの脚台式製塩土器を「松崎類」として呼称し、渥美式Ａ類も含めて大阪湾沿岸の脚台Ⅱ式の影響下で成立したことを推察した（立松 1994）。松崎類の時期については、東海市塚森遺跡など知多半島基部において

図１　松崎遺跡・上浜田遺跡と関連遺跡の位置

出土する「塚森類」が脚台Ⅲ式に類似することから、松崎類から塚森類への変遷を想定しながらも、青山遺跡における出土状況を参照して、松崎類が大阪湾沿岸の編年より新しい「宇田式併行期」に相当するとした。また、これらよりやや法量が大きい松崎遺跡の脚台式製塩土器は「甕？」の「小型の台脚」として扱われ（立松他 1984）、「能登類似」ともされた。

松崎類の比較対象とされる渥美式Ａ類については、森田勝三が法量（脚径）を基準にＡ類１、Ａ類２、Ａ類３に細分し、時期については、Ａ類１を田原市畠貝塚における出土状況から「古墳時代前期前葉の４世紀初頃」、Ａ類３とそれに後続するＢ類を青山遺跡等における出土状況からそれぞれ「５世紀代」、「５世紀末から６世紀初頭頃」に、Ａ類２を伴出遺物は明らかでないとしながらも、Ａ類１とＡ類３の中間の「４世紀代」に想定した（森田 2001）。なお、渥美式Ａ類の呼称については、他の渥美式の細分に従って、以下、Ａ１類、Ａ２類、Ａ３類と呼称する（立松 2010 b）。

改めて脚台式製塩土器を包括的に検討した森泰通は、塚森類が松崎類に先行するとして、松崎類から「不定型な一群」を介して、知多式0類（立松・永井1999）が成立する過程を想定した（森2005）。また、渥美式A類については、A1類とA2類・A3類が時間的に連続しないことを指摘し、両者の系譜が異なることを示唆した。さらに、松崎遺跡出土の渥美式A1類に類似する一群から、渥美式A1類に遅れることなく、知多半島においても土器製塩が行われた可能性をも示唆したが、詳細は保留とした。

以上のように、松崎遺跡・上浜田遺跡における脚台式製塩土器は、その編年的位置と系譜に対する理解が不安定で、大阪湾沿岸、渥美半島の脚台式との対応関係にも課題を残している。小文においては、愛知県埋蔵文化財センターによる2008年度・2012年度調査の新出資料を含め、改めて松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器の分類、編年的位置、出土分布を検討することで、より整合的な把握を試みることとしたい。

1．分類

分類

愛知県埋蔵文化財センターによる2012年度調査分までを含めて、松崎遺跡・上浜田遺跡において出土している脚台式製塩土器を「松崎A類」、「松崎B類」、「松崎C類」、「その他」に分類する。分類の基準は法量（計測方法を図2に示す）、胎土・色調、焼成に依拠するが、「知多式0類」を含め、色調と焼成は各型式で明確に異なり、識別は比較的容易である（図3・表1）。

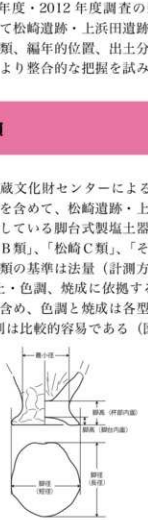


図2　脚台式製塩土器の計測方法

松崎A類（図3-1～13）

淡橙色から橙色を呈し、焼成はやや軟質である。砂粒がわずかに混入する。計13個体が出土している。脚台の法量から脚径7cm前後のA1類（1～6）、脚径6cm前後のA2類（7～13）に細分される。

A1類は6個体の計測値が脚径7.2～7.4cm（平均7.3cm）、脚高（脚台内面）0.6～1.0cm（平均0.8cm）、最小径4.2～5.6cm（平均5.0cm）で、杯底部が平坦なものが多い。A2類は7個体の計測値が脚径5.4～6.6cm（平均6.1cm）、脚高0.6～1.6cm（平均1.3cm）、最小径3.4～4.0cm（平均3.7cm）で、脚端部は内面に折り返される。

松崎B類（図3-14～18）

愛知県埋蔵文化財センター2008・2012年度調査において新たに出土した脚台式製塩土器で、計5個体を抽出した。黄橙色を呈し、堅緻に焼成されるが、いずれも脚台下半には黒斑を生じている。砂粒の混入は少ない。脚径4.5cm前後で、5個体の計測値は脚径4.1～4.8cm（平均4.5cm）、脚高1.9cm（平均1.9cm）、最小径3.8～4.1cm（平均4.0cm）で、A類と比較して脚径は小さいが、脚高が大きい。

松崎C類（図3-21～47）

既定の「松崎類」に対応する脚台式製塩土器で、計27個体が出土している。赤褐色から褐色を呈する。堅緻に焼成され、黒斑はほとんど認められない。脚径（短径）3～4cm前後で、後述のC0類（21・22）を除く25個体（23～47）の計測値は脚径3.0～4.4cm（平均3.7cm）、脚高0.0～0.9cm（平均0.4cm）、最小径2.2～3.4cm（平均2.6cm）で、脚下端はいずれも押し広げられた状態（23～27）か、つまみ出したままの状態（28）で、不整な楕円形を呈するものも多い。

上浜田遺跡においては、脚径4.6～4.8cm（平均4.7cm）、脚高1.0～1.3cm（平均1.15cm）、最小径2.4～2.7cm（平均2.55cm）で、脚径と脚高が大きい個体が2個体出土しているが、胎土、焼成の類似から松崎C類に含めた。21は「不定形な一群」にも含められるもので（森2005、立松2010）、脚高が高い。22は脚端部を内面に折り返す。個体数が少なく形

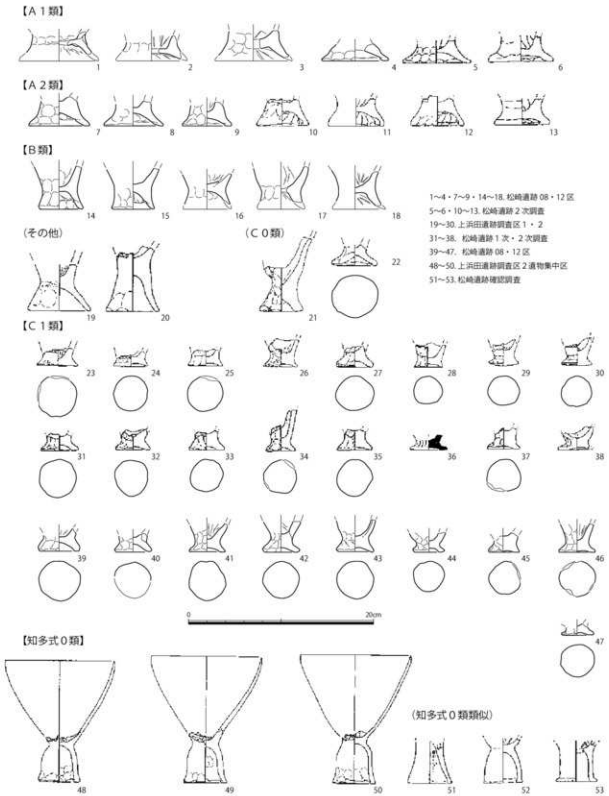


図 3　松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器（松崎類）・知多式 0 類（1:4）

表1　松崎遺跡・上浜田遺跡脚台式製塩土器・知多式0類一覧（網掛は既報告資料）

分類	番号	報告書番号	調査区	グリッド	遺構・層位	計測値（cm）				
						脚径（長）	脚径（短）	脚高（杯）	脚高（脚）	最小径
松崎A1類	1		08B	10C15n	2005SD	-	-	-	-	5.6
	2		08B	10C14o	2007SD	-	-	-	-	5.4
	3		08B	10C16n	2009SI	-	-	-	-	5.6
	4		08B	10C17n	B-F層漸化層	7.2	-	-	-	-
	5	図版13-28	松崎2次	VIIC	9層	7.4	-	1.6	1.0	4.2
	6	図版13-29	松崎2次	VIIC	9層	7.2	-	1.4	0.6	4.2
松崎A2類	7		08B	10C6o	B-客土1	6.6	-	2.7	1.5	3.8
	8		08B	10C9o	撹乱	6.4	-	2.0	1.4	3.8
	9		08B	10C6o	B1調査区	5.4	-	1.5	0.9	3.4
	10	図版12-1	松崎2次	VIIC	10層	6.4	-	2.4	1.6	3.6
	11	図版6-18	松崎2次	VIIC	11層	6.0	-	2.1	1.6	4.0
	12	図版6-17	松崎2次	VIIC	11層	5.8	-	2.4	1.5	3.6
	13	図版6-30	松崎2次	VIIC	9層	6.0	-	1.6	0.6	4.0
松崎B類	14		08B	10C15o	2012SK	4.8	-	2.4	1.9	3.8
	15		08B	10C15o	2012SK	4.1	-	2.7	1.9	4.0
	16		08B	10C15o	2005SD	-	-	-	-	4.0
	17		08B	10C15o	2012SK	-	-	-	-	4.1
	18		08B	10C15o	2020SK貝層	-	-	-	-	4.0
その他	19	第25図11	上浜田	調査区1G3		5.2	-	2.7	1.8	2.7
	20	第25図12	上浜田	調査区1G2/3		4.3	-	4.4	3.0	2.7
松崎C0類	21	第25図10	上浜田	調査区1F1	混貝黒褐色砂層	4.8	-	3.0	1.3	2.8
	22	第25図9	上浜田	調査区2H11	黒—黒褐色砂層	5.0	4.6	1.9	1.0	2.4
松崎C1類	23	第25図7	上浜田	調査区2I11	黄色砂層	4.4	4.4	0.7	0.1	3.2
	24	第25図3	上浜田	調査区1F1	黒色砂層	3.7	3.7	1.0	0.3	3.1
	25	第25図4	上浜田	調査区1FG2		3.7	3.7	1.0	0.3	3.0
	26	第25図5	上浜田	調査区1H2	褐色砂層	3.7	-	1.5	0.3	2.6
	27	第25図8	上浜田	調査区1G3	褐色砂層	4.1	3.7	1.7	0.6	2.3
	28	第25図6	上浜田	調査区1H3	黒色砂層	3.1	3.0	1.0	0.3	2.6
	29	第25図2	上浜田	調査区1H3	黄褐色砂層	3.4	3.1	1.8	0.0	2.2
	30	第25図1	上浜田	調査区1H2	褐色砂層	3.3	3.3	1.6	0.0	2.2
	31	図版13-33	松崎2次	VIIC	9層	4.1	4.0	1.4	0.6	2.6
	32	図版13-31	松崎2次	VIIC	9層	3.9	3.5	1.3	0.4	2.6
	33	図版13-34	松崎2次	VIIC	9層	3.7	3.4	1.8	0.4	2.4
	34	図版13-36	松崎2次	VIIC	9層	3.6	-	1.4	0.4	2.3
	35	図版13-32	松崎2次	VIIC	9層	4.0	3.8	2.2	0.3	2.3
	36	第7図38	松崎1次	第1区A区	黒褐色土層	4.0	-	1.0	0.3	2.4
	37	図版7-26	松崎2次	VIIC	北貝層	3.6	-	2.0	0.3	2.4
	38	図版12-17	松崎2次	採集品		4.0	-	1.2	0.2	2.4
	39		08B	10C9o	撹乱	4.5	4.2	1.5	0.9	3.4
	40		08Aa	8C7t	D層	3.9	3.9	1.5	0.8	2.9
	41		12A2	930735	灰黄褐色腐植質砂	4.3	4.0	1.4	0.5	2.8
	42		08B	旧調査区	旧調査区	4.0	4.0	2.0	0.5	2.4
	43		08B	10C6o	第1面検出	4.0	4.0	1.7	0.4	2.8
	44		12A2	930730	黒褐色灰黄色褐色葉理	3.4	3.4	1.2	0.4	2.5
	45		08B	10C10p	B-H-1層	3.5	3.5	1.0	0.3	2.3
	46		12A2	930735	黒褐色灰黄色褐色葉理	4.0	3.9	1.3	0.2	2.5
	47		08B	10C10o	2013SD東半	3.3	3.3	1.7	0.2	2.4
知多式0類	48	第25図14	上浜田	調査区2G11	混貝黒褐色砂層	4.5	-	4.3	3.9	2.6
	49	第25図15	上浜田	調査区2G11	混貝黒褐色砂層	4.7	-	4.7	3.8	2.8
	50	第25図16	上浜田	調査区2G11	混貝黒褐色砂層	4.7	-	5.0	4.1	2.5
0類頸部	51	図版11-134	松崎Tr7	IIIF8m	灰黄褐色砂（地山直上）	4.7	-	-	-	-
	52	図版11-135	松崎Tr4	IIIK5o	混貝暗黄褐色砂	4.3	-	4.2	3.3	2.6
	53	図版11-136	松崎Tr7	IIIF8m	暗黄褐色砂	4.5	-	-	-	3.6

写真１　自然釉が付着したような光沢（知多式１Ａ１類）

式的に安定しないこれらの一群を特に松崎Ｃ０類とする。

その他（図３-19・20）

上記のいずれにも属さない脚台式製塩土器２個体を「その他」とした。脚径は松崎Ａ類（Ａ２類）と松崎Ｃ類（Ｃ０類）の中間的な数値を示す。19はいわゆる「倒杯形」の形状で黒褐色を呈する。20は脚高が高く、筒形脚に近い形状で、「知多式祖形」ともされるが、赤褐色の色調は後述の知多式０類よりも先述の松崎Ｃ類に類似する。

知多式０類（図３-48 ～ 50）

上浜田遺跡において３個体が出土している。類似例（51・52）は東海市教育委員会による松崎遺跡の確認調査等においても出土しているが（立松・永井2005）、愛知県埋蔵文化財センター2008・2012年度調査を含めた他の調査区に確実な０類の出土例は認められない。

知多式０類の脚端部は内面に折り返され、下端は板に押さえつけられたような平坦面を有する。淡黄色を呈し、著しく緻密な胎土で、堅緻に焼成される。直後の知多式１Ａ１類には外面に自然釉が付着したような光沢を生じている個体（写真１）も認められることからも、知多式０類・１類と松崎Ｃ類、あるいは「不定形な一群」を含めた脚台式製塩土器には明らかな製作上の飛躍がある。

２．編年的位置

編年

以下、三河湾沿岸の清水式、渥美半島の渥美式を含めて、伊勢湾・三河湾沿岸の脚台式製塩土器の編年的位置を確認する。土器編年との対比に際しては、主として濃尾平野の廻間式・松河戸式・宇田式編年（赤塚1990・1994・1997、赤塚・早野2001、早野2011）、河内地域の庄内・布留式編年（西村2008）を参照した（表２）。

清水式

高浜市王江遺跡、西尾市清水遺跡等において出土している脚台に叩き調整を施した清水式（清水式１類）は、大阪湾沿岸の脚台Ⅰ式に類似する。脚台Ⅰ式は弥生時代後期後半から庄内式併行期（下田Ⅰ式からⅡ式）に存続し（西村1996、河田1996）、清水式の編年的位置の一端も同時期に求められる。より詳細には、王江遺跡の脚台が脚台Ⅰａ式と脚台Ⅰｂ式（宮地2000）の中間的な法量を示すこと、王江遺跡において出土しているＳ字甕Ａ類を模倣した甕が全体的な器形から廻間Ⅰ式４段階から廻間Ⅱ式１段階（早３期から早４期）に対比されることから（森2005）、王江遺跡の脚台式製塩土器はおよそ庄内式古段階に対応する可能性が高い。

また、叩き調整を省略したやや小型の清水式２類を含む清水遺跡の脚台式製塩土器は、王江遺跡にやや後出する時期、廻間Ⅱ式２段階から３段階（早４期から早５期）、庄内式中段階から新段階との対応を想定しておきたい。

松崎Ａ類（渥美式Ａ１類）

松崎Ａ類は脚台の形状と法量、脚端部を内面に折り返す特徴、胎土や色調が畠貝塚（森田2001）等において出土している渥美式Ａ１類（図３-１～12）に類似する。渥美式Ａ１類は杯部の形状、脚台の法量が大阪湾沿岸の脚台Ⅱ式に類似し（立松1994、森2005）、脚台Ⅱ式は庄内式から布留式初頭併行期（下田Ⅱ式から Ⅲ式初頭）に存続することから、渥美式Ａ１類、松崎Ａ類の編年的位置の一端も同時期、廻間Ⅱ式１段階から Ⅲ式１段階（早４期から前１

期）に求められる可能性がある。なお、脚台Ⅱ式は纒向２式（新）の奈良県桜井市纒向遺跡東田地区南溝（南部）中層におけるＳ字甕Ａ類・Ｂ類、パレス・スタイル壺を含む東海系土器群（石野・関川 1976）、庄内式古段階新相（西村 2008）の大阪府八尾市久宝寺遺跡・竜華地区531 井戸における「東海系」の高杯の共伴（西村他 2004）から、廻間Ⅱ式前半（早４期）との接点が求められる。

畠貝塚においては、およそ廻間Ⅱ式からⅢ式併行期（早４期から前３期）の土器が出土しているが、渥美式Ａ１類、松崎Ａ類の帰属時期を特定することは難しい。渥美式Ａ１類が廻間Ⅱ式１段階からⅢ式１段階（早４期から前１期）に対応することを想定して、松崎遺跡、あるいは知多半島における土器製塩の開始も同時期に求められる可能性も示唆されているが（森 2005）、杯底部の厚さなど脚台Ⅱ式との相違（脚台Ⅱ式からの変容）も無視できないこと、松崎遺跡・上浜田遺跡に松河戸Ⅰ式１段階（前４期）以前の土器がほとんど認められないこと、すでに問題視されているように、渥美式Ａ１類と渥美式Ａ２類の帰属時期に著しい懸隔が生じること（森 2005）をも考慮して、渥美式Ａ１類と松崎Ａ類の存続時期（下限）が廻間Ⅲ式（前１期から前３期）、布留式古段階から中段階にまで下降する余地を残しておきたい。

松崎Ｃ類（渥美式Ａ２類・Ａ３類）

松崎Ｃ類は脚台の形状と法量が田原市貝の浜貝塚、青山遺跡を中心にして出土している渥美式Ａ３類（図４-21 ～ 44）に類似する。ただし、松崎Ｃ類が赤褐色から褐色に堅緻に焼成される

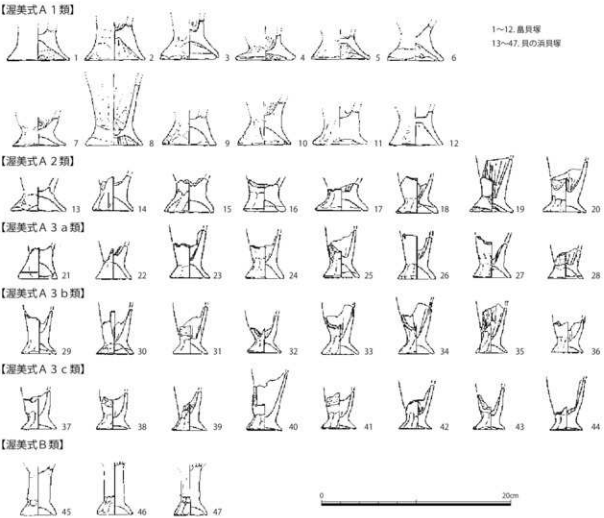
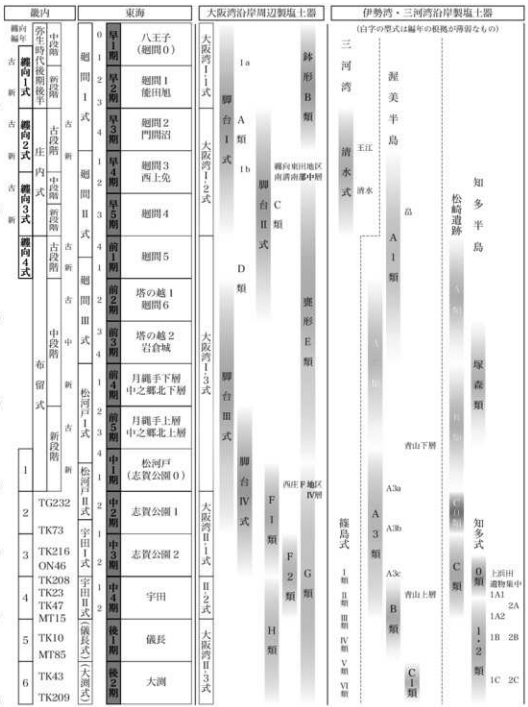


図４　渥美半島（伊川津砂嘴）の脚台式製塩土器（1:4）

表1　編年対比表



織向編年（関川 1976）　畿内庄内・布留式（西村 2008）　畿内古墳時代中・後期土師器（辻 1999）
東海（赤塚 1990・1994・1997、赤塚・早野 2001、早野 2011 改）
大阪湾沿岸製塩土器（広瀬 1988、河田 1996、宮地 2000、植山 2004）　伊勢湾・三河湾製塩土器（森 2005 改、立松 2010 a・b 他）

特徴が松崎A類と大きく異なるのに対して、渥美式A3類が淡橙色にやや軟質に焼成される特徴は、渥美式A1類、A2類、B類と大きく異なることはない。松崎類と渥美式A類の胎土の相違については、すでに立松彰も指摘している（立松 1994・2010 a）。

また、貝の浜貝塚の渥美式A3類（143個体）は脚高により脚高1.1～1.7cmのA3a類（図3-21～28）、脚高0.6～1.0cmのA3b類（図3-29～36）、脚高0.2～0.5cmのA3c類（図3-37～44）に区分され、脚高が高いものが「丁寧に脚を作り出して下端も平坦で円形のものが多」く、脚高が低いものが「横に円盤状に広げたような形態」で「平坦面を作り出さず楕円形のものが多い」ことから、脚台により近いA3a類からA3b類、A3c類への形態変化が想定されている（立松 2010 b）。松崎C類は渥美式A3類でもA3b類、A3c類に対応し、A3a類に対応する個体は認められない。一方、松崎C類には（脚台がより形骸化した）脚台内面の窪みが完全に消失し、脚台底面が突出した個体（図3-29・30）までもが認められるが、同様の個体は渥美式A3類には認められない。このことから松崎C類は貝の浜貝塚の渥美式A3類にやや後出すると思われる。

問題は渥美式A1類に後出する渥美式A2類、A3類の編年的位置である。渥美式A2類の脚台の法量は大阪湾沿岸の脚台Ⅲ式に近似し、渥美式A3類、松崎C類の脚台の法量は脚台Ⅲ式と脚台Ⅳ式の中間に位置する（森 2005）。これを重視すれば、渥美式A2類が布留式中段階から新段階、廻間Ⅲ式2段階から松河戸Ⅰ式（前2期から前5期）、渥美式A3類が松河戸Ⅱ式から宇田式（中1期から中4期）に対応し、（渥美式A2類に後出する）松崎C0類は松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式、（貝の浜貝塚の渥美式A3類にやや後出する）松崎C類は宇田式に対応することが予測される。

貝の浜貝塚においては、渥美式A2類に対応する脚径4.2～5.4cmの脚台式製塩土器（図3-13～20）が165個体中22個体含まれ、同貝塚においては、廻間Ⅲ式2段階（前2期）に併行する小型器台と丸底鉢も出土していることから（立松 2010）、渥美式A2類の上限も同時期に求められる可能性がある。

青山遺跡における渥美式A2類、A3類の出土状況を改めて検討した結果を参照すると、青山遺跡 1949 年調査A地点竪穴上層に渥美式A2類、A3類と東山11号窯式期の須恵器、同C地点竪穴にA3類と東山11号窯式期の須恵器、1953 年調査B地点貝層と 1966 年調査第1号竪穴住居にA2類、A3類、B類と東山11号窯式期（から東山10号窯式期）の須恵器が共伴することされる（芳賀 1959、小林 1987、森田 2001、森 2005）。森泰通は以上の出土状況を重視して、渥美式A2類とA3類は同時期の法量差を示すものの、両者はほぼ東山11号窯式期に対応するとした。ただ、渥美式A2類は 1949 年調査A地点竪穴にのみ含まれ、同竪穴下層において出土する土器は松河戸Ⅰ式4段階から松河戸Ⅱ式1段階（中1期）の土師器を主体とすることから、渥美式A2類の時期の一端、渥美式A2類からA3類への推移が同時期に求められる余地も考慮しておきたい。

なお、大阪湾沿岸周辺で脚台Ⅳ式はほとんど単独で出土せず（広瀬 1988、積山 2004 など）、和歌山県和歌山市西庄遺跡F地区包含層（Ⅳ層）においては、脚台Ⅲ・Ⅳ式（図5-3～6、積山洋による分類のD類）と甕形の製塩土器（同10～12、同E類）、丸底式の初現とされる製塩土器（同7～9、同F1類）が混在する（冨加見他 2003）。同Ⅳ層は、石敷製塩炉の基盤となるⅢc層下位に堆積する須恵器を含まない遺物包含層で、S字甕D類新段階（同1）と宇田型甕1類（同2）が共伴する*。このことからも、大阪湾沿岸において脚台式から丸底式に交替する時期（積山編年における大阪湾Ⅰ式からⅡ式への変化）は松河戸Ⅱ式（中1期から中2期）に接点が求められ、脚台Ⅲ式・Ⅳ式（D類）と渥美式A2類・A3類との接点を同時期に担保

* 西庄遺跡F地区包含層（Ⅳ層）出土の「東海系の台付甕」として、1点のS字甕D類新段階（図5-1）が報告されているが、別個体の可能性が高い宇田型甕1類（同2）が含まれていることを確認した。両者は伊勢湾沿岸から搬入された個体である。同層において出土している脚部（同3）は脚台式製塩土器の可能性も示されているが、（S字甕またはS字甕以外の）台付甕の脚部で、S字甕、宇田型甕と同様に伊勢湾沿岸から搬入された可能性がある。なお、同地区の包含層（Ⅲ～Ⅳ層）において、鉄鍛が出土していることも興味深い。

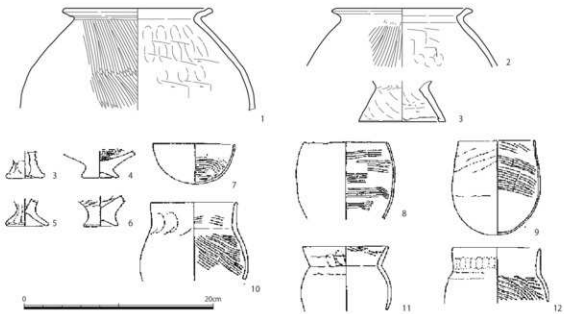


図５　西庄遺跡Ｆ地区包含層（Ⅳ層）出土Ｓ字甕・宇田型甕と脚台式・甕形・丸底式製塩土器（1:4）

することも可能である。

松崎Ｂ類

近隣地域に松崎Ｂ類に類似する脚台式製塩土器は認められず、編年的位置を推断するのは難しい。法量（脚径）は松崎Ａ類と松崎Ｃ類の中間に位置（渥美式Ａ２類に対応）し、焼成具合が松崎Ａ類と松崎Ｃ類の過渡的な位置にあると考えられることを重視すれば、編年的位置も松崎Ａ類と松崎Ｃ類の中間、松河戸Ⅰ式から松河戸Ⅱ式（前４期から中２期）に求められる。つまり、備讃Ⅳ式（大久保 1994）・脚台Ⅲ式に類似し、松河戸Ⅰ式との対応が想定される塚森類*（図６）とも時期が重複する可能性が推測される。

知多式０類

知多式０類はすでに報告されているように（立松・永井 1999）、上浜田遺跡調査区２遺物集中部において宇田Ⅱ式１段階（中４期古）の土師器、城山２号窯式の須恵器を伴い、編年的位置も同時期に求められる。つまり、松崎Ｃ類とも時期が重複する可能性が高い。

* 塚森類の大半は塚森遺跡（立松他 1984）、トヽメキ遺跡（立松他 1988）で出土しているが、塚森遺跡は 10 点中８点が脚径 3.9 ～ 4.8cm、トヽメキ遺跡は９点中８点が脚径 3.5 ～ 3.8cm で、若干の法量差がある。また、前者はくすんだ黄褐色でやや堅緻、後者は灰白色のやや軟質な焼成で、脚台には叩き調整が表面化するものが多い。両遺跡の様相差が時期差を反映している可能性もあるが、前後関係を含めて詳細を明らかにすることは難しい。

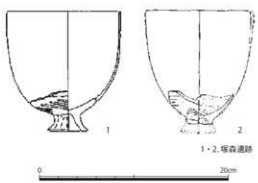


図６　塚森類製塩土器（1:4）

３．出土分布

各型式の脚台式製塩土器と知多式０類の分布は愛知県埋蔵文化財センター調査 08 Ｂ・12 Ａ区北部から第１次・第２次発掘調査Ⅰ区・Ⅵ区・Ⅶ区にかかる南北約 80 m、東西約 20 mの範囲、上浜田遺跡（東海市教育委員会 1998 年調査区）の南北約 20 m、東西約 20 mの範囲、標高 3.0 m付近の微高地南西端付近にほぼ限定される（図７）。前者の分布域を松崎地区、後者を上浜田地区とすると、Ａ１類、Ａ２類、Ｂ類は松崎地区のみ、Ｃ０類と知多式０類は上浜田地区のみの 10 mから 20 m程度の範囲に、Ｃ類は両地区の 30 mから 40 m程度の範囲にまとまっ

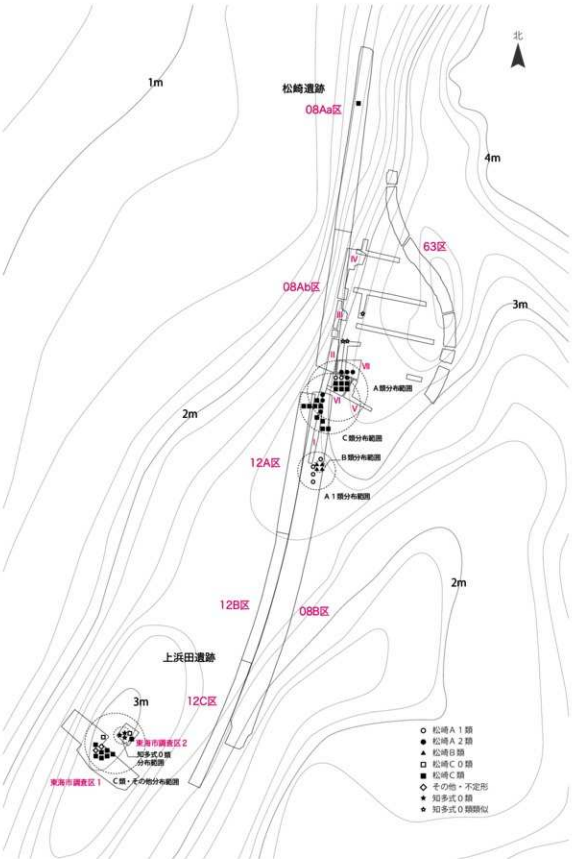


図7　松崎遺跡・上浜田遺跡における脚台式製塩土器（松崎類）と知多式0類の分布（1:2,500）

て分布する状況を示す。なお、松崎地区において先行するＡ１類、Ａ２類、Ｂ類がＣ類の縁辺に分布する傾向は、Ｃ類による土器製塩に際して作業面が更新され、先行するＡ１類、Ａ２類、Ｂ類の脚台式製塩土器が周囲に二次的に移動したことを示している可能性がある。

また、知多式０類が出土した付近に知多式１類は出土せず、上浜田地区においては０類に後続する１Ａ１類は出土していない（１Ａ２類以降の型式が出土）。一方、東海市教育委員会による松崎遺跡の確認調査において出土した０類類似とされる製塩土器は、１Ａ１類を多く含む１類の廃棄層付近において出土している。

前段における編年的位置を参照すると、松河戸Ⅱ式（中１期から中２期）以前はＡ１類、Ａ２類、Ｂ類による土器製塩が松崎地区においてのみ、松河戸Ⅱ式から宇田Ⅱ式（中２期から中４期）にはＣ類による土器製塩が両地区に、知多式０類による土器製塩は上浜田地区においてのみ行われ、知多式１類成立前後には操業が面的に拡大したと推測される。また、出土分布からは、知多式０類と知多式１類による土器製塩は必ずしも連続的な操業ではなかった可能性も看取される。

4．まとめ

松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器の分類、編年的位置、系譜、出土分布について検討した結果を以下に列挙する。

・「松崎類」として一括されていた松崎遺跡の脚台式製塩土器を法量、焼成等からＡ類、Ｂ類、Ｃ類に大別し、Ａ類はＡ１類とＡ２類、Ｃ類はＣ類とＣ０類に細分した。

・大阪湾沿岸の脚台式製塩土器、渥美式製塩土器との対比を通じて、およそ松崎Ａ類が廻間Ⅲ式（前１期から前３期）、松崎Ｂ類が松河戸Ⅰ式からⅡ式（前４期から中２期）、松崎Ｃ０類が松河戸Ⅱ式（中２期）、松崎Ｃ類が宇田式（中３期から中４期）に使用時期の一端があることを想定した。

・松崎Ａ類は渥美式Ａ１類との密接な関係が類推されるが、塚森類を含めてそれに後続する松崎Ｂ類、松崎Ｃ０類は、系譜の脈絡に乏しい。松崎Ｃ類は渥美式Ａ３類に類似するが、胎土、焼成には明らかな差異も表出する。また、松崎類から「不定形な一群」を介したとしても、宇田Ⅱ式１段階前後に成立する知多式０類への連続した変化を認めることは現状においてもなお難しい。

・出土状況から、脚台式製塩土器による土器製塩は知多式０類を含めて、30 mから 40 mの小範囲でごく限定的に行われたと推測され、知多式１類以降の操業とは明らかな飛躍がある。

おわりに

以上にまとめたように、松崎遺跡・上浜田遺跡における知多式０類以前の製塩土器は系譜が不連続で、渥美半島の伊川津砂嘴において、渥美式Ａ類からＢ類まで連続した変化が看取されることとは対照的である。つまり、伊川津砂嘴、渥美半島において渥美式Ａ類からＢ類にかかる土器製塩が継続的で、比較的安定していた点と比較して、松崎遺跡・上浜田遺跡、知多半島における知多式０類以前の土器製塩は操業が不安定であった可能性が高い。知多式１類成立の経緯と背景についても、こうした知多式以前の諸状況を踏まえて改めて評価する必要がある。

知多式の成立後、松崎遺跡・上浜田遺跡における土器製塩は明らかに大規模化する一方、ほぼ同時期、渥美式Ａ３類からＢ類に推移する段階の伊川津砂嘴の製塩遺跡の位置は相対的に低下し、逆に知多式１類の製塩土器ももたらされるようになる。松崎類から知多式製塩土器への交替は、伊勢湾・三河湾沿岸における土器製塩の大きな転換を意味していた。すでに松崎遺跡・上浜田遺跡における土器製塩の歴史的な意義については詳述しているが（早野 2005・2010・2012）、知多式以前の土器製塩の状況から、その意義がより鮮明になったことは確かであろう。

しかし、脚台式製塩土器の編年的位置を推定した根拠はなお薄弱で、層位や伴出遺物に即したより厳密な出土状況の検証が不可欠であろう。また、製塩土器の系譜についても不確かな部分が多く、立松彰や森泰通が指摘するように（立松 1994、森 2005）、能登地域なども含め

た広範な地域との比較検討も必要である。全ては今後の課題としたい。

小文作成の過程において、以下の方々、諸機関のご高配があった。記して感謝する。

積山　洋　　立松　彰　永井伸明　萩野谷正宏
冨加見泰彦　増山禎之　宮澤浩司　森　泰通
田原市教育委員会　東海市教育委員会
和歌山県立紀伊風土記の丘資料館

参考文献

赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第 2 号　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
石野博信・関川尚功 1976『纒向　奈良県桜井市纒向遺跡の調査』橿原考古学研究所・桜井市教育委員会
大久保徹也 1994「岡山県」『日本土器製塩研究』青木書店
河田泰之 1996「大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター調査報告書第 18 集　財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター
小林久彦 1987「青山貝塚出土の土器について」『ホリデー考古』第 7 号　ホリデー考古刊行会
杉崎章他 1977『松崎貝塚』東海市教育委員会
関川尚功 1976「纒向遺跡の古式土師器―纒向 1 ～ 4 式の設定―」『纒向　奈良県桜井市纒向遺跡の調査』橿原考古学研究所・桜井市教育委員会
積山洋 2004「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『季刊考古学・別冊 14　畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣
立松彰 1994「愛知県」『日本土器製塩研究』青木書店
立松彰 2010 a「伊勢湾と三河湾の製塩土器」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
立松彰 2010 b「渥美半島伊川津砂嘴の遺跡―貝の浜貝塚の遺物―」『渥美半島の考古学―小野田勝一先生追悼論文集―』田原市教育委員会
立松彰他 1984『松崎貝塚第 2 次発掘調査報告書　付載　塚森遺跡』東海市教育委員会
立松彰他 1988『トゝメキ遺跡』東海市教育委員会
立松彰・永井伸明 1999『上浜田遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
立松彰・永井伸明 2005『松崎遺跡確認調査報告』東海市教育委員会
辻美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集―』大阪大学考古学研究室
西村歩 1996「和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡』財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター調査報告書第 18 集　財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター
西村歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『シンポジウム「邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和」資料集』香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
西村歩他 2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 118 集　財団法人大阪府文化財センター
芳賀陽 1959「青山貝塚―渥美半島における古代漁村の土器―」『古代学研究』20　古代学研究会
早野浩二 2005「臨海の古墳時代集落―松崎遺跡の歴史的素描―」『研究紀要』第 6 号　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二 2010「製塩遺跡の空間構成についての基礎的研究」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
早野浩二 2011「東海」『古墳時代の考古学 1　古墳時代史の枠組み』同成社
早野浩二 2012「松崎遺跡と知多半島の土器製塩」『東海の古代③　尾張・三河の古墳と古代社会』同成社
広瀬和雄 1988「近畿地方における土器製塩―大阪湾周辺を中心として―」『考古学ジャーナル』298　ニュー・サイエンス社
冨加見泰彦他 2003『西庄遺跡』財団法人和歌山県文化財センター
福岡晃彦他 1991『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 20 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター
宮地聡一郎 2000「脚台式製塩土器について」『小島北磯遺跡』財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター調査報告書第 54 集　財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター
森泰通 2005「愛知県における脚台式製塩土器の研究」『考古学フォーラム』17　考古学フォーラム
森田勝三 2001「渥美半島の脚台式製塩土器」『石巻文化財』第 10 号　豊橋市石巻地区文化財保存会

愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第14号
2013.5
23-32p

安城市惣作遺跡出土の刀把装具について

樋上　昇・早野浩二

本稿では、平成23年度に発掘調査をおこなった安城市惣作遺跡から出土した、木製の刀把装具を紹介する。併せて、この刀把装具の使用樹種とAMSによる年代測定値の公表、さらにその系譜についても若干の考察を加える。

鹿乗川流域遺跡群と惣作遺跡

惣作遺跡は愛知県安城市木戸町に所在している。地理的には西三河を南北に貫く矢作川の右岸、碧海台地との境に位置し、南北4km以上、東西1.6kmにおよび、時期的には縄紋時代晩期後葉から古墳時代後期前葉にいたる「鹿乗川流域遺跡群」のほぼ南端にあたる（図2　考古学フォーラム2013）。

愛知県埋蔵文化財センターでは、碧海台地の縁を流れる鹿乗川の河川改修にともない、平成12（2000）年度より継続的に発掘調査を実施しており、北から上橋下・宮下・姫下・寄島・下懸・五反田・惣作の7遺跡について調査をおこなっている。特に上橋下・姫下・下懸・惣作の4遺跡では、鹿乗川の旧河道より多数の木製品が出土している。

惣作遺跡では、平成20（2008）年度の調査で弥生時代中期後葉（古井式期）から江戸時代後期にかけての木製品150点が出土している（愛知県埋蔵文化財センター2012）。このうち特に中心となるのが鹿乗Ⅳ-3c～Ⅴ-1b期（欠山式期新段階～元屋敷式期古段階・廻間Ⅱ式期

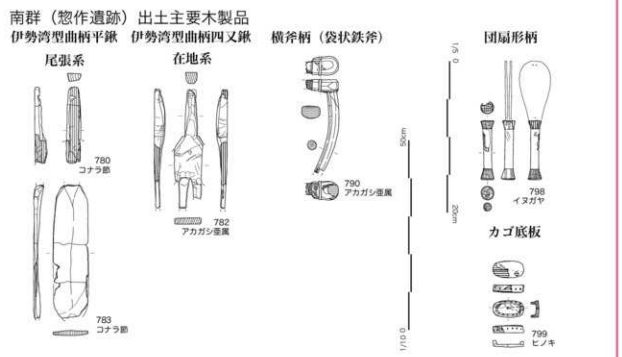


図1　惣作遺跡出土の主要木製品（S=1:5・1:10）

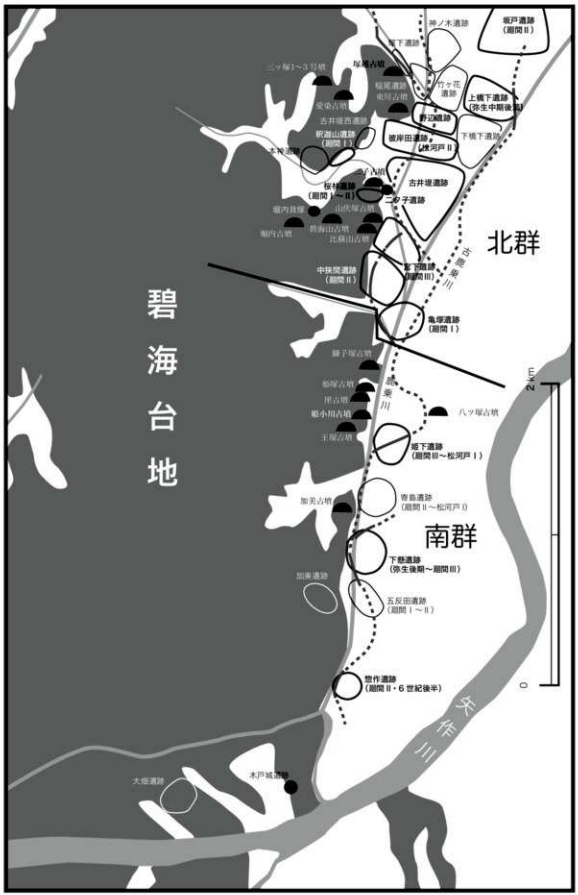


図２　惣作遺跡と鹿乗川流域遺跡群（S=1:25,000）

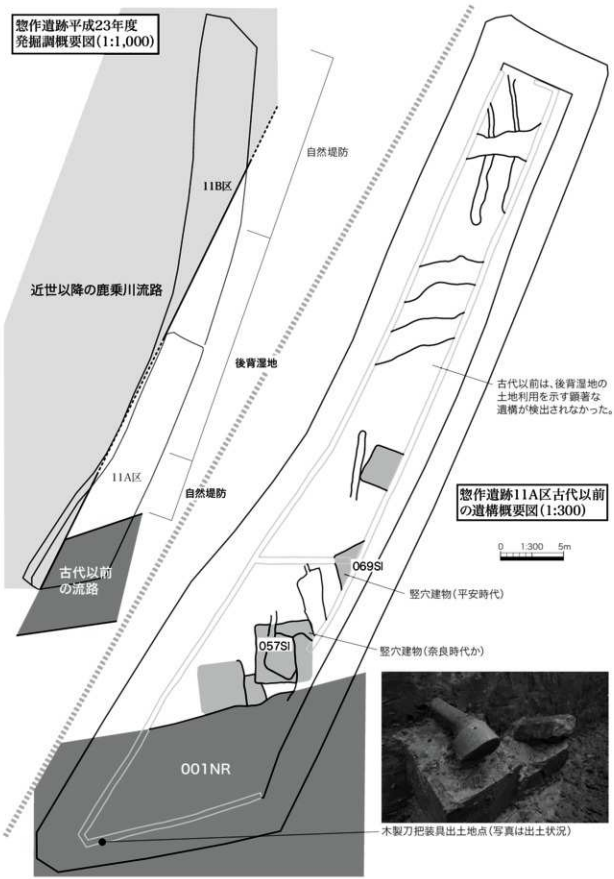


図3　惣作遺跡の遺構と刀把装具出土地点（S=1:300・1:1,000）

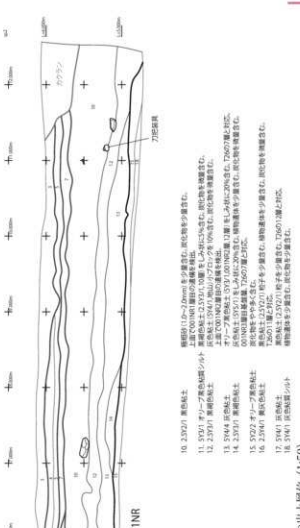


図4　刀把装具の出土断面（1:50）

並行期）に属する 82 点の木製品群である（図 1）。この時期には、弥生時代後期から古墳時代前期の威儀具として重要な位置を占める団扇形（図 1-798）のほか、装飾性の強い横斧柄（図 1-790）など、当該期に首長がこの惣作遺跡に居住した可能性を示す木製品が出土している（樋上 2012）。

次いで量的に多いのが古代（8 世紀初頭～10 世紀前半頃）の 32 点である。この時期の木製品では、「道大巻　得得麻呂　得□□［巻ヵ］大　□天平護田　呉部足国　＝＝（戯画ヵ）」と書かれた習書木簡が注目される。本遺跡から西に 300m の碧海台地上には 7 世紀後半創建の寺領廃寺が位置し、本遺跡内にも当該期の掘立柱建物と竪穴建物が展開している。

刀把装具の出土地点と出土状況

本稿で紹介する刀把装具は、平成 23 年度の 11A 区から出土した。

北から流れてきた鹿乗川の旧河道が、遺跡の中心部が乗る微高地の縁辺をめぐるように北東から南西に傾いてこの調査区の南端をかすめ、さらに南では北西から南東方向へと向きを変える。この旧河道の北側には奈良～平安時代の竪穴建物 6 棟を確認している。件の刀把装具はこの旧河道（001NR）で、調査区南西隅のトレンチ内から出土した（図 3）。

河道 001NR の堆積状況は大きく、上層：黒色粘土層（図 4-10・11・12 層）と下層：灰色粘土層（図 4-13）に分かれる。そして下層から古墳時代前期初頭（鹿乗Ⅳ -3c ～ V -1b 期・欠山式新段階～元屋敷式古段階・廻間Ⅱ式並行期）、上層から古墳時代前期（鹿乗 V -2a 期・元屋敷式新段階・廻間Ⅲ式並行期）から奈良時代にかけての遺物が出土している。図 4 をみてもわかるように、刀把装具の出土地点は上層の 10 層と 12 層のほぼ境目である。

ただし古墳時代前期後半（鹿乗Ⅵ -1a 期・神明Ⅰ式期・松河戸Ⅰ式並行期）で本遺跡はいったん途絶え、この次に出てくる土器は、岩崎 17 号窯式期（7 世紀第 3 四半期）～岩崎 41 号窯式期（7 世紀末～ 8 世紀初頭）である。

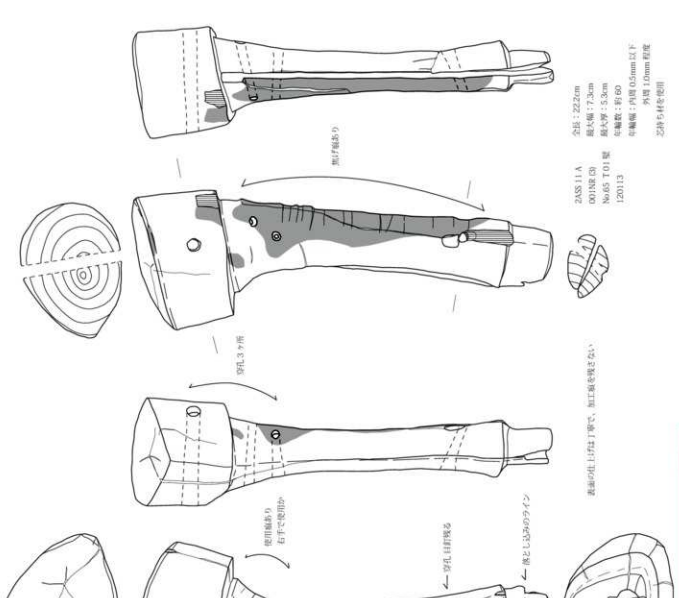


図 5　刀把装具実測図（1:2）

刀把装具の概要と特徴

材は（株）パレオ・ラボによる樹種同定の結果、ヤブツバキ（ツバキ属）の芯持ち材を用いていることがわかった。

型式学的にはいわゆる倭系（倭風）大刀の把で、把頭が楔形を呈する置田雅昭によるB類の系譜に属する（置田 1985・山内 2003）。この把頭B類は、直弧紋など紋様のあるもの（B-1類）と無いもの（B-2類）に分けられており、本例はB-2類に属する。

写真１　刀把装具の展開写真

ただし、把頭の断面形状は楔形というより、滴形ないしは卵形を呈している。把頭と把間（持ち手にあたる箇所）は直角ではなく、やや傾斜して接続している。さらに把縁（鞘に接する箇所）は、把間より一段浅い段をもってすぼまる形状を示している（図5・写真1）。

穿孔は把頭に1ヵ所、把間に3ヵ所認められる。このうち、把頭の1ヵ所と把間のうち把頭寄りの2ヵ所は貫通しているが、把縁寄りの1ヵ所には目釘が遺存している。

把間から把縁にかけては、刀の茎を挿入するための落とし込みがあり、把間の穿孔は、この茎と把とを結合するために開けたものと考えられる。

前述のように、この刀把装具は無紋であり、漆などを塗布した痕跡も認められない。ただ、把間の片面には、炭化した痕が残っている。

AMS 年代測定による所属時期

集落や古墳から出土する刀把装具のうち、最も出土例が多いのは、本遺跡例と同様のB類である（山内2003）。そして、このB類の所属時期はおおむね5世紀後半から6世紀代に属する。

ただ前述のように、この惣作遺跡では鹿乗VI-1a期（4世紀前半頃）で集落はいったん途絶え、再び人が居住するのは7世紀第4四半期である。つまり、この把頭B類が全国的に盛行する5世紀後半～6世紀代の遺物が、本遺跡では皆無であるため、考古学的に実年代を確定する方法がない。それゆえ、（株）パレオ・ラボに依頼し、AMS年代測定法によって実年代を絞り込む方法をとることとした（表1）。

木製品の場合、AMS年代測定によって示される暦年代値は、使用された樹木の伐採（に近い）年代となる。そのためには、残っている年輪のうち、できる限り最外周でサンプルを採取する必要がある。この刀把頭では、写真1に入れた↓の箇所でサンプルを採取した。ただし、最終形成年輪は残念ながら遺存していない。

得られた結果が表2である。このうち^{14}C年代は、A.D.1950年を起点に何年前かを示している。ただ、動植物が取り込む大気中の炭素同位体（^{14}C）の濃度が常に一定ではないことがわかっており、それを補正するために、北半球での暦年較正曲線（Intcal09）を用いている（図

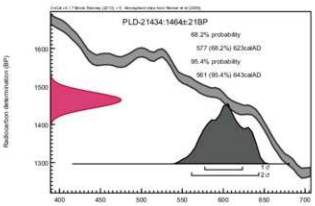


図6　暦年較正結果

表1　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-21434	遺構：001NR(3) 試料No. 65	種類：生材（ツバキ属） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：刀の柄 状態：dry	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表2　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-21434 試料No.65	-26.06±0.11	1464±21	1465±20	577AD(68.2%)623AD	561AD(95.4%)643AD

6)。この暦年較正年代値を西暦年代に直したのが、表2のうちの右側の年代値である。

年代を絞り込んだ1σ（1標準偏差）の値が577A.D.～623A.D.（68.2%）。すなわち6世紀第4四半期～7世紀第1四半期に属する。1σより確率の高い2σ（2標準偏差）の値は561A.D.～643A.D.（95.4%）で、6世紀第2四半期～7世紀第2四半期となる。

最終形成年輪がないことを考慮すれば、限りなく7世紀代に近い6世紀末頃と想定することができ、楔形柄頭の倭系大刀のなかでも最終末段階のものと考えることができる。

（以上、樋上）

木製把装具の位置

古墳時代における木製の大刀の外装は、遺存状況によって大きく左右されるため、その実態は明らかでない部分が多い。特に、惣作遺跡の木製の大刀の把は先述の通り、置田分類B類（楔形把頭）に分類されるが、把頭の平面形が倒卵形を呈する点において、大多数の置田B類（楔形把頭）とは異なることから、現状における比較検討は容易ではなく、若干の再整理も必要である。

白石太一郎は町田章の研究（町田1988）を受け、倭風の楔形大刀について、倭風の拵えの大刀全体を示す類概念として「楔形柄頭大刀」、種概念として板状で楔形の把頭をもつ大刀を「梯形柄頭大刀」、把頭の平面が楕円形または卵形を呈する把頭をもつ大刀を「楕円形柄頭大刀」と呼称することを提唱した（白石1993）。この提唱に従い、ひとまずは惣作遺跡の木製把装具を「楕円形把（頭大刀）」として呼称する。

白石太一郎が「楕円形柄頭大刀」として呼称する大刀として藤ノ木古墳の大刀3・大刀4（TK43型式期）、綿貫観音山古墳の鉄地銀象眼捩り環頭大刀（TK43型式期）がある（図7）。惣作遺跡の木製把装具は把頭の平面形が円形、側面形が台形を呈する点は藤ノ木古墳の大刀3・大刀4に類似するが、把頭に懸通孔を有する点、把縁が他の「楔形柄頭大刀」や大刀3とは異なって幅広にならない点は大刀4によく類似する。段を有して狭くなる把縁側には、別材の把縁装具が装着される可能性もあるが、置田B類（楔形把頭）の把装具はいずれも一木造りであることから、その可能性は考えにくい。とすれば、藤ノ木古墳の大刀4、綿貫観音山古墳の捩り環頭大刀と同様、把縁には小さく突出する鍔（の機能を有する装具）を装着する構造であったことも推測される。また、把縁を小さくして、茎を落とし込む溝を把縁の位置で刃側に段を設けて深く切削する造作は、6世紀以降における把縁の構造の簡略化（小林1986）がより顕著に表出したもので、関の切り込みが深くなる鉄刀の変化（臼杵1984）にも対応したものと捉えられる（図8）。

楕円形把頭大刀は、町田章が予測したように（町田1988）、4世紀から6世紀にかけて存続したと考えられるが、惣作遺跡の木製把装具の年代が放射性炭素年代測定の結果、6世紀後半から末頃と推定されたことは、藤ノ木古墳の大刀4との類似、把装具の構造からしても矛盾がない。このことは同時に、「楕円形把頭大刀」が6世紀後半の近畿地方から東海、関東地方にかけて分布すること、あるいはそれが畿内の有力支配者層から地方にまで共有されていたことを示す。

また、惣作遺跡の木製把装具の構造に他の置田B類（楔形把頭大刀）の把装具と異なる点が認められることは、藤ノ木古墳の大刀4の鞘縁と鞘尻の幅がほぼ等しく、鞘尻の幅が広くなる他の倭風の大刀とは異なることが指摘されているように（関川1993）、「楕円形把頭大刀」の系譜、構造上の変化が単純ではなかったことを示唆する。現状の資料からすれば、「梯形把頭大刀」が古墳時代中期から後期を通じて普遍的に存在し、大刀形埴輪のモチーフとしても主体を占めたと考えられ、「楕円形把頭大刀」は倭風の大刀としては相対的に少数派の大刀であったと考えられる。

いずれにせよ、惣作遺跡の木製把装具は古墳時代における大刀の外装の構成と変化を明らかにする重要な一資料であることは間違いない。今後、同様の木製把装具の出土例が増加すること、出土地点周辺の調査によって、より詳細な出土状況が判明することが期待される。

（以上、早野）

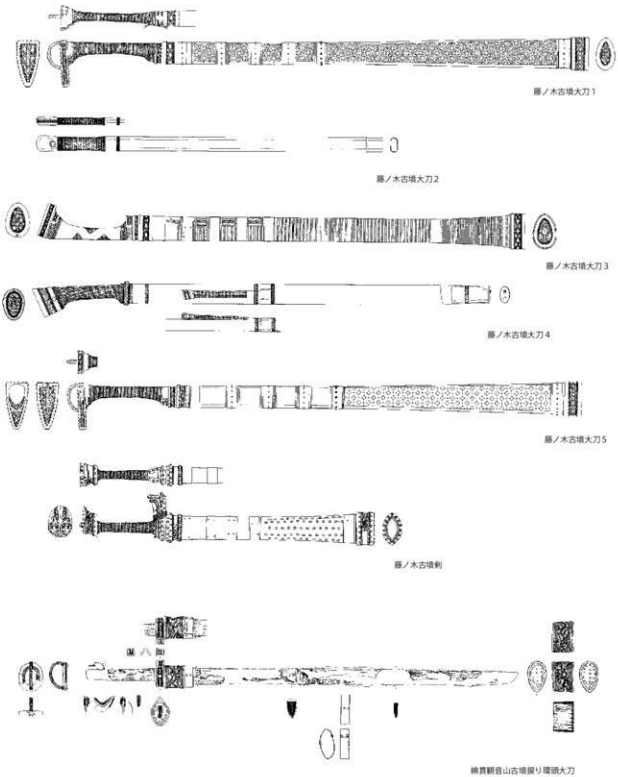


図7　藤ノ木古墳と鞆貫観音山古墳の刀剣（1:10）

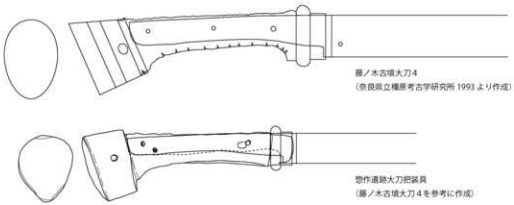


図 8　大刀の構造復原案（1:4）

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター 2012『墾作遺跡Ⅱ』
白井勲 1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会
酒田雅昭 1985「古墳時代の木製刀装具」『天理大学学報』第 145 輯
群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ　石室・遺物編』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 255 集
考古学フォーラム 2013『変貌する弥生社会　安城市鹿乗川流域の弥生時代から古墳時代』
小林行雄 1986「古墳時代の大刀」『研究紀要』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
白石太一郎 1993「玉纏太刀考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 50 集　国立歴史民俗博物館
関川尚功 1993「刀剣類について」『藤ノ木古墳』
永井邦仁 2012「墾作遺跡」『平成 23 年度 愛知県埋蔵文化財センター 年報』
奈良県立橿原考古学研究所 1993『斑鳩藤ノ木古墳　第二・三次調査報告書』
樋上　昇 2012「出土木製品からみた弥生時代後期～古墳時代前期の鹿乗川流域遺跡群」『墾作遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター
鈴木一有 2012「生産と流通Ⅵ　武器・武具」土生田純之・亀田修一編『古墳時代研究の現状と課題　下』同成社
町田章 1988「三重県井田川茶臼山古墳の鉄地銀象嵌捩じり環頭大刀について」『井田川茶臼山古墳』三重県埋蔵文化財調査報告 26　三重県教育委員会
山内紀嗣 2003「木製刀装具からみた大刀生産」『鉄器研究の方向性を探る　刀剣研究をケーススタディとして』第 9 回鉄器文化研究集会資料

愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第14号
2013.5
33-46p

尾張国府跡の研究 (1)

永井邦仁

愛知県稲沢市には、尾張国の国府所在地と推定される遺跡（尾張国府跡）がある。当該遺跡は尾張大国霊神社を中心に約800m四方の範囲で認識され、1977年から1990年にかけて稲沢市教育委員会による発掘調査が実施されている。その過程では国庁などの確定には至らなかったものの、多数の特徴的な出土遺物が得られている。本稿では、東隣の塔の越遺跡や下津地区の調査成果を大幅に取り入れながら、尾張国府跡の調査成果を再検討し新たな評価を試みることにしたい。

はじめに

律令制度による国家統治が開始された古代、日本列島の国ごとに中央政府の出先機関である国府が設置された。しかしながらそれらのほとんどは、時代の趨勢とともに所在地さえわからなくなっている。愛知県西部に相当する尾張国についても同様で、平安時代の辞書『和名類聚抄』で中島郡に所在すると記されているのみで、詳細位置については複数説ある状況である。

その比定地として最有力候補である稲沢市の尾張国府跡は、中島郡南部に位置し、周辺には尾張国分寺や中世の尾張国守護所である下津城跡などの重要遺跡が分布している。

尾張国府跡では、「国衙」字名のある市内松下地区を中心とする歴史地理学的な所在地比定に基づき、さらには尾張大国霊神社（通称：国府宮）北側での礎石建物の検出を発端とする、稲沢市教育委員会による発掘調査が実施されている。調査では官衙の所在を思わせる特殊な遺物が数多く出土しているが、国庁そのものを捉えるには至っていない。また、近年では愛知県埋蔵文化財センターが塔の越遺跡を発掘調査し、奈良時代の国司館とみられる遺構・遺物を検出している。

本稿では、これらの調査成果の蓄積をもとに、まずは国府“域”について見通しを立てていくことを目的として、出土遺物から尾張国府跡を中心とする遺跡の動態を検討する。

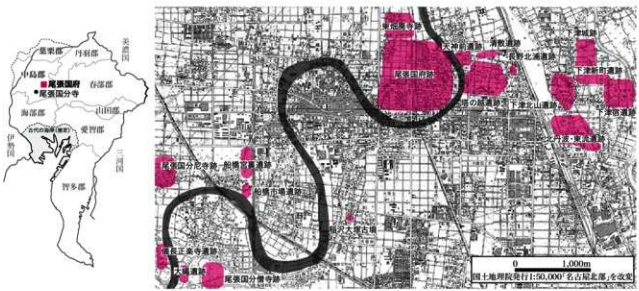


図1　尾張国府跡位置図

1. 尾張国府跡の地形環境

尾張国府跡のみならず中島郡はすべて氾濫原に位置し、河川がつくる自然堤防上を中心に集落・寺院・官衙遺跡が所在する。特に国府に関連するのは、現在大江川となっている三宅川の旧河道で、地割などにその痕跡を明瞭に認めることができる。そこから復元される旧河道は、傾斜が少ない氾濫原特有の大蛇行をしており、その両岸に尾張国府跡や国国分寺跡が河道に囲まれるように立地している。しかし現在の大江川は幅約 8m にすぎず、しかも尾張国府跡南側で当該河道から外れている。このことから当該河道は、古代に機能していたものが、その後より上流で発生した河道の変動によって機能低下したと考えられる。

以上のように、旧地形の復元が重要であることは明白であるが、遺跡が人間によって形成されることを考えればより等身大の地形を見出していく必要があるはずだ。そこで当センター鬼頭剛による等高線図による表層地形解析（鬼頭 2012）を参照してみよう。

大江川右岸に併行する谷地形は三宅川旧河道に相当し、さらにその西方には東畑廃寺が立地する南北約 800m の尾根状地形がある。同廃寺とその北側では現在も小山のような自然堤防の盛り上がりをみることができる。そしてそれと小さな谷を挟んで尾張大国霊神社一帯に独立した平坦な高所が認められる。このような地形はすべてが自然形成されたものではないのだが、長さだけでなく幅も広い平坦面は、国府のような一定面積を要する施設には好都合の地形であるといえよう。

一方大江川左岸にも自然堤防が発達しているが、塔の越遺跡西方のそれは小山状を呈し、周辺には傾斜面が多いことがわかる。ここは塔の越遺跡 08C ～ I 区に相当し、発掘調査の結果、

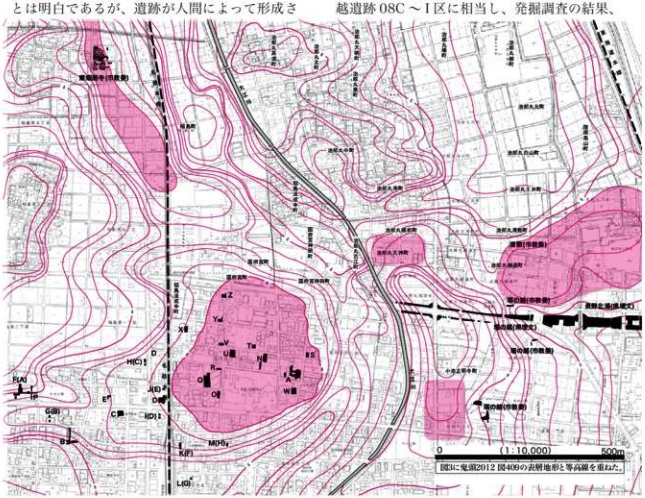


図 2　尾張国府跡の表層地形と等高線図

7世紀後半以降になって土地利用が始まっていることが判明したが、それも掘立柱建物群ではなく竪穴建物に限られるようである。それに対して平坦な地形とみられるのが、塔の越遺跡北側から清敷遺跡にかけての一帯である。この微高地と小山状地形の間は若干の谷地形が北西〜南東に入り、発掘調査でも溝が集中的に検出されている。奈良時代から平安時代前期の国司館とみる施設群はその東側に展開しており、加えて清敷遺跡では、奈良時代初頭の井戸が検出されていることから（北條 2010）、この間の微高地に関連遺構が展開する可能性が高く注意が必要である。

また、その南東に位置する長野北浦遺跡から万徳寺の一帯は標高 4.5m 以下となるが、発掘調査でも東方へ下る地形を検出しており、それを中世以降に埋め立て造成して万徳寺が造営されていると考えられる。このように発掘調査成果と照らし合わせることで、表層地形解析の有効性が確かめられ、逆にそこから遺跡展開の見通しを立てるのにも役立つことがいえるのである。

そのように意識して等高線図をみると、小山状自然堤防の南北両端にある、100m 四方に広がる標高 5.5m 前後の平坦面も注意しておきたい。特に北端の治郎丸天神町にある天神社境内（天神前遺跡）からは古代瓦や須恵器が採集されており、瓦葺き建物からなる施設が存在した可能性が高い。当該地点の北側は、現在東西に用水路がのびる谷地形が入り、これによって治郎丸の集落と画されている点も興味深い。さらに大江川対岸には「北古江」「南古江」といった地名があることから（図 3）、三宅川旧河道に伴う川湊の存在を想定しておく必要もあるだろう。

2. 尾張国府跡発掘調査に至る研究略史

先述のように、尾張国府の位置に関する文献史料はほとんどなく、その所在地を中島郡域にある国府（国衙）関連地名に求める状態が長かった。その研究史は北條 1993 に詳しいが、主要 2 説は (A) 稲沢市松下の「国衙」と国府宮、(B) 稲沢市下津町「東国府」・「西国府」である。とりわけ歴史地理学者の水野時二氏は (A)・(B) の両説に関わり、水野 1971 において、(A) → (B) → (A) という移転説を提示した。

水野氏は、地名に加えて旧字界から方格地割を導き出す手法で、(A) については正方位から東へ 10°振れる方八町の、(B) については正方位で方四町の国府域を想定した。同氏は尾張平野における条里制研究の中で国府域の問題にふれ、(A) の方格地割が三宅川旧河道の北岸で限定的に抽出され、それ以外では正方位の条里制地割が復元できることに注目した。その解釈は、

図 3　尾張国府跡の地名と調査地点（水野 1959 をもとに作成）

旧河道に規制された国府の方格地割設定後に条里制が施工され、さらにその後条里制に合致する (B) へ移転したというものである。

しかしながらこの移転説では、(B) から (A) への再移転時期についての言及がなく、(B) への国府移転後に (A) に対して条里制地割が施行されずに旧地割が保全された理由も不明である。こういった問題点は歴史地理学的手法の限界を示すのであるが、手がかりの少ない国府所在地にたどり着くために必要な研究であることには変わりがない。

以上のような水野氏の研究とほぼ併行して、稲沢市内では 1961 年に尾張国分寺跡の発掘調査が実施され、一方尾張大国霊神社や下津地区では原来吉氏によって工事現場の観察・記録や遺物採集が行われていた。そのような経過の中で 1977 年、尾張大国霊神社北東における送電線鉄塔工事の際に実施された緊急発掘調査で、礎石建物の一部と、乾元大宝やムクロジ種子などの入った白色陶質土器が出土し、考古学的な尾張国府跡の認識がここに始まったのである。

その後の発掘調査成果については後にまとめることにするが、残念ながら水野氏の研究は、上述したような「方八町」地割施行時期に問題点があるためか、あまり参照されていない。しかし同氏の研究で重要なのは、水野 1971 の第 110 図で示されているように、三宅川旧河道を軸にした国府や国分寺などの尾張国中枢の展開を見通したことと、その後の展開として下津地区を重視したことにある。これに原氏の塔の越遺跡から下津地区に至る遺跡探索が加わることによって、尾張国府の景観をより広い視野で捉える必要があることは明らかで、本稿もその視点に立っている。

そして近年、尾張国府所在地の研究は上記以外に、塔の越遺跡や東畑廃寺も重視する説がある。いずれも (A) に先行する国庁所在地の推定であるが、このような見解が派生した理由として、(A) における発掘調査成果が平安時代を中心としたものであることと、1980 年代以降進んだ国府研究によって、国府の移転やその分節構造などが提示され（金田 1995）、方格地割にとらわれない国府景観の推定がなされるようになったことが挙げられる。これらを見ても、尾張国府を時間的・空間的に広げて考えるのは必至の方向性であるといえる。

3. 尾張国府跡の発掘調査成果

稲沢市教育委員会による尾張国府跡の発掘調査は 12 次 26 地点にのぼり、総面積は 3,300 ㎡になる。これに尾張大国霊神社境内での発掘調査が 2 度実施されている。これらを名鉄本線から東の国府宮と西の松下に分けて概観する。

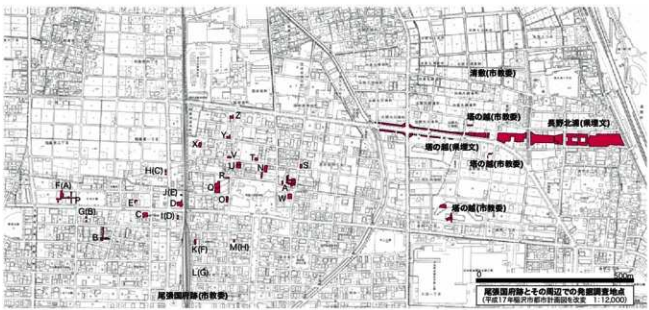


図 4　尾張国府跡および塔の越遺跡の発掘調査区位置図

(1) 国府宮の調査区

A・S・W 地区　尾張大国魂神社北東に位置する宗形神社周辺である。調査の発端となった送電線鉄塔東側で数次にわたって設定された調査区である。調査区東端は自然堤防頂部で、後世の削平が著しく遺構は不明である。同様の状況は S・W 地区でも確認されており、これらは三宅川旧河道の自然堤防と考えられる。

主要遺構は、礎石建物（SB01）と２条の東西溝（SD20・23）である。SB01 は礎石抜き取り後の根石が複数の土坑内より検出されたもので、このことから当該地点も削平が進んでいると理解される。柱間が 2.4m 等間で若干南に振れて東西に延びているとされるが、南北への展開あるいは全体規模は不明である（図 7）。SB01 西側では K-90 号窯期～ H-72 号窯期の灰釉陶器が多く出土している他、南側の SK14 は、乾元大宝約 16 枚などが入った白色土器の瓶が碗を伴って出土し、地鎮のために碗で蓋をして埋納されたものと考えられている。銭貨の時期から 10 世紀後半代と考えられる。

２条ある東西溝は併行関係し南東へ３～４°振れる。調査区北端の SD23 は幅約 0.5m の断面逆台形で出土遺物から 13 世紀代に埋没したようである。一方 SD20 は幅約 1m の断面逆台形で延長 23m 以上ある。若干の須恵器・灰釉陶器に加えて山茶碗が上層から出土する。SD20 以南では SK133・140 などの H-72 号窯期から 12 世紀代の陶器・瓦が多数出土するエリアがある。この他異方位の溝とされる SD22 がある。

N・T 地区　N 地区では３条の東西溝が検出されたが、位置関係から SD26 は A 地区 SD23 の西延長と推測される。そしてその北側では東西長軸の掘立柱建物が３棟平行して検出されているが、いずれも山茶碗が出土する。

U・V 地区　東西溝 SD31 と南北溝 SD28 の交差点が検出されている。これらの溝は北から 10°東へ振れる方格にのる。出土遺物は 16 世紀代のものが主体であり、当該方格の成立時期を知ることができる。

O・Q・R 地区　Q 地区では、北に対して斜行する（約 45°）溝と柵（SA02）などが検出されている。ともに山茶碗が出土するので 13 世紀以降と考えられる。O 地区では、東西溝（SD16）と戦国時代以降の方格に対応する溝（SD18）がある。前者は８～ 13 世紀の土器が

図 5　尾張国府跡（国府宮地区北部）の遺構概略図（1:3,000）

出土し、後者は顕著な遺物がなかった。

X地区　SD32は幅は0.8mにすぎないが東西溝である。調査区全体で遺物は少なく、H-72号窯期以降の灰釉陶器を上限とし、山茶碗が下限になると考えられる。

Y地区　幅約6mの大溝の屈曲部が検出されている。その方位は北から東へ24°斜行する。山茶碗が出土し、室町時代には埋没していたと考えられている。形状から何らかの区画施設であるのだが、これに対応する溝や地割が未検出であるため全体像は不明である。

Z地区　全調査区で唯一古代の竪穴建物群が検出されている。建物は4棟あり、いずれも一辺約4mの正方形と考えられる。SB11・12は四隅に柱穴がくる奈良時代後半によくみられるタイプである。出土遺物は須恵器・灰釉陶器の供膳具が主体で、時期はO-10号窯期～K-14号窯期で8世紀末～9世紀前半であろう。特段、生産関連痕跡は検出されなかった。ここでも戦国時代以降の方格に対応する溝(SD34)がある。

K・L・M地区　K地区SK87で埋設された中世常滑大甕がある。他に顕著な遺構はない。

(2) 松下の調査区

C地区　平安時代後期の掘立柱建物(SB02)と時期不詳の礎石建物(SB03)が検出されている。SB02は南側に庇があり、柱筋はあまりよくないが東・北辺にそって側溝(SD01)があることから可能性は高い。

F地区　西方へ下る谷地形に面する(図2)。時期不詳の南北小溝(SD04)・東西小溝(SD05)がある。

G地区　等高線(図2)からは西方に延びる尾根状地形頂部に位置する。遺構は東西小溝(SD08)程度であるが、須恵器から青磁碗まで幅広い時期の遺物が出土している。また、フイゴの羽口や多量の鉄滓も出土していることから、時期不詳ながら鍛冶に関わる場であったと考えられる。

H地区　2条の東西溝(SD08・09)がある。木製品やモモ核が出土しているが、中世後半以降とみられる。

松下の調査区はいずれも小規模調査区であるため、溝の方位は概ね東西あるいは南北としか言えないが、国府宮地区のような斜行溝がみられない点は注意しておきたい。また、G地区を始めとして鉄鍛冶関連遺物は松下地区で集中しており、当該地区の特徴となっている。

4. 溝からみた尾張国府跡

前節でみたように、尾張国府跡の発掘調査で検出された古代の建物遺構はわずかである。ピットは多数検出されているので掘立柱建物を想定することも可能ではあるが、残された記録のみでピットの土層や時期を検証することは困難である。そこで蓋然性の高い遺構として溝に注目してみよう(図5)。

溝はその延長方位から3つに分類できる。(1)正方位あるいはそこから3～4°東へ振れる比較的明瞭な溝、(2)東へ約30°振れる斜行溝、(3)東へ10°振れる不整形な溝、である。(1)はA地区のSD20・23が該当し、下層が平安時代後期、上層で中世前半の遺物が含まれていることから、機能時期の中心は11～12世紀と推定される。10世紀後半～11世紀と推測される礎石建物SB01との関係もあるが、断面逆台を呈する直線溝は国衙との関連が強いとみて大過ないだろう。そしてこれに類する東西溝にはO地区SD16やX地区SD32がある。これらは中世の遺物が多く、報告では14世紀代を埋没時期、開削時期不明とするが、遺物相からはSD20・

図6　尾張国府跡古代の遺構(1:200、報告書より作成)

23のそれに近く、(1)の時期に含まれると考えておきたい。

次に(2)であるが、(1)の方位に全く規制されていないことや、山茶碗が底部近くから出土していることから、概ね12世紀以降に開削されたものと考えられる。Y地区SD33は居館の堀を思わせる規模である。国府宮地区で国衙が機能しなくなった時期に相当するのであろう。

(3)は小溝が併行しており、屋敷地もしくは耕作地の区画溝と考えられる。当該地点において近代まで続く集落が形成された時期を示す。報告でも指摘しているように、これが水野時二氏が方八丁国府とした字界に対応している。

以上のように、国府に関わる溝は(1)のみであるが、その開削が10世紀を遡る可能性は低い。とはいえZ地区の竪穴建物群も同じ方位軸を採用しており、おそくとも8世紀後葉には始まった、当該地区で北に方位を揃えた施設の配置が平安時代を通じて国衙施設の基本軸になっていたものと見なすことができよう。

4. 出土遺物からみた尾張国府跡

再三述べたように尾張国府跡では古代の遺構が検出された事例は少ない。しかし国府跡として注目され続ける要素として、豊富な特殊遺物の出土がある。また、古墳時代から平安時代前期の土器も少なからず出土している。本節では遺物の分布から国府景観の復元を試みる。

特殊遺物は、硯や帯飾りなどの比較的官衙で出土する傾向にあるものの他に、尾張国府跡として特徴的なものがあり、緑釉円塔や銅印を挙げることができる。図7は報告書掲載分を集成したもので、付した地区名で明らかなように、その分布が尾張大国霊神社北側に集中することにまずは注目される（図7）。

次に古代の土器に注目してみよう。報告でも国府に関わる遺物として実測図が掲載されており、これらを猿投窯編年（付表）に対照させながら地区ごとに整理した。また、保管資料を実見し補足もおこなった。定量的な分析はできていないが、遺物の有無を表示するだけでも興味深い事実が明らかとなった（図8、9）。

尾張国府跡では古墳時代前期を遡る遺物はひじょうに少ない。発掘調査を通じて一定量の土器が出土するようになるのは古墳時代中期以降である。しかもその出土範囲は尾張大国霊神社北側に集中する。埴輪は出土していないので、塔の越遺跡のような古墳ではなく集落があったものと考えられる。その後6世紀後半に相当す

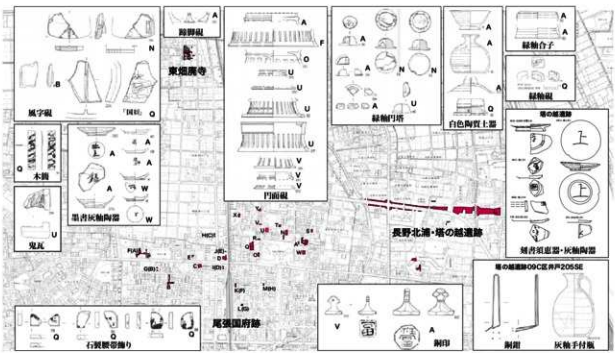


図7　尾張国府跡出土の特殊遺物集成（1:16,000）

る遺物はほとんどなく、7世紀前半もごくわずかである。この様相は集落の途絶とまではいかないが、当該期は縮小傾向にあったことを裏付けるものといえよう。

ところが7世紀後半、I-17号窯期の須恵器は一挙広範囲に各調査区で出土している。分布の中心を見出すことはできないが、古墳時代中期の遺物分布と重複する他に松下地区でも出土が確認できるようになるのが、大きな変化である。種別は須恵器だけでなく土師器甕も含まれており、概ね集落の遺物であるといえる。この展開は、5～6世紀の集落の継続とは評価しがたく、新たな居住地の形成、すなわち尾張国府建設に伴う集落展開と考えておきたい。

次いでI-41号窯期～C-2号窯期は7世紀末～8世紀前葉に相当する。一般に国府整備開始とされるこれら2時期の分布をI-17号窯期のそれに重ねて表示すると、尾張大国霊神社北側から西南西方向へ及ぶ一定の範囲で、集落がほぼ連続して展開していたとみることができる。

しかし尾張大国霊神社北側でもY・Z地区では8世紀前半までの遺物は報告されていない。これらの調査区では、8世紀半ば過ぎのNN-32号窯期以降の須恵器が出土している。このことから、当該期は従前の分布域に加えた新展開が始まった画期としてとらえることができる。

それに次ぐO-10号窯期は一転して分布域が縮小し、尾張大国霊神社北側に限定される。しかしNN-32号窯期から始まったY・Z地区の分布はさらに充実し、Z地区の先述した竪穴建物の密集が相当する。おそらく国衙やその付属施設の集約が当該期に進んだものと考えられ、国府景観の変貌をうかがわせる。Z地区ではこの後K-14号窯期も同様の竪穴建物群であることから、9世紀前半に至るまでこの景観が継続したものと思われる。

ところが、9世紀代の指標となる灰釉陶器はK-90号窯期では再び分散傾向がみられ、A・F・

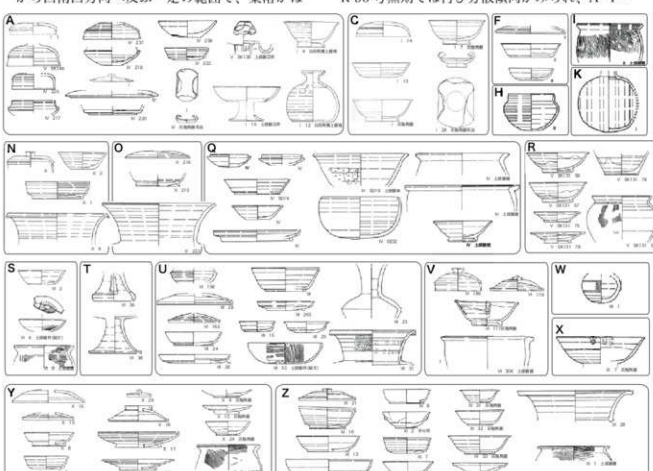


図8　尾張国府跡出土の古墳時代～古代の土器

尾張大国霊神社北側に集中域。蓋杯・杯身の他、土師器高杯もある。古墳時代中期の集落か。

遺物は非常に希薄となる。C 地区で 1 点のみ。集落域としての利用が一旦途絶えたか。

出土分布が一挙に拡大し、松下地区にも展開。

F 地区や Q 地区では、(3) から (5) にかけて継続している。

この時期も分布は広範囲になるとみられる。

(3) から (5) の分布域に加えて Y・Z 地区で須恵器が出土。新たな展開の開始。

尾張大国霊神社北側に集中域ができる。

(7) と同じく神社北側に集中。緑釉陶器 (9～11 世紀) の分布域との違いに注目。

図 9　尾張国府跡における須恵器の時期別分布

図 10　尾張国府跡出土の緑釉陶器重量比較（1:16,000）

Q・R 地区で出土する。各地区では O-53 号窯期からさらに 12 世紀代までの継続がみられる。A 地区では灰釉陶器長頸瓶や大型鉢といった特殊器種を含む一方、Q 地区では灰釉陶器椀・皿と土師器鍋（三河型）の組み合わせという異なる様相である。また R 地区 SK131 でも K-90 号窯期～ O-53 号窯期を中心とする多数の灰釉陶器碗・皿と濃尾型土師器甕の一括資料が出土している（図 8）。この対比から、A 地区が祭祀・儀礼に関わる空間、Q・R 地区が給食などの日常生活に関わる空間、とみることができる。

これに、緑釉円塔を除外した 1 ㎡あたりの重量でみた緑釉陶器の分布を対照させてみる（図 10）。V 地区が他を圧倒する量であるが、ほとんどが砕片で包含層中出土であるため注意しておきたい。これ以外では、A 地区と O・Q・R 地区での偏在が、上述した灰釉陶器の分布に概ね対応するといえよう。

これらの事実は、平安時代尾張国府の中枢（国庁・国司館）を尾張大国霊神社北側の一帯に推測させるとともに、それらが南北幅約 100m に対し東西方向に長い空間であることも示している。すなわち道路でつながった諸施設が東西方向に並列した景観を見出すのである。

6. 複数の軸線と尾張国府域（予察）

これまでの尾張国府跡の考古学的評価は、「後期国府」というものであった（北條 2010）。しかし前節でみたように、遺物の有無を指標にするだけでも、7 世紀後半に突如開始され変化を遂げながら平安時代まで継続していた集落動態を示すことができる。つまり奈良時代の国庁については未だ所在不明ではあるものの、尾張国府跡は一貫して尾張国府域の一部であるといえるのである。

それでは三宅川旧河道対岸に位置する塔の越遺跡などの調査成果が明らかにされた現在、尾張国府域をどのような範囲で見通していくことができるだろうか。冒頭で述べた研究目的に対して未だ充分な作業は行えていないが、尾張国府跡から東方の遺跡群との関係を中心に予察を展開してみたい。

近年の国府研究では国府域を考えるうえで交通路が基本的要素となっている。具体的には道路や川に面した津の遺構をもとに、これらの連絡を骨格にした景観復元が、地道な埋蔵文化財発掘調査に見通しを与えてくれている。例えば武蔵国府跡では、段丘崖線に沿った東西約 6.5km 南北約 1.8km の範囲を武蔵国府関連遺跡として認識し、道路や竪穴建物の分布から「国府のマチ」として総括している（深澤 2010 ほか）。本稿でもこの方向性を大いに支持したい。

そこで、尾張国府跡や塔の越遺跡で検出された溝から道路やその規格となる軸線を抽出すると、時期の古い順に 3 つを挙げることができる。最古のものは、長野北浦遺跡で検出された直線溝群（07Bb 区 0238SD・07Ba 区 0253SD・08D 区 068SD）である。これらは併行し幅 8.8～ 14.0m の道路側溝と考えられ、北東～南西に延びている。068SD は古墳周溝の堆積土層（07B 区 024SD：7 世紀後半）を掘り返して構

築していることからそれ以降で、加えて８世紀初頭となる塔の越遺跡 07B 区の掘立柱建物群とも方位が揃っている。これを軸線Ａとする。

次に塔の越遺跡で国司館を推定した調査区で頻出する北北東～南南西方向の溝群を軸線Ｂとする。中核となる溝は 08Cb 区 028SD（08Fe 区 057SD）で、８世紀前半には既に機能し、上層で９世紀前葉の遺物が出土している。国司館もこれに方位が揃っている（永井 2012）。

３つ目は尾張国府跡の溝で (1) に分類した SD20・23 などの東西溝である。ただし当該溝の組み合わせの間には礎石建物 SB01 が立地するため道路は SD23 北側などに想定されよう。これを軸線Ｃとする。なお、これら遺構の年代は 10 世紀後半～ 12 世紀となるが、同方位の竪穴建物群が８世紀後葉に構築されているので軸線としてはさらに遡る可能性もある。

以上３つの軸線を延長したのが図 11 である。まず軸線Ａは北東に延びて後に下津城となる地点に至る。その際旧河道が埋没して微高地化した一帯を通過する。一方、南西延長では軸線Ｂと交差することが見込まれる。塔の越遺跡の調査成果からも、一度設定された軸線は容易に廃絶されずに沿線施設の方位規格となっていることから、軸線Ａは機能し続けて８世紀頭以降に交差点が生じていた可能性が高い。

次に、軸線Ｃ（尾張国府跡 SD23）を東方に延長すると、下津北山遺跡で検出された 12 世紀前半成立の寺院南側を経由し、さらに下津宿遺跡で検出された「不断光寺」北側の東西溝に至る。とりわけ下津北山遺跡では緑釉円塔が出土しており、院政や国衙との強い関連が指摘されているが（早野 2000）、尾張国府跡では SD23 に沿った A・N・U 区のみで出土しているのも注目される。このことから軸線Ｃは政治的・宗教的に重要な線であったことが想定され、12 世紀代には低地を挟んだ下津地区も国府域になっていた蓋然性がきわめて高い*。このように、微高地が断続する地形環境であるにも関わらず、交通路を基に杓子定規な官衙などの配置を行うことこそが国府域の表出である。

それでは下津地区との連絡はどの時期まで遡れるのだろうか。下津地区の発掘調査成果から奈良・平安時代の集落に注目してみよう。

北丹波・東流遺跡では、古墳時代前期以降に断絶があり、その後幅約 3m の南北溝が開削されるなど奈良時代初頭に大きく偏在した集落動態がみられる（永井宏 2013）。ただし、採集遺物には O-10 号窯期相当の須恵器・長頸瓶（壺 G）や灰釉陶器もあることから９世紀代も付近で継続していると考えられる（図 12）。

下津新町遺跡は、青木川旧河道が屈曲するその左岸自然堤防上に立地する。集落は H-44 号窯期に竪穴建物群が成立し、その後増減はあるものの K-14 号窯期まで継続しており、特に８世紀代には掘立柱建物もある（鈴木 2009）。その始まりは国府に先行することから、在来勢力による集落経営だったと考えられる。一方９世紀後半以降の動向は、遺物がほとんど出土しな

* 軸線Ｃと三宅川旧河道の交差点には「道上」「道下」という字がある（図 3）。これも軸線Ｃが国府域の主要交通路になっていたことを示唆するものであろう。

図 11　尾張国府跡周辺の軸線（1:25,000）

いことから、城外へ移動したのであろう。旧河道に近いため、洪水からの退避だったのかもしれない。

下津城跡では、古墳時代中期の須恵器杯蓋や7～8世紀の須恵器、灰釉陶器も出土している。したがって遺構については不明だが、尾張国府跡のように継続性のある集落が立地していた可能性が高い（稲沢市教育委員会 1988）。おそらく、下津新町遺跡とともに古墳時代からの拠点的な区域になっていたのであろう。

以上のように、下津地区にも少なからず古代集落が存在し、8世紀代に遺構・遺物が最も充実する傾向を見ることができる。これは尾張国府跡において集落がもっとも広範囲に展開する7世紀後半～8世紀中葉の状況に対応している。加えて、軸線A延長が下津地区の拠点的な区域に連絡していることからも、奈良時代初頭の段階で既に国府域に組み込まれていた可能性を示唆するものである。

尾張国府設置当初の景観は、例えば塔の越遺跡では在来勢力の群集墳が多くを占めていた（早野 2012）。在来勢力を動員して造営を進める国司にとって、このような場所での面的な開発は困難が多かったと考えられる。したがって、当初は墓域を避けつつ限られた微高地上に国衙や付属施設を造営するしかなく、結果的に広範囲の集落展開となった。しかし8世紀後半以降、古墳を削平しつつ平坦地が確保できるようになると（永井邦 2013）、国衙の集約が進んだと考えられる。そのため、尾張国府跡松下地区のように一時的には廃絶に近い景観となった地点もあるだろう。このような景観の連動がうかがえる近隣の集落遺跡を尾張国府に関わる遺跡群としてとらえることでより具体的な国府域の模索が可能になると考えられる。

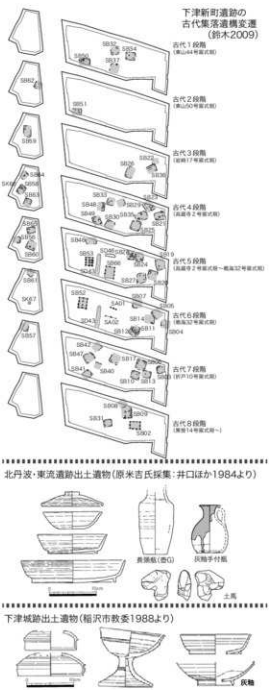


図12　下津地区の古代集落

7. 尾張国府の「衝（チマタ）」

そこで再び軸線A～Cに注目すると、その交差点が先述のように比較的平坦な微高地で、しかも三宅川旧河道に面していることが注意される。このことから、先に川湊を想定した天神前遺跡同様に、水路と複数に展開する陸路の連絡地点と考えてみればどうだろう。

このような交通の要衝は古代から「衝」と呼ばれ、市が立てられ、祭祀の場となっていた（白石 1996）。当該地点の南西には「市場畑（東）」、その南に「市場」という字があり、時期不詳ながら市の存在が想定される。あるいは国府の市という可能性も出てくる。

この「衝（チマタ）」空間では、1985～86年に稲沢市教育委員会による発掘調査が実施さ

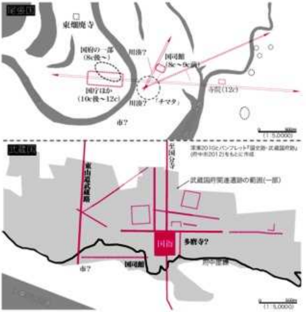


図 13　尾張国と武蔵国の国府中心部の比較

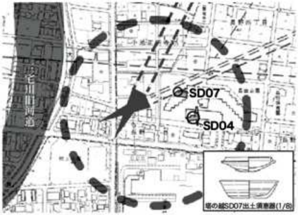


図 14　推定「チマタ」空間の調査地点

れている。調査区 2 か所で 5 世紀後半の円墳 2 基に加え、古代の須恵器・灰釉陶器も多数検出されている。報告によれば O-10 号窯期～ K-14 号窯期が特に多い。調査面積計 393 ㎡ながら、群集墳や奈良～平安時代の遺構・遺物が濃密な展開をしていることがうかがえる。

特に注目されるのは、古墳周溝（SD07）での遺物出土状況で、円筒埴輪や当該期の須恵器の他に、7 ～ 8 世紀の須恵器も出土している（図 14）。このことから当該期まで周溝がある程度形状を保っていたと考えられるが、最上層で基盤層に由来する土の堆積がみられることから、その後墳丘が削平されたとみられる（塔の越遺跡発掘調査団 1988）。したがって当該地点においても奈良時代後半～平安時代初頭に古墳群の削平が進み、平坦地が確保されたと考えられる。具体的な施設は不明だが、9 世紀前半を中心に盛んな土地利用があったものと推測される。

8. むすびにかえて

以上本稿では、尾張国府域を東方に広げる想定を展開したが、一方で尾張国分寺との関係や東畑廃寺の位置づけには及ばなかった。続稿でこれらの課題に取り組みたい。

なお、尾張国府跡の発掘調査成果については、稲沢市教育委員会・北條献示氏に多くのご教示をいただいた。また資料調査にあたっては、同・田中俊輔氏のご協力をいただいた。感謝します。

（引用・参考文献）
井口喜晴ほか　1984　『新修稲沢市史資料編 6 考古』　稲沢市
稲沢市教育委員会　1979 ～ 1989　『尾張国府跡発掘調査報告書（Ⅰ）～（Ⅺ）』
稲沢市教育委員会　1988　『下津城跡発掘調査報告書』Ⅳ
鬼頭　剛　2012　「長野北浦・塔の越遺跡の地下層序と表層地形解析」『長野北浦遺跡・塔の越遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 171 集
金田章裕　1995　「国府の形態と構造について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 63 集
白石太一郎　1996　「古代の衢をめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 67 集
鈴木正貴　2009　「第 5 章第 2 節 遺構の変遷」『下津新町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 159 集
塔の越遺跡発掘調査団　1988　『塔の越遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
永井邦仁　2012　「古代の塔の越遺跡」『長野北浦遺跡・塔の越遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 171 集
永井邦仁　2013　「古代東海地域における瓦塔の造立とその背景」岡内三眞編『技術と交流の考古学』同成社
永井宏幸　2013　「北丹波・東流遺跡」『年報』平成 24 年度　愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二　2000　「第 5 章 考察」『下津北山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 88 集
早野浩二　2012　「長野北浦遺跡・塔の越遺跡における古墳時代の遺構・遺物について」『長野北浦遺跡・塔の越遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 171 集
深澤靖幸　2010　「古代武蔵国府の成立」『府中市郷土の森博物館紀要』第 23 号
北條献示　1996「尾張国」『シンポジウム 2 国府 - 畿内・七道の遺物 -』日本考古学協会三重県実行委員会
北條献示　2010　「尾張国府跡」「清敷遺跡」『愛知県史資料編 4 考古 4 飛鳥～平安時代』　愛知県
水野時二　1959　『尾張の歴史地理』　名古屋鉄道
水野時二　1971　『条里制の歴史地理学的研究』大明堂

付表　10世紀までの尾張国守一覧（猿投窯編年の年代観は『愛知県史　資料編4考古4飛鳥～平安』による）

猿投窯編年：C-2号窯期、I-41号窯期、C-2号窯期、I-25号窯期、NN-32号窯期、O-10号窯期、K-14号窯期、K-90号窯期、O-53号窯期、H-72号窯期

世紀	西暦	和暦	月	国守	事項
7世紀	645	大化元年			大化の改新
	672	天武天皇元年	6月	小子部連鉏鉤【国宰】	尾張国宰小子部連鉏鉤、壬申の乱で、2万人の軍を率いて大海人皇子（天武天皇）に帰参。その後自殺。
8世紀	702	大宝2年	11月	多治比真人水守	持統太上天皇、尾張国行幸。尾張国守多治比真人水守に封戸をあたえた。
	703	大宝3年	7月	多治比真人水守	任命。
	705	慶雲2年	5月	大伴宿祢手拍	任命。
	708	和銅元年	3月	佐伯宿祢大（太）麻呂	任命。
	714	和銅7年	10月	平群朝臣安麻呂	任命。
	716	霊亀2年	6月	笠朝臣麻呂	美濃国守と兼任。
	720	養老4年	10月	高向朝臣人足	任命。
	731	天平3年	5月	大伴宿祢兄麻呂	任命。
	740	天平12年	-	中臣人足	任命。
	741	天平13年	8月	小治田朝臣広千	任命。
	743	天平15年	6月	佐伯宿祢毛人	任命。
	745	天平17年	9月	百済王全福	任命。
	747	天平19年	5月	中臣朝臣清麻呂	任命。
	-	聖武朝	-	稚桜部　【「国上」】	『日本霊異記』に登場
	754	天平勝宝6年	4月	多治比真人土作	任命。
	761	天平宝字5年	10月	高麗朝臣広世	任命。
	762	天平宝字6年	4月	石川朝臣豊成	右大弁と兼任。
	764	天平宝字8年	10月	津連秋主	任命（介から守へ）。
	769	神護景雲3年	9月	-	美濃国堺の鵜沼川（木曽川）が氾濫、葉栗・中島・海部の3郡に被害。国府・国分寺も危険と奏上。
	770	宝亀元年	10月	雲麻王	少納言と兼任。
	774	宝亀5年	3月	石川朝臣豊麻呂	任命。
	774	宝亀5年	4月	相模宿祢伊波	任命。
	775	宝亀6年	8月	-	伊勢・尾張・美濃国に異常風雨、百姓300人以上と牛馬1000頭以上が漂没、国分寺や諸寺の塔19が破損。
	776	宝亀7年	3月	紀朝臣本	任命。
	781	天応元年	5月	陽侯忌寸玲璆	任命。
	782	延暦元年	2月	紀朝臣作良	任命。
	782	延暦元年	6月	高賀茂朝臣諸魚	任命。
	784	延暦3年	3月	紀朝臣鯖麻呂	任命。
	786	延暦5年	10月	文室真人子老	任命。
	789	延暦8年	2月	大原真人美氣	任命。
9世紀	806	大同元年	1月	藤原朝臣真川	任命。
	807	大同2年	7月	多朝臣入鹿	任命。
	808	大同3年	5月	平群朝臣真常	内匠頭と兼任。
	810	弘仁元年	1月	秋篠安人	任命。
	810	弘仁元年	9月	紀田上	任命。
	810	弘仁元年	9月	安倍朝臣犬養	任命。
	813	弘仁4年	2月	三原朝臣弟平	任命。
	815	弘仁6年	7月	滋野宿祢家訳	任命。
	825	天長2年	11月	伴氏上	任命。
	827	天長4年	6月	路年継	国守在任中に死亡。
	823～830	弘仁14～天長7年	-	伴真臣	左馬助などと兼任。
	837	承和4年	1月	藤原朝臣助	右近衛中将と兼任。
	841	承和8年	1月	橘朝臣氏人	左京大夫と兼任。
	842	承和9年	8月	橘朝臣氏人	刑部卿と兼任。
	843	承和10年	2月	橘朝臣氏人	神祇伯と兼任。
	845	承和12年	1月	源朝臣弘	参議と兼任。
	846	承和13年	1月	源朝臣弘	左大弁と兼任。
	848	承和15年	1月	源朝臣定	参議・中務卿と兼任。
	848	嘉祥元年	6月	源朝臣定	豊後国での祥瑞について上表。
	849	嘉祥2年	春	滋野朝臣貞主	参議と兼任。
	850	嘉祥3年	1月	南淵朝臣年名	任命。
	850	嘉祥3年	3月	滋野朝臣（貞主）	愛知郡司に熱田神戸の正税所納停止命令。
	850	嘉祥3年	11月	橘朝臣数岑	任命。
	854	斉衡元年	1月	豊階安人【権守】	任命。
	855	斉衡2年	1月	藤原宗青	
	858	天安2年	3月	藤原常永【権守】	任命。
	858	天安2年	4月	藤原宗青	死亡記事
	858	天安2年	5月	飯高朝臣永雄	任命。
	862	貞観4年	1月	安倍朝臣房上	任命。
	867	貞観9年	1月	吉備朝臣全継	任命。
	867	貞観9年	2月	家原氏主【権守】	任命。
	868	貞観10年	2月	家原氏主【権守】	
	871	貞観13年	1月	南淵興世	任命。
	879	元慶3年	2月	藤原高藤【権守】	任命。
	881	元慶5年	1月	藤原高藤	
	884	元慶8年	3月	清原真人常岑	任命。
	890	寛平2年	10月	藤原村椙	任命。
	896	寛平8年	2月	藤原忠方【権守】	任命。
	900	昌泰3年	5月	平伊望【権守】	任命。
10世紀	901	延喜元年	秋	平伊望【大守】	藤原時平の酒宴に参加。
	931	承平元年	2月	橘秘樹	尾張国への赴任遅延の件で許された。
	931	承平元年	3月	橘秘樹	摂政藤原忠平へ尾張国への赴任挨拶。
	939	天慶2年	8月	（藤原？）共理	尾張国守共理射殺事件が報告された。
	939	天慶2年	8月	源宗海	任命。
	943	天慶6年	3月	藤原朝臣興方	任命。
	943	天慶9年	10月	藤原朝臣興方	大嘗会の御禊で梨壺女御藤原安子の前駆を務めた。
	955	天暦9年	2月	藤原為輔	任命。
	961	応和元年	5月	藤原文正	母親死亡の手紙を、典侍が箱に納め穢れとなった。
	963	応和元年	6月	橘直幹【権守】	式部省請奏に署名した。
	963	応和3年	8月	藤原守平	海部郡大領に尾張是種を申請。
	967	康保4年	1月	橘恒平	任命。
	971	天禄2年	1月	源忠清【権守】	任命。
	974	天延2年	5月	藤原連貞	百姓らに訴えられ国守解任。
	974	天延2年	5月	藤原永頼	任命。藤原連貞の後任。
	980	天元3年	1月	菅原文時【権守】	従三位への叙位を願い出る。
	984	永観2年	2月	藤原公任【権守】	任命。
	988	永延2年	8月	藤原道綱【権守】	権中将と兼任。
	988	永延2年	11月	藤原元命	尾張守藤原元命、郡司・百姓らに訴えられる。
	989	永祚元年	2月	藤原元命	国守解任が決定される。
	989	永祚元年	4月	藤原元命	解任される。
	989	永祚元年	4月	藤原文信	任命。藤原元命の後任。
	989	正暦元年	2月	藤原道綱【権守】	奏上。
	990	正暦元年	8月	藤原文信？	藤原実資を訪問する。
	992	正暦3年	1月	大江匡衡【権守】	文章博士と兼任。
	993	正暦4年	1月	大江匡衡【権守】	弁官などとの兼任を願い出る。
	996	**長徳2年**	**1月**	**藤原理兼**	任命。
	997	**長徳3年**	**7月**	**藤原理兼**	解任。藤原道長の意向による。
	997	**長徳3年**	**7月**	**藤原知光**	任命。藤原理兼の後任。
	1001	長保3年	1月	大江匡衡【権守】	任命。

壬申の乱で有名な一コマ。国司制度以前に尾張に派遣された国宰の存在。

尾張国府関連集落が広範囲に展開する。

東山道吉蘇路（木曽路）を開通させた実力派国守が尾張国守も兼任。

天平13年(743) 国分寺建立の詔。同17年(747) 建立督促。各国で最大の課題に。

施設の再編・集約が進み、景観変化の開始。

8世紀後半には洪水で国府危機、異常風雨で国分寺などが被災。飢饉の記事も目立つ。

洪水による尾張国府の直接的な被災状況は不明だが、施設再編の契機になった可能性は充分考えられる。

延暦13年(794) 平安遷都。　–平安時代–

尾張国府跡Y・Z地区や、塔の越遺跡などで遺構や遺物の密度が濃い地点がいくつかみられる。8世紀後半の再編の結果。

中央の要職者が国守を兼任するようになる。

再び、遺構・遺物の分散化がみられるようになることから、新たな施設の再編などが進められたか。ただし、方位軸は前代からの正方位を踏襲。

貞観8年(866) 広野河（木曽川の一部）の工事現場を美濃国厚見・各務郡司らが襲撃。

元慶8年(884) 国分寺焼損のため、愛智郡の願興寺を国分寺とする。

任国への赴任が遅れて問題になった。この頃、東国で平将門の乱。

尾張大国霊神社北側への集中が進み、塔の越遺跡での土地利用は低下する。

尾張国地元で暴政を訴えられた第1号。この後地元から訴えられる事例が幾度も。

「尾張国郡司百姓等解文」で有名。

下津地区での新たな動き。美濃～尾張間の交通路との関わりか。

大江匡衡・赤染衛門夫婦が尾張国に赴任したのはこの頃。

愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第14号
2013.5
47-62p

清須における河川跡の研究

蔭山誠一・鈴木正貴

本論は、愛知県清須における旧河川の変遷について、これまでの発掘調査において確認された流路跡の検討に加え、明治17年作成の愛知県公文書館所蔵『地籍字分全図』から古河川跡の復元を試みた。その結果、①弥生時代から流れる朝日遺跡の谷Aを中心とする河川群から、②古墳時代後期から古代に流れたと思われる朝日西遺跡の東端部を流れる旧河川、③古代～戦国時代に美濃街道の東を南北に流れる旧河川、④江戸時代前期の名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城図絵』に描かれた旧五条川、そして⑤18世紀末の瀬替え以後の現五条川の5段階に河川が変遷することが明らかになった。

1．はじめに

愛知県清須市には、江戸時代初頭まで尾張の中心部として城下町があり、その中心部には現在も市域を流れる五条川が流れていた。この五条川の姿は、江戸時代前期に描かれた名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城図絵』（以下『古城絵図』と略す）にも描かれており、18世紀末に行われた瀬替え以前の姿が確認される。近年実施されてきた清洲城下町遺跡の発掘調査によっても、江戸時代以前の旧河跡と考えられる遺構が複数の地点において確認されており、遺跡の変遷とも関連して重要な成果と思われる。本論では、このような遺跡における歴史展開がおこる背景として、旧五条川の変遷について着目し、明治17年作成の地籍図を利用した解析、そして考古学的資料を通じた遺跡の分析と当地域に残る文献資料の分析を総合して明らかにしていきたい。

なお、本論における地名の表記は、近年の市町村合併に伴う変更された地名ではなく、西暦2000年（平成12年）時点の市町村名を使用し、明治17年作成の地籍図の解析に関する部分において、地籍図中に記載された旧村名を地域名として表記する。

2．清須周辺の地籍図の解析

（1）方法

ここでは明治17年作成の愛知県公文書館所蔵『地籍字分全図』（以下『地籍図』と略す）を定本として用いる。これまでの海部郡北東部（中・近世研究部会 2004）と海部郡甚目寺町（現あま市）・西春日井郡新川町（現清須市）・西春日井郡西枇杷島町（現清須市）（加藤 2006）、名古屋市中村区・西区北西部（蔭山・加登・鬼頭・鈴木・松田 2007）の分析に加え、今回新たに西春日井郡清洲町（現清須市）・西春日井郡春日町（現清須市）・稲沢市南東部・西春日井郡西春町（現北名古屋市）・名古屋市西区北部の地域について解析を行った。地籍図の解析方法は、地籍図に記載された地目を寺院・神社・宅地・畑地・林・薮と水田・草生などの2群に分け、前者を微高地群、後者を低地部として色分けして図化した（図1・表1）*。その結果、27箇所の微高地群（微高地群1a～微高地群25）と、26箇所の低地部（低地部1a～低地部25）が抽出された。以下、微高地群と低地部について、それらの特徴や前後関係について述べるため

* 図化した地籍図
宇福寺村、中之郷村、落合村、下之郷村、井之口村、日下部村、奥田村、増田村、六角堂村、北市場村、西市場村、一場村、清洲村、朝間村、土田村、上條村、田中村、朝日村、阿原村、小場塚新田村、助七新田村、寺野村、須ケ口村、西堀江村、東今宿村、西今宿村、上萱津村、甚目寺村、方領村、石作村、新居屋村、森村、小路村、堀越村、下小田井村、中小田井村、平田村

に、現在の春日地域、朝日遺跡谷A・谷B、福田川流域、五条川下流域の4つの地域に分けて上流側から順に説明していきたい。

尚、本稿では、2つの並行する微高地群2箇所とその微高地群に挟まれた低地部1箇所の組み合わせを比較的大規模な旧流路との痕跡とし、1箇所の微高地群の中に流路の痕跡と思われる狭い低地部を小規模な河川跡として抽出した。また、明治17年作成の地籍図において、それ以前に形成された地形に加えて江戸時代における新川掘削や美濃街道の整備等の開発に伴う大きな地形改変が認められるが、中世以前に形成された地形と江戸時代の地形改変を完全に分別することは困難である。

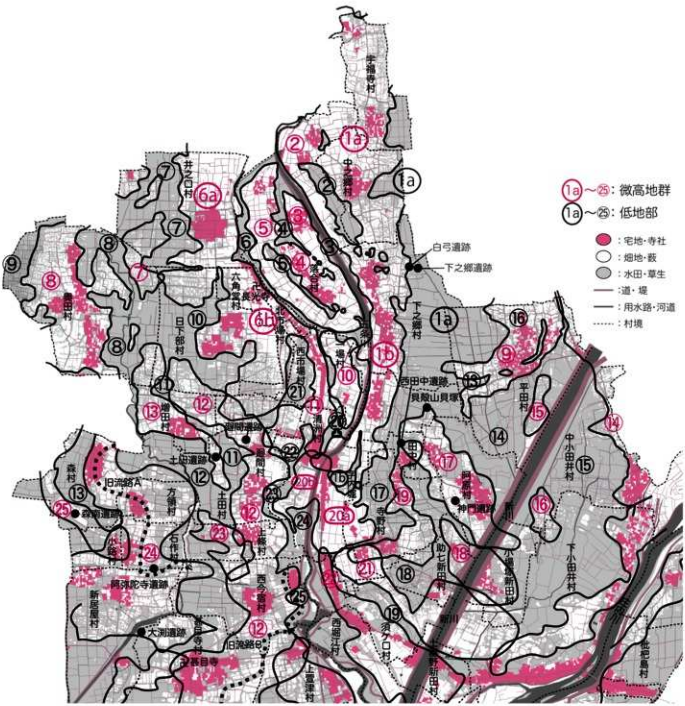


図1　清須市周辺の地籍図からみた旧地形（約1:42,500）

表1　地籍図からみた地形分類

関連する地形群	地形	東側・北側微高地群	低地部	西側・南側微高地群	地形が形成された時期
春日	地形1	微高地群1a・1b	低地部2・1	微高地群2・3	
春日	地形2	微高地群2	低地部3	微高地群3	18世紀末～現代
春日	地形3	微高地群3・4	低地部4・5	微高地群5	
春日	地形4	微高地群3	低地部4	微高地群4・5	
春日	地形5	微高地群5	低地部6	微高地群6a・6b・10	古代～18世紀末（古城絵図）
福田川	地形6	微高地群6a	低地部7・8	微高地群7・8	
福田川	地形7	微高地群6a・7	低地部8	微高地群8	
福田川	地形8	微高地群6a	低地部10・8	微高地群6b	
福田川	地形9	微高地群12	低地部11	微高地群13	
福田川	地形10	微高地群13	低地部(8)・12	微高地群24	
福田川	地形11	微高地群24	低地部13	微高地群25	弥生時代以前
朝日遺跡谷A・谷B	地形12	微高地群9の北側・1b	低地部13・1a・1b・16・17・18	微高地群9の南側・17	弥生時代以前、朝日遺跡谷A
朝日遺跡谷A・谷B	地形13	微高地群9・15・16・19・21	低地部2・1a・1b・14・17・24・25	微高地群17・1b・20a・20b	弥生時代後期以後、朝日遺跡谷B
朝日遺跡谷A・谷B	地形14	微高地群9・19・21	低地部1a・17・25	微高地群1b・20a	古墳時代中期～古代、朝日遺跡廃絶後
五条川下流	地形15	微高地群11	低地部21	微高地群6b	地形としては古いが、自然河道を伴わない可能性あり
五条川下流	地形16	微高地群10・20b・20a・1b・22	低地部20・22・24・25	微高地群11・12	古代～戦国時代
五条川下流	地形17	微高地群1b・20b・20a・22	低地部6・3・23・25	微高地群10・11・12	織豊期～18世紀末（古城絵図）
五条川下流	地形18	微高地群1b・20a・22	低地部3・25	微高地群10・20b・12	18世紀末～現代

（2）春日地域における地形

春日地域とした西春日井郡春日町（現清須市）と西春日井郡西春町（現北名古屋市）の地域では、比較的大規模な河川によるものと思われる地形が5箇所みられる。

地形1は微高地群1a・1b（五条川東岸の宇福寺村から中之郷村西部を経て下之郷村西部に至る）と微高地群2・3（落合村の五条川東岸から下之郷村西部と落合村五条川西岸の付近）に挟まれた低地部2・1（落合村東端部分から下之郷村西部を北西から南東にのびる窪地状に見える水田部分）である。

地形2は微高地群2（落合村の五条川東岸の付近）と微高地群3（五条川西岸の落合村東側付近）に挟まれた低地部3（現在の落合村と下之郷村の中を流れる五条川）が抽出できる。

地形3は微高地群3・4（五条川西岸の落合村東側）と微高地群5(落合村西側)に挟まれた低地部4・5（五条川西岸の落合村中央部を北東から南にのび、微高地群1・4のつながる地点を挟んでその南を北西から南東にのびる部分）である。

地形4は微高地群3（五条川西岸の落合村東側付近）と微高地群5・4（落合村西側から落合村中央部を経て南東にのびる部分）に挟まれた低地部4（五条川西岸の落合村中央部を北東から南にのびる部分）である。

地形5は微高地群5（五条川西側の南北に弧状にのびる部分）と微高地群6a・6b・10（井之口村東部から六角堂村と北市場村を経て下之郷村に至る部分）に挟まれた低地部6（落合村西端を南北に弧状にのびる部分）である。

（3）福田川地域における地形

改修前の福田川の流域である稲沢市南東部、西春日井郡清洲町西部（現清須市）、海部郡甚目寺町（現あま市）の地域では、比較的大規模な河川によるものと思われる地形を6箇所抽出した。

地形6は微高地群6a（井之口村東部から奥田村北東部に至る部分）と微高地群7（井之口村西部から奥田村中央北端部に至る部分）に挟まれた低地部7・8（井之口村中央部と井之口村西端部から奥田村中央部にある福田川周辺部）である。

地形7は微高地群7（井之口村西部から奥田村中央北端部付近）と微高地群8（奥田村西側）に挟まれた低地部8（奥田村中央部付近）である。

地形8は微高地群6a（井之口村東部から奥田村北東部に至る部分）と微高地群6b（六角堂村北部から日下部村中央部に至る部分）に挟まれた低地部10・8（六角堂村北西端部・日下部村中央部北側を経て奥田村東部に至る部分）である。

地形9は微高地群12（日下部村南端中央部から増田村北東部を経て廻間村中央部に至る部分）と微高地群13（日下部村南西端部・奥田村南東端部から増田村南西部を経て土田村西部に至る部分）に挟まれた低地部11（日下部村南西部から増田村中央部を経て土田村中央部に至る部分）である。

地形10は微高地群13（日下部村南西端部・奥田村南東端部から増田村南西部を経て土田村西部に至る部分）と微高地群24（森村中央部から方領村を経て石作村南西部・小路村をとおり、新居屋村東部に至る部分）に挟まれた低地部8・12（奥田村東部からつづく森村東部を経て土田村西部に至る部分）である。

地形11は微高地群24（森村中央部から南西にある方領村を経て石作村南西部・小路村をとおり、新居屋村東部に至る部分）と微高地群25（森村南西部から小路村中央部に至る部分）に挟まれた低地部13（森村中央部の北端から南端に至る部分）である。

（4）朝日遺跡谷A・谷B地域における地形

現在の名古屋市西区と清須市の境界部分にひろがる朝日遺跡を中心とする地域で、西春日井郡春日町東部（現清須市）と西春日井郡清洲町東部（現清須市）、西春日井郡新川町北部（現清須市）、名古屋市西区北西部の地域では、比較的大規模な河川によるものと思われる地形を3箇所抽出した。

地形12は微高地群9北側・1b（平田村北東部から同村中央部北側から朝日村西部に至る部分）と微高地群9南側・17（平田村北東部から同村中央部南側から朝日村南西端部と田中村北部を経て阿原村西部を経て小場塚新田村北端部に至る部分）に挟まれた低地部13・1a・

1b・16・17・18（平田村中央部から清須村字内堀付近と田中村南部・寺野村中央部を経て助七新田村西部に至る部分）である。

地形 13 は微高地群 9・15・16・17・21（平田村中央部から中小田井村南端部に至る部分と朝日村南端中央部と田中村中央部を経て寺野村南部と須ケ口村北部に至る部分）と微高地群 17・1b・20a・20b（朝日村南端中央部から阿原村西部を経て小場塚新田村に至る部分と下之郷村西部から朝日村西部を経て清洲村東部付近に至る部分）に挟まれた低地部 1a・1b・14・16・17・18・24・25（下之郷村東部・平田村北西部から朝日村北東部を経て阿原村東部・平田村南部に至る部分と朝日村北東部から分かれて清洲村字内堀付近と寺野村西部を経て須ケ口村北端部に至る部分）である。

地形 14 は微高地群 9・19・21（平田村中央部から中小田井村南端部に至る部分と朝日村南端中央部と田中村中央部を経て寺野村南部と須ケ口村北部に至る部分）と微高地群 1b・20a（下之郷村西部から朝日村西部を経て清洲村東部付近に至る部分）である。

（5）五条川下流地域における地形

五条川流域の西春日井郡清洲町（現清須市）を中心とする地域で、比較的大規模な河川によるものと思われる地形を 4 箇所抽出した。

地形 15 は微高地群 11（北市場村中央部から西市場村東部を経て廻間村中央部付近に至る部分で、廻間村中央部にて微高地群 12 とつながっている）と微高地群 6b（北市場村中央部・日下部村東部付近から廻間村北西部にて至る部分で、廻間村北西部にて微高地群 12 とつながっている）に挟まれた低地部 21（西市場村西部から廻間村中央部に至る部分）である。

地形 16 は微高地群 10・20b・20a・1b・22（一場村北部から清洲村北東部を経て清洲村中央部を通って須ケ口村に至る部分）と微高地群 11・12（北市場村中央部から西市場村東部と廻間村中央部、土田村東部、上條村東部を経て西今宿村に至る部分）に挟まれた低地部 20・22・24・25（一場村西部から清洲村北東部と清洲村中央部を経て須ケ口村西部に至る部分）である。

地形 17 は微高地群 1b・20b・20a・22（下之郷村西部から朝日村西部と清洲村中央部を経て須ケ口村西部に至る部分）と微高地群 10・11・12（一場村北部から廻間村東部、土田村東部、上條村東部を経て西今宿村に至る部分）に挟まれた低地部 6・3・23・25（落合村南端部・一場村北東端部から御園村と朝日村の現五条川を通り、廻間村東端部と土田村東端部、上條村東端部を経て須ケ口村西端部に至る部分）である。

地形 18 は微高地群 1b・20a・22（下之郷村西部から朝日村西部と清洲村中央部を経て須ケ口村西部に至る部分）と微高地群 10・20b・12（一場村北部から清洲村中央部を経て西今宿村に至る部分、自然地形の起伏を多く含み古い地形に伴う低地部が多く入り込む）と低地部 3（現五条川の部分）である。

（6）地形の新旧関係

次に上述した 18 ヶ所の地形の新旧関係を分析する（図 2）。

春日地域では、地形 2 の低地部 3 は 18 世紀末に瀬替えされた五条川の流路に伴う地形で最も新しい。それ以前には地形 5 に伴う低地部 6 が 17 世紀中頃に描かれた『古城絵図』の五条川に対応すると思われ、その東側にのびる微高地群 5 が落合村北端部において地形 3 と地形 4 に伴う低地部 4 を閉ざしている。この地形 5 に伴う微高地群 5 の上には南北に現在の美濃街道がはしっており、平安時代にさかのぼる長光寺をはじめとする寺院や古代にさかのぼる遺跡が立地している。地形 1 に伴う低地部 2 は微高地群 5 に続く微高地群 2 が低地部 2 の北端を閉ざしていること、微高地群 1b の北端部にある下之郷遺跡で、弥生時代の貝塚が確認されていること、その西に隣接する白弓遺跡が弥生時代～古墳時代の遺跡であることから、微高地群 1a に伴う地形 1 の形成が弥生時代以前になる可能性がある。また地形 3 に伴うと考えた低地部 5 は低地部 4 の西にある微高地群 5 から続く微高地群 4 により北端を閉ざされており、地形 3 は地形 4 より古いものと考えられる。

福田川地域では、地形 7 は地形 6 に伴う低地部 7・8 の内、低地部 7 が微高地群 7 により南端部を閉ざされた後の地形である。地形 9

図 2　地籍図からみた地形の変遷

はその中に伴う低地部 11 が地形 10 に伴う微高地群 13 により南端部が狭く閉ざされていく状況になっており、地形 10 より古いように思われる。地形 11 に伴う低地部 13 は地形 10 に伴う微高地群 24 により完全に閉ざされており、古い特徴を持つ。地形 8 に伴う低地部 10 は地形 6 に伴う微高地群 6a と地形 7 に伴う微高地群 7 の南側を削剥しているようであり、また地形 9 と地形 10 に伴う微高地群 12 と微高地群 13 の北側も削剥しているようにみえるので、地形 8 は福田川地域の地形の中では最も新しい特徴が見られる。福田川地域の地形形成年代は、微高地群 12 に弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた廻間遺跡、微高地群 13 に弥生時代～古墳時代の土田遺跡、微高地群 25 に弥生時代中期以後に営まれた森南遺跡、微高地群 24 に弥生時代中期～後期に営まれた阿弥陀寺遺跡が立地しており、これらの地形の原型が弥生時代以前に形成されていた可能性が高い。

朝日遺跡谷 A・谷 B 地域では、地形 12 に伴う低地部 13 が朝日遺跡谷 A の痕跡と考えられ（県埋文セ・石黒編 1991）、微高地群 17 の北側の縁辺にて弥生時代の西田中遺跡があること、同じ微高地群 17 の中央部付近の阿原村神門にて古墳時代前期初頭の線刻人面文土器が出土していることから、地形 12 が弥生時代以前に形成された地形である可能性が高い（金森・天野 1998）。また低地部 1b にあたる清洲城下町遺跡 62H 区・63L 区では古墳時代後期以前の流路痕が確認されており、地形 12 の段階にさかのぼるものと考えられる。地形 13 に伴う低地部 1a は弥生時代以前の流路により形成された可能性が高いが、微高地群 9 が低地部 1a と南に続く低地部 14 により途切れている状況が明瞭に確認できる。朝日遺跡における調査成果からは、弥生時代後期頃に低地部 13 を流れていた谷 A から、南東に流れる谷 B が流路を変えて流れることが確認されており、古墳時代中期以後には朝日遺跡北側を北東から南西に流れる流路痕が確認されている（県埋文セ・蔭山編 2007）*。この流路に伴う影響で、朝日遺跡北集落と南集落、その周囲にある墓域にあたる弥生時代の遺構の上層に流路の痕跡や湿地性堆積物を多く確認できる点と対応する（県埋文セ・石黒編 1991 他）。清洲城下町遺跡の発掘調査成果では古代の遺構・遺物が清洲村東部にある 62E 区などの地点において多数確認されており、この段階に低地部 17 付近に流路の中心が移り、微高地群 19 が形成されていたものと考えたい。地形 14 は地籍図における地形 13 の低地部 1b の東側において微高地群 1b と微高地群 20a の一部がつながっている状況が確認でき、地形 13 の低地部 17 のみに流路が存在した可能性を考えた。

地形 15 に伴う低地部 21 は南西側を微高地群 12 により閉ざされており、地形 9 より古い地形と考えられ、低地部 21 は北側を微高地群

* 春日町教育委員会による平成 13 年度に実施された朝日遺跡、春日町大字下之郷字長久手・舟付地点の立ち会い調査において、北居住域北東部をめぐる外環濠の溝を削剥する流路痕が観察された。その流路では、西に向かう側方堆積が観察された。調査時には春日町教育委員会の鈴木弘子氏にお世話になった。

21に閉ざされていることから、地形15は地形16より古い地形の可能性が高い。地形17に伴う低地部6・3・23・25は17世紀中頃に描かれた『古城絵図』にみられる五条川の流路とほぼ一致しており、地形16に伴う低地部20・22がその南側を微高地群1bにより閉ざされており、低地部24は微高地群20bによりその北側を閉ざされていて、地形16は地形17に先行するものであることが明らかである。地形18は18世紀末にある五条川の瀬替え以後の地形で、現在の五条川の元となるものである。五条川の両岸には堤があり、先に述べたように江戸時代以前に形成された地形の起伏を多く横断する状況が観察できる。

3．発掘調査事例からたどる旧河川

（1）発見された自然流路の分類

発掘調査で発見される自然流路の認定には若干の困難が伴う。自然流路は巨大であるために発掘調査では多くの場合に全体を把握することができない。加えて、特に、後期清須城下町で構築される幅が10～40mの規模を持つ巨大な堀の存在は、自然流路との峻別が難しい場合もある。こうした中、清洲城下町遺跡で発見された自然流路には3種のパターンが存在すると考えられる。

自然流路Aタイプ　主たる堆積物が厚い細粒砂から中粒砂となるもの。この堆積物は激しい流水に伴うものと思われ、地形を大きく浸食する場合も考えられる。調査において流路岸は不明瞭な場合が多いが、概ね外側に行くに従い極細粒砂からシルトの堆積に変化することが多いと思われる。

自然流路Bタイプ　主たる堆積物が厚い粘土となるもの。河床部が三日月状に埋積河跡沼になることもあり、流路岸を認識できる場合が多い。水流の変更により止水的な環境になっていたものと思われる。場合によっては、人工的な堀と識別が困難なケースもある。

自然流路Cタイプ　細粒砂やシルトなどが互層となって堆積するもので、緩い傾斜を持つ場合が多い。流路の位置が徐々に移動していく際に、微高地化する部分で生じる堆積と推定される。

上記の区分にしたがい個別の事例を紹介する。

（2）低地部20・低地部22に関連する自然流路

御園神明社西側に南北に拡がる低地部20では、自然流路AタイプとBタイプの二者が確認された。この流路は低地部22につながるものと推測されるが、ここでは北側の調査区から発掘調査事例を紹介し、順次この流路を南へ追跡することとしたい（図3）。

（2－1）61AB区（県埋文セ・小澤編 1992）

名古屋環状2号線関連の調査区61AB区は、報告書では「旧河床部と思われる後背湿地に位置し」、13～14世紀「の段階では沼沢地になっていたと思われ、暗灰褐色粘質土や粗砂などが互層となってい」たという（10p）。幅約45m、深さ約2mの南北方向の大溝が検出された。粘土を主体とする埋土から多量の瓦を含む城下町期後期の遺物が出土しており、織田信雄の改修による後期清須城内堀に相当すると推定される。内堀が構築される際に整地が行われており、堀肩部は整地土が堆積している（24P）。城下町期前期の状況は不明であるが、おそらく城下町期前期以前に自然流路Cタイプが存在したと考えられる。その埋地を利用して城下町期後期の内堀が構築されたとみられる。

（2－2）清須市一場地内道路敷設関連（清須市教委・篁他 2012）

清須市12区は県埋文セ61B区に北接する地点で、報告書では耕作土下位にⅣ層（河川または河川の氾濫堆積）とⅤ層（河川堆積）が堆積するという。Ⅳ層から山茶碗などの中世陶器が出土し、濃尾地震とは異なる地震痕（液状化現象）が買いている。そして、Ⅳ層の上面で城下町期前期の溝ＳＤ18と城下町期後期の内堀ＳＤ20が検出された。Ⅴ層は明黄灰色砂～粗砂が1m以上確認されている。鬼頭によれば、Ⅴ層に相当する部分は流路の中央部付近の堆積と推定され、Ⅳ層に相当する部分は急激な粒子サイズの変化が認められるとし、突然の流路変更があったことを想定した（鬼頭 2012）。

当地点では、城下町期前期よりも前に自然流路Aタイプが流れ、西部で前期の道構、東部で後期の道構が掘削されたと整理できる。

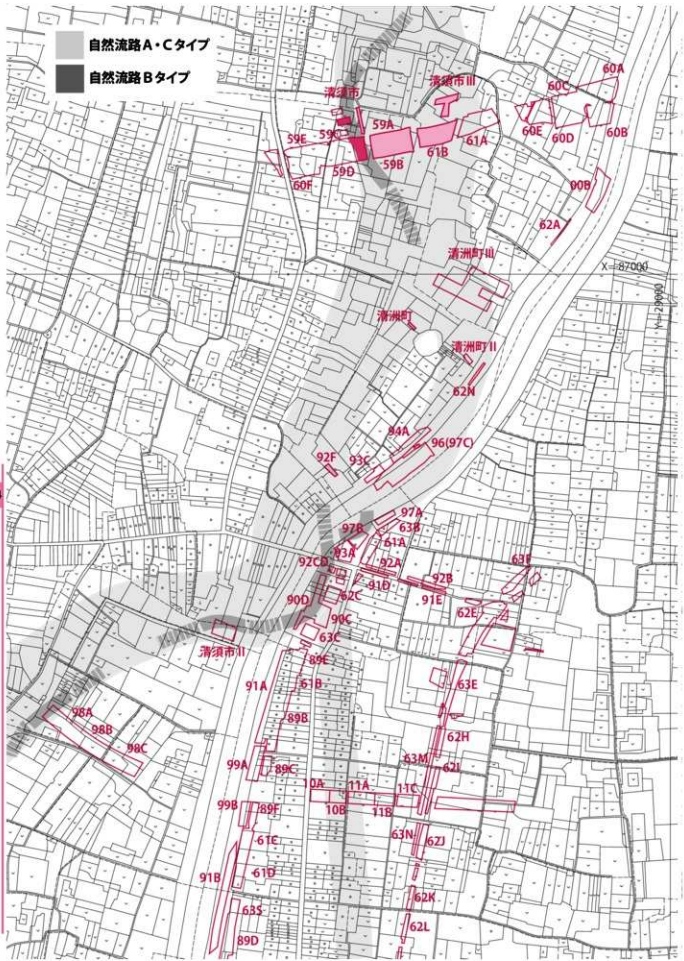


図3　清洲城下町遺跡発掘調査による旧河川跡（約1:5,000）

（2－3）学校法人佑愛学園地点
（清須市教委・未報告）

清須市13区は県埋文セ59C区に北接し、黒灰色粘土が堆積する自然流路Bタイプが確認されている。本論執筆時点で発掘調査中であるが、流路の西肩が検出され、粘土層から木製品を含む遺物が出土した。これらの遺物は城下町期前期に位置づけられる。この流路が埋積した後に南部は整地され、北部は中堀が掘削された。南部の整地層上面で柱穴などの遺構が構築され、これらは現状では城下町期後期に属するとみられる。

当地点では、城下町期前期に埋積した河跡沼が存在し、後期に大規模な造成を伴い中堀と屋敷（樹木屋敷か）が設置されたと整理できる。

（2－4）清洲町総合福祉センター関連
（清洲町教委・柴垣編 2002）

本丸北に所在する清洲町02区では、耕作土下にシルト層とオリーブ黄色砂層（基盤層）が堆積する。調査区東部では、基盤層（砂層）上部に植物遺体を含む黒褐色シルト層が堆積し、ヨシなどの多年生植物が繁茂する低湿地の様相を呈するという（2P）。また、調査区北部では黄褐色砂層上に6層の砂質シルト層が堆積する。城下町期の溝や井戸などの遺構はシルト層上面で確認され、調査区北東半部で城下町期前期の遺構群が、南部と西端部で内堀が展開している。

当地点では、城下町期前期よりも前に自然流路Aタイプが流れたとみられ、北東側に自然堤防の端部が所在する。この自然堤防を中心に城下町期前期の遺構群が広がり、後期に本丸と二の丸が普請されたと整理できる。

（2－5）62A・N区
（県埋文セ・鈴木編 1994b）

五条川河川改修関連の調査区のうち、本丸地区北部にある62A区では、調査区全体で溝状遺構が検出された。調査時点では沼沢地と認識されたが、詳細は不明である。城下町期後期よりも前の自然流路Bタイプが流れたとみることも可能だが、確定的ではない。一方、本丸地区南部にある62N区では、地層が現五条川（東側）に向かって傾斜する状態が認識されたが、詳細は不明である。

この2つの調査区では、積極的に自然流路のあり方を検討することは難しいと思われる。

（2－6）清洲ふるさとのやかた建設関連
（清洲町教委・野口編 1990）

本丸に北接する清洲町90区では、水田耕作土下の標高2m前後に粘土と砂の互層（基盤層）が堆積する。その上位で溝SD01と盛土状遺構が検出され、多くの瓦類と江戸時代の陶磁器が出土した。基盤層下に「旧五条川と考えられる粗砂層」があり、湧水したという（4P）。

当地点では、おそらく城下町期後期よりも前に自然流路Aタイプが流れたとみられる。

（2－7）94A・93C区
（県埋文セ・鈴木編 1997）

本丸東部で前五条川堤防に西接する94A・93C区では、標高約3.5mまで褐色シルトや黄橙色シルトが厚く堆積し基盤層を形成する。このシルト上面で城下町期後期の本丸内堀SX01などが検出された（7P）。シルト最上部から15世紀中頃の陶磁器・土器類が出土し、この時期の遺構も伴う。

当地点では、少なくとも城下町期以降は流路ではなく陸地化した部分といえる。

（2－8）92F区・本丸北西部トイレ地点
（県埋文セ・鈴木編 1997他）

本丸南部に相当する92F区では、近世の用水施設の下位に調査区全体が黒色粘土を主体とする堆積物が確認された（11P）。黒色粘土の最下部は標高0.7mを測る。城下町期後期の瓦が多量に出土したことから、清須城南部の内堀であると推定される。一方、本丸北西部トイレ地点でも、調査区全体が黒色粘土を主体とする堆積物が確認され、城下町期後期の瓦が多量に出土した。清須城北西部の内堀であると推定される。

両地点とも、城下町期前期以前の状況を知ることはできない。（2－1）61AB区と同様に、後期清須城内堀の前身となる中世の流路が存在した可能性を指摘できるが、不明といわざるを得ない。

（2－9）96・97C区
（県埋文セ・宮腰他編 2002）

96・97C区は、94A区の南東部のより旧五条川に近い位置に当たる。西側の微高地部で

は、整地土下の標高約 2.2m で灰色シルトやオリーブ灰色粘質シルトが堆積し基盤層を形成する。これを掘削する形で流路に平行して溝を掘り城下町期後期の石垣が構築された。石垣遺構の東側に城下町期後期の自然流路 SX01 が存在する。調査区北西部で急激に落ち込むが、全体にはなだらかに傾斜し現五条川の流路部分に最深部（本流部）があったと思われる。川岸に相当する石垣前面で多量の瓦が出土した。石垣遺構の下位に城下町期前期の幅約 7m の溝 SX02 が存在し、木製品を多量に含むシルトが埋積していた。溝 SX02 の底面は標高約 1.0m を測り、その下位には部分的に黒色粘質シルトが認められるが、大部分は暗青灰色粗砂が厚く堆積する。溝 SX02 の評価は前期清須城居館の西堀に比定する説（鈴木 2008 など）があるものの、旧河川跡の可能性も指摘でき、現時点では定見を得ていない。なお、溝 SX02 の下位には暗青灰色粗砂が厚く堆積していた。

当地点では、暗青灰色粗砂の存在から城下町期前期よりも前に自然流路 A タイプが流れたとみられる。溝 SX02 を自然流路と解釈すると、城下町期前期では部分的に自然流路 B タイプが存在し、城下町期後期には現五条川の河川敷に相当していたと整理できる。

（2－10）97A ～ 63C 区

（県埋文セ・鈴木編 1994a、宮腰他編 2002）

五条川河川改修に伴う発掘調査のうち、五条橋地区（97A・97B・93A・92C・90B・92D・62C・90C・90D・63C 区）で旧五条川跡東岸部（Ⅳ NR4001・Ⅷ NR02）が検出されており、下半は灰色～灰黒色粘土が厚く堆積する。近接する 63B・61A・92E 区などの範囲と南側の 89E・91A 区ではこの流路は確認されていないので、南部では西に彎曲して流れたものと推定される。97B・90B・62C 区で流路が入り込み入江状となり、90D 区では河床部が平面で三日月状に埋積した河跡沼が確認された。入江部では木製構築物Ⅳ SX4013・Ⅳ SX4014 があり、川岸には杭列や岸に平行する溝などが設けられた。この河川跡は城下町期前期から徐々に埋積し、城下町期後期には完全に陸地化してその上面で中堀などの遺構が形成された。ただし、97A・97B 区では宿場町期の遺物を含む旧五条川跡（NR00・NRA・NRB）が確認されている。一方、五条橋地区の東部（91D・91E・92A・92B 区：鈴木他編 1994a）では標高 4.0m 前後で宿場町期の遺構面、標高 3.5m 前後で城下町期の遺構面が展開し、その下位から大きく灰黄褐色シルト、暗い灰黄色砂質シルト、褐色粘質土の順に堆積している。褐色粘質土がわずかに凹む部分には黄褐色粘質シルトがあり、その上面から奈良時代の遺構が掘削されていた。このことから旧五条川跡東岸の微高地は古代以前に形成されたと類推される。

当地点では、自然流路 B タイプが流れており、城下町期前期から徐々に埋積し流路は西へ移動し、城下町期後期には概ね現五条川に固定されたたものと推測される。当地点では 97B 区で確認されたように東岸の微高地を削るように流れているが、広い目でみれば東岸微高地は本流路によって形成された自然堤防とみられ、その形成は古墳時代後期以前まで遡る。当地点の北側で南流する自然流路 A タイプが中世に本地点に存在したとしても矛盾は生じない。

（2－11）清須市清洲小学校体育館関連

（清須市教委・桐山他 2009）

本丸南に所在する清須市 08 区では、盛土と耕作土の下に調査区のほぼ全体で河道内埋土層（4P）が堆積し、調査区南壁付近で河岸部が確認された。川岸部は標高 2.0m でオリーブ褐色シルトなどが堆積し、標高 1.0m で黄褐色中粒砂層（基盤層）となる。河道内埋土は新古 2 段階に区分され、新埋土層では 19 世紀まで、古埋土層では 18 世紀までの遺物を含む。堆積物はオリーブ黒色や黒褐色を呈するシルトや中粒砂の互層である。流路南肩はほぼ東西方向を向き、調査区北東部に中州状の砂の高まりが確認された。また、南西部では河岸が 2 時期に分かれて形成されたといい、新河岸と古河岸の間の堆積層から永享 11 年 (1439) に書写された柿経が出土した。

古河岸は 1439 年には存在したと推測されることから、15 世紀以前に自然流路 B タイプが東西方向に流れたとみられ、これが（2－10）97A ～ 63C 区で確認された南部で西に向きを変えた自然流路に対応する可能性が高い。

（2－12）清須市清洲小学校プール関連
（清須市教委・石松他 2007）

本丸南に所在する清須市 07 区では、耕作土下ににぶい黄橙色砂質土層などが堆積し、城下町期の遺構が展開する。当地点では、少なくとも城下町期以降は流路ではなく陸地化した部分といえる。

（2－13）県道助七西市場線関連
（98A 区：県埋文セ・早野編 2005）

98A 区西部で自然流路 NR01 の東岸部が確認された。上層が灰色シルト、中層が灰色粗粒砂によって埋積され、下層は均質な粘土が連続して堆積した。上層と中層は 18 世紀後半の遺物を含有し、下層は中世の遺物が散発的に出土するという。基盤層（灰白色粗粒砂）は標高約 2.2m で確認され、その上面から遺構が確認され、12 世紀後半以降の遺物が出土した。

当地点では、12 世紀頃から自然流路Ｂタイプが流れ、18 世紀に埋積したことが判明した。これが（2－11）清須市清洲小学校体育館関連の調査で確認された河道に繋がるものと推測される。

（2－14）県道助七西市場線関連
（10B・11A 区：県埋文セ・鈴木編 2013）

10B 区から 11A 区にかけて下部で中粒砂が厚く堆積する部分が確認された。この砂層から灰釉陶器小破片が出土しており、平安時代まで遡る自然流路が存在したと推測されている。その東岸部では浅黄色シルトなどで構成される自然堤防が展開しており、古墳時代後期から平安時代までの集落が展開していた。砂で埋積された自然流路の上位には城下町期前期以降の遺構が展開していた。

当地点では、平安時代以前から自然流路Ａタイプが流れ、中世にはほぼ埋積していたと想定される。流路は南北に走る形と想定され、その上流部は（2－10）97A ～ 63C 区から繋がるものと推測されるが、（2－11）清須市清洲小学校体育館関連の調査で確認された河道とは別の流れとみられる。（2－11）の自然流路と（2－14）の自然流路は分岐したものか、流路変更による新旧関係があるものかは、現時点では判断が難しい。

（2—15）まとめ

御園神明社西側に南北に拡がる低地部 20 では、城下町期前期までに埋積した自然流路Ａタイプと城下町期後期までに埋積した自然流路Ｂタイプが確認された。自然流路Ａタイプは 14 世紀頃に部分的に中州状？に陸地化し、そこに城下町期前期の遺構が構築された。なお、後期清須城本丸地点（現清洲公園）では、確実に検出された自然流路Ａタイプの範囲は狭いため西側の清須城内堀もその範囲に含めて考えたい。その場合、後期清須城本丸部分の微高地（94A・93C 区）は中州状の微高地と考えざるを得ない。自然流路Ｂタイプは大きく蛇行しながら流れたと思われ、現状ではその位置を部分的にしか復元できない。城下町期前期の早い段階に機能していたが徐々に埋積し、城下町期後期には完全に埋積してしまった部分が存在するといえる。

このように低地部 20 に関わる自然流路を検討した結果、城下町期前期以前は御園神明社西側に河川が流れることが推測された。この地点は、城下町期後期には清須城本丸・二の丸・樹木屋敷やそれに付随する堀などが構築され、河川はほぼ現五条川の位置に流れたものと考えられる。この結果、織田信雄の清須城の改修は流路の変更を伴うものであったことが推定される。

（3）この他の発見された自然流路

前項で示したもの以外の自然流路について説明する。

（3－1）清須市給食センター地点
（清須市・未報告）

清洲城下町遺跡の最北端部に存在する清須市給食センター地点では、江戸時代に埋積した旧河川（自然流路Ａタイプ）が確認された。現五条川に瀬替えされる以前の流路と思われ、『春日井郡清須村古城絵図』に描かれた「清須川」に合致するとみられる。

（3－2）00B 区（県埋文セ・蔭山 2001）

五条川河川改修に伴う発掘調査のうち、名古屋環状２号線の南で五条川右岸に 00B 区は存在する。ここでは、東側に傾斜するシルトや砂の互層状の堆積（自然流路Ｃタイプ）が確認された。堆積物中から山茶碗片が出土した。流路の中心は現五条川の位置にあると思われ、詳細

は不明。低地部 20 を主体とする流路とは直接的に関連しないと思われるが、その分流であった可能性は考えられる。

（3－3）62H 区周辺

（県埋文セ・鈴木編 1990）

現清洲東小学校西側に所在する 62H 区では、厚い黄褐色シルト層の上面で城下町期の遺構、シルト層中で奈良時代を中心とした遺構が展開した。このシルトと基盤層である粗砂層の間に黒灰色粘土が厚く堆積していた。北側の 63E 区および南側の 62I 区に比べ粘土層は厚く、粗砂の上面は約 1m 下がり標高約 0.5m を測る。

当地点では、古墳時代後期よりも前の谷地形が存在し、自然流路 B タイプが流れていたと考えられる。弥生時代まで遡る可能性は否定できない。

（3－4）63F 区周辺

（県埋文セ・鈴木編 1990）

62H 区の北約 200m にある 63F 区では、奈良時代から城下町期の遺構が展開するシルト層の下位に拡がる黒灰色粘土層が確認された。この粘土がどのように展開したかは全く不明であるが、弥生土器片が少量出土している。

当地点では、弥生時代まで遡る自然流路 B タイプが存在した可能性を指摘できる。

（3－5）89D 区～ 90F 区

（県埋文セ・鈴木編 1994b）

五条川河川改修に伴う発掘調査の南部地区では、現地表面が低く、標高約 2m で砂層が確認される。自然流路 A タイプの存在が考えられるが、この地区では鎌倉～室町時代の溝などが確認されたことから、流路は古代以前に形成されたものと考えられる。

4．まとめ

最後に、等高線図による現在の表層地形解析と明治 17 年作成の地籍図の解析との関係について述べ、清須を流れていた旧河川を推定したい。その際、先に分析した発掘調査成果との関係も必要に応じて触れ、問題点についても述べる。

（1）現在の表層地形との対応関係

まず、明治 17 年作成の地籍図の解析から抽出できた地形と等高線図からみた現在の表層地形との対応関係について述べたい。ここでは、清須市本町を中心に東西約 2.8km、東西約 3.0km の現在の表層地形を分析された鬼頭剛の解析成果（鬼頭 2013）と比較する（図 4）。鬼頭は、主に平成 18 年測量「清須市都市計画図」を用いて、0.20m 間隔の等高線図を作成し、清須市本町付近を流れる五条川流域には 5 つの相対的に標高の高い場所と 7 つの谷地形を抽出した。相対的に標高の高い場所については、地籍図に見られる微高地群と概ねその位置や平面形が対応している。一方、谷地形については、概ね地籍図に見られる低地部の形状は対応するが、微高地群の部分にも重なる地点も見られた。以下において、現在の表層地形と地籍図に見られた地形と対応しない場合について検討したい。なお、鬼頭による現在の表層地形を表した等高線図においても、近世から現在に至る大規模な公共施設や工場等の建物や道路の影響を外したものである。しかし、主に戦国時代から現在にかけての人為的開発による地形改変などのために、清洲町中心部周辺においては、現在の表層地形において過去の自然地形を読み込むことが困難になっている。

以上の限定条件があるが、現在の表層地形に見られる地形と地籍図に見られる地形が対応しない場合について 3 例述べる。

一つ目は、清須市田中町から寺野、助七に至る標高 1.6m ～ 2.8m の谷地形は低地部 17 に概ね対応するが、清須市田中町と清須市弁天の間にある北西から南東にのびる谷地形や清須市田中町の南西側にある谷地形は微高地群 1b にあたり、低地部とならないことである。この 2 つの地点は地籍図中の微高地群 1b の中に分布する水田の凹地部分に対応する可能性が高いが、この部分は城下町後期の清洲城跡の中堀の痕跡と考えられるものであり、地籍図の解析からは微高地群 1b がこの谷地形の部分も続くように考えられた。この谷地形に関係する発掘調査成果として、清須市清洲弁天西部にある 90A 区では、中世の井戸が標高 4m 付近から掘り込まれており、少なくとも中世には微高地群 1b が南北に続く可能性が高いことを示唆している。

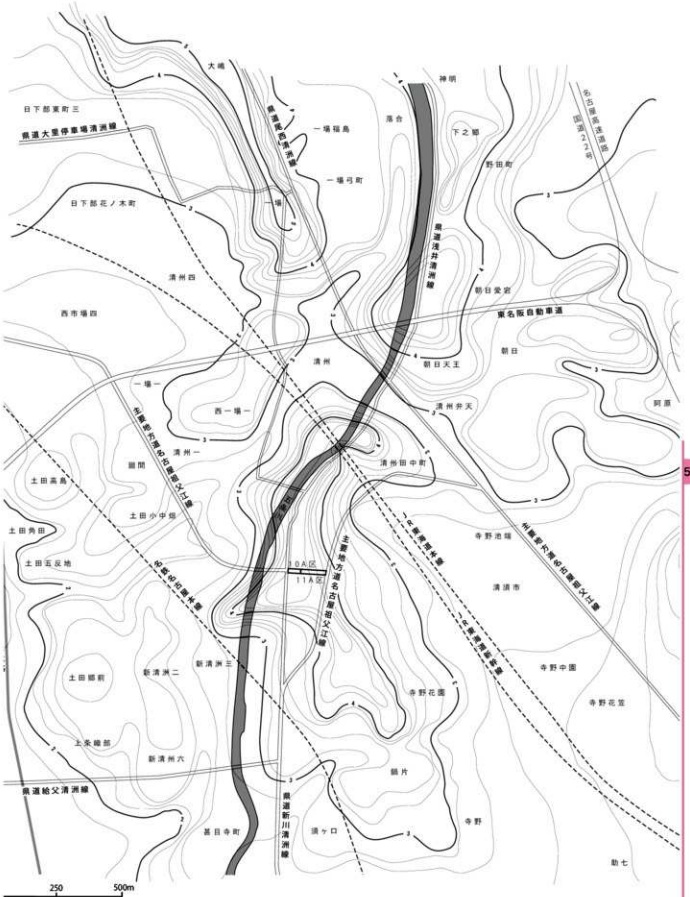


図4　清洲城下町遺跡周辺の等高線図

二つ目は、清須市落合から一場にかけての標高3.0m～3.8mの谷地形と清須市清洲から土田五反地に至る標高1.6m～2.8mの谷地形は五条川西岸を北北東から南西に続くものであるが、微高地群1bと微高地群10の間にある低地部3の南端部に清須市落合の谷地形はあたるが、その南にのびる地点には微高地群10があり、微高地群10の南北に縦断し、低地部20にあたる部分に至る。低地部20の南西には美濃街道のある微高地群11があり、微高地群11を横断して南西の低地部22へと続いている。この谷地形については、これまでの発掘調査成果からの検証ができないため、確認ができない。先に分析した五条橋付近の発掘調査成果から考えると、北西側から清須市12区に確認された城下町前期以前の自然流路Aタイプの流路跡、清須市13区に確認された城下町前期以前の自然流路Bタイプの流路跡があり、五条橋の北側で97B区にて確認された城下町前期のNR01、五条橋の南側で90D区を中心に確認された15世紀後葉以前にあったⅣNR4001があることから、発掘調査で確認された自然流路は後期清洲城本丸跡の東・西にある内堀部分を含む地点を流下していた可能性が高い。鬼頭が指摘した谷地形はさらに古い時期のものを反映しているのかもしれない。

3つ目は明治17年以前の人為的開発により谷地形が地籍図の地目に見られる宅地や畑地等に利用されたためと考えられる場合で、清須市新清洲二丁目から上条織部に至る標高2.0m～2.6mの谷地形がある。この部分は地籍図の低地部12の南側、微高地群23の南の地点から低地部12の凹地が微高地群12の上条織部に少しのびるように見える部分にあたるが、地籍図にある微高地群12の中には明瞭な凹地状地形は認められない。

次に鬼頭による谷地形の指摘はないが、現在の表層地形において五条川の西岸に清須市新清洲三丁目から南のあま市甚目寺町西今宿にのびる標高2.0m～2.4mの等高線であらわれる谷地形がある。地籍図にみられる低地部23に概ね対応し、南西側で微高地群12が西に狭くなる部分にあたる。先に地籍図の分析で述べた『古城絵図』に対応する旧五条川の流路痕跡と考えられるものである。

その他に鬼頭により指摘された谷地形は低地部と対応しており、古い時代の旧流路の痕跡である可能性があるものである。

（2）地図上にあらわれない旧河道

最後に現在の表層地形と地籍図にもあらわれない旧河道がある。先に述べた発掘調査による10B区から11A区にかけて確認された自然流路Aタイプの流路痕である。これは下部に中粒砂が堆積するもので、その地点が埋没して微高地化した後に城下町期前期以後の遺構が展開した。この流路痕は地籍図に見られる微高地群20bの中央付近を南北に縦断する可能性がある。また00B区の南側に確認された14世紀頃の自然流路Cタイプの流路痕も現在の表層地形と地籍図の中にある低地部にもあらわれないものであり、この旧河道を埋積して砂粒の方向が現五条川の流路に向かっており、現五条川の流路が中世にさかのぼって存在したことを示すのであろうか。これら、地図上で推定できない旧河道の究明は今後の調査と研究の進展を待ちたい。

（3）清須を流れていた旧河道

以上の分析から、清須に流れていた旧河川の推定を行う（図5）。

弥生時代～古墳時代の旧河川として五条川流域では地籍図から解析した地形1に伴う低地部2・1、地形3に伴う低地部4・5、地形4に伴う低地部4があり、朝日遺跡谷Aである地形12に伴う低地部13、その下流となる低地部16などがあげられる。

古墳時代～古代の旧河川は、五条川流域では地籍図から解析した地形1に伴う低地部2・1が稲沢市丹陽町五日市場の東側を南に流下する旧河道跡と対応する可能性がある。また地形5に伴う低地部6も古代にさかのぼる流路痕である可能性がある。他には朝日遺跡谷Bに対応する地形12や地形13に伴う低地部2・1a・17があげられる。

古代～戦国時代の旧河川は、五条川流域では先に述べた地形5に伴う低地部6、地形16に伴う低地部20・22がある。この流路痕は清洲城跡の北にて南東に枝分かれして、現五条川と合流する流路になる可能性がある。また小規模

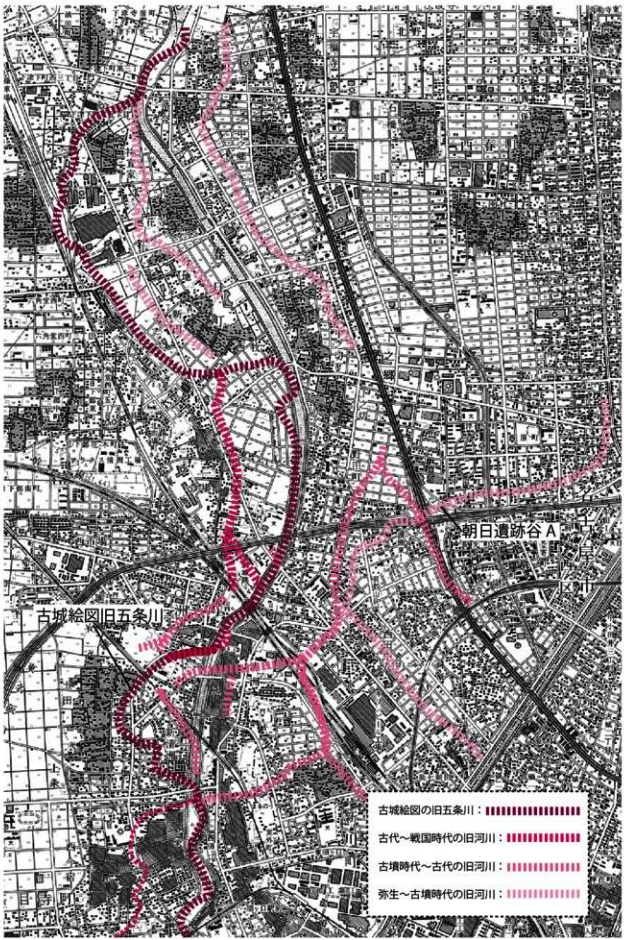


図５　清須の旧河川想定図（約 1:50,000）

な旧河川の痕跡として地籍図上に水田が続いて帯状に見える地点が、あま市甚目寺町西今宿の北東側端部の五条川流域から南西方向にみられる。この流路痕は萱津宿の加藤氏の分析により指摘された旧流路Bにあたり、『富田荘絵図』に見られる旧庄内川の南西方向に流れる流路より新しいものと考えられる流路につながる可能性が高い。

織豊期～江戸時代の旧河川は『古城絵図』に描かれた「清須川」に相当する地形5・18に伴う低地部6、地形17に伴う低地部23・25があげられる。

以上の分析を現代の地図上に表したものが図5である。現五条川流域地域の旧河道の変遷を考えると、古代以前には比較的異なる流れをもつ旧河川が確認されているが、中世以後は江戸時代の『古城絵図』に比較的近い流路に固定されていく状況がみられる。

謝辞

本論を作成するにあたり、清須市教育委員会の柴垣哲彦氏、国際文化財株式会社、小澤一弘氏、鬼頭剛氏には多くのご教示を頂いた。またナカシャクリエイテブ株式会社には地籍図の作成にあたり、ご助力を頂いた。記して感謝の意としたい。

参考文献

中・近世研究部会 2004「尾張国富田荘の考古学的研究―成願寺を中心として―」『研究紀要』第5号、(財) 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

加藤博紀 2006「地籍図・史料から見た中世の甚目寺町」『愛知県埋蔵文化財センター設立20周年記念論集 研究紀要』第7号、(財)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

臨山誠一・加藤博紀・鬼頭剛・鈴木正貴・松田訓 2007「中世萱津を考える」『研究紀要』第8号、(財) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

鬼頭　剛 2013「清洲城下町遺跡周辺の地形解析と五条川の流路について」『清洲城下町遺跡 XI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第183集、(公財) 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

金森康明・天野陽保 1908「愛知県神門遺跡の人面文土器について」『考古学フォーラム』10、考古学フォーラム

鈴木正貴編 1990『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集

小澤一弘編 1992『清洲城下町遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集

鈴木正貴他編 1994a『清洲城下町遺跡III・外町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第50集

鈴木正貴編 1994b『清洲城下町遺跡V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集

鈴木正貴編 1997『清洲城下町遺跡VI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第70集

臨山誠一 2001「清洲城下町遺跡」『平成12年度愛知県埋蔵文化財センター年報』

宮腰健司・鈴木正貴編 2002『清洲城下町遺跡VIII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集

早野浩二編 2005『清洲城下町遺跡IX』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第131集

鈴木正貴編 2013『清洲城下町遺跡XI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第183集

野口哲也編 1990『清洲城下町遺跡II―(仮称) 清洲ふるさとのやかた建設に伴う事前調査の概要―』清洲町埋蔵文化財調査報告II

柴垣哲彦編 2002『清洲城下町遺跡III―(仮称) 総合福祉センター建設に伴う発掘調査報告―』清洲町埋蔵文化財調査報告III

石松直他 2007『清洲城下町遺跡 I ―清洲小学校プール建設に係る発掘調査報告―』清須市埋蔵文化財調査報告I

駒山秀穂他 2009『清洲城下町遺跡II―清洲小学校体育館建設に係る発掘調査報告―』清須市埋蔵文化財調査報告II

筧和也他 2012『清洲城下町遺跡III―清須市一場地内道路建設に伴う発掘調査報告―』清須市埋蔵文化財調査報告III

鬼頭剛 2012「清洲城下町遺跡の地下層序と表層地形解析」『清洲城下町遺跡III―清須市一場地内道路建設に伴う発掘調査報告―』清須市埋蔵文化財調査報告III

石黒立人編 1991『朝日遺跡 I 』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集

臨山誠一編 2007『朝日遺跡VII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集

愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第14号
2013.5
63-77p

下山の炭焼窯跡

伊奈和彦*・武部真木・
藤山誠一

平成24年度に愛知県豊田市下山地区において発掘調査を実施した猪移り遺跡・コヤバ遺跡にて確認できた近世後期末から昭和期に営まれた炭焼窯跡について分析した。その結果、江戸時代から続く炭焼窯跡の形態である煙道部をもち石敷きの燃焼室の平面形が楕円形となる形態から煙道部をもち石敷きのない燃焼室の平面形が円形の形態へと変遷することを明らかにできた。また、煙道部が確認されない炭焼窯跡も先の2つの形態の炭焼窯跡と併行して存在した可能性が高いことを指摘した。

1. はじめに

（1）研究の目的と方法

木炭は人類の歴史の中で、生活や鉄や銅をはじめとする金属器生産などに不可欠なものであった。このことから木炭を利用する道具や設備が時代を経るにつれて数多く発明され、再生産されてきたのは周知のことである。

平成24年度に愛知県豊田市下山田代町・田折町地内において、愛知県埋蔵文化財調査センターと当センターにより11遺跡の発掘調査が行われた。その調査の際に、現地表面から確認できる凹みが多数確認され、平面や断面観察から近代を中心とする時期の炭焼窯跡であることが推定された。今回、これらの発掘調査成果をふまえ、愛知県における炭焼きの歴史を考えるために、確認できた炭焼窯跡の分析と現地に残る炭焼きの民俗的調査を行い、若干の検討を加えることが本論の目的である。

（2）木炭と炭焼きの研究史

日本における木炭の歴史については、樋口清之氏による古代から近代に及ぶ研究がまず挙げられる。ここでは、文献資料からの分析が主体であるが、古代の古事記・日本書紀から中世にかけての勅撰和歌集、そして中世・近世・近代の各地の文献資料を網羅しての研究で、木炭からみた経済史だけではなく、その内容は文化史ともいえるものであろう。この中では愛知県の「足助炭」の記述がみられる。

愛知県においても、これまであまり炭焼窯跡の発掘調査例はなく、三河地域の自治体史である『足助町誌』・『豊田市史』・『下山村史』・『新編岡崎市史額田資料編Ⅲ』において炭焼きについて林業や民俗との関係から述べられることが多かった。実際に炭焼きについて述べられる場合も、資料の比較的残っている近代以後の状況については記述が多くあるが、文献資料が少ない近世以前の炭焼きの歴史はよくわかっていない。『足助町誌』によると、近代における足助炭の生産の展開は、養蚕との関係から白炭の生産が盛んに行われたことが指摘されている。

他地域における考古学・民俗学の研究では、古代から中世にかけての東北地方（岩手県や福島県など）や関東地方（埼玉県など）の製鉄や鍛冶遺構に伴って営まれた炭焼窯跡、近世以後の関東地方（埼玉県や東京都、神奈川県付近）の炭焼窯跡の発掘調査成果が多数あり、近世以後の文献資料との関係や炭焼窯跡の分布、民俗的記録・実験、木炭の生産・流通などの研究が行われている。管見に及ぶ限りでは、埼玉県における炭焼き・炭焼窯の研究と多摩丘陵に分布する炭焼窯の研究が早くから詳細に行われており、ここで参考にしたいと思う。

埼玉県における研究では、岸清俊氏による木炭生産と炭焼窯の変遷の研究があり、埼玉県内の近世以前から昭和にかけての炭焼窯跡の分布と生産についての分析や炭焼窯跡の形態変遷について詳述されている。特に近代以後の炭焼窯の改良については細かい分析があり、本分析と

* 愛知県埋蔵文化財調査センター

の関わりでは昭和に入ってからの「埼玉黒炭窯」にみられる窯床面が焚口から煙道部に向かって傾斜して下がる「奥下り」の改良は興味深い点である。また民俗学的調査として、埼玉県比企地域のおける朱通祥男氏の研究があり、栗原弥之助氏による炭焼窯の構築と炭焼き作業の調査成果は、現在では炭焼きを考える上で貴重な記録である。

多摩丘陵における研究では、多摩ニュータウンの発掘調査により確認された炭焼窯跡の調査報告による詳細な分析が山口慶一氏・福田敏一氏・長佐古真也氏などにより行われており、各氏により記述・評価の違いが多少あるが、これまでに江戸時代には遺構の切り合いから石窯が土窯より古くからあり、石窯は白炭の生産に関連する窯である可能性が高いこと、江戸時代の土窯の導入が18世紀の中頃以降であり、近世後半期以後に多数営まれて、窯構造の主流になっていくこと、炭焼窯跡に伴うと考えられる作業場跡や建物跡、粘土採掘場跡などが存在すること、多摩丘陵で生産された木炭（薪も含む）が八王子宿を経由して江戸時代中期頃には商業的生産が行われていた可能性が高いことなどが指摘されている。この中で福田敏一氏は煙道を3ヶ所もつ土窯が昭和10年前後に導入された「大竹式黒炭窯」との関連を指摘しており、当時全国規模で行われた木炭増産の講習会などの運動と関係付けていて興味深い。また村田文夫氏は多摩丘陵における炭焼窯跡の発掘調査成果と文献資料の『新編武蔵風土記稿』都筑郡総説にある「黒川炭」における記述を参考に、江戸時代以後の炭焼窯について分析を行った。武井勝氏による神奈川県宮ヶ瀬における炭焼きの研究も文献資料と発掘調査成果を用いた地域研究の一例である。（藍山誠一）

2. 下山地区の炭焼窯跡

（1）炭焼窯の構造分類

検出された遺構は様々なタイプがみられたが、ひとまずここでは基本的な構造と平面形態をもとに図1のように分類し、比較検討をすすめたいと思う。

まず遺構の基本的な構造に注目して、当初から固定された煙道部を有するものを＜I類＞、煙道部が遺構として捉えられないものを＜II類＞に大別する。I類は本来は側壁と組み合わせた天井部をもち、複数回繰返して使用されるものである。次に壁面または床面について、粘土以外の素材（石材その他）を用いないものをA類、石材を用いるものをB類とした。そして平面プランを検討し、ほぼ正円形に近いものを1類、楕円形となるものを2類、それ以外の形状をひとまず3類として細分した。A類とB類の判断基準とした石材（その他）の使用部位からは焚口部分と煙道部分を除外した。焚口は窯の部材に拘らず、出入口や火勢の調整弁が設けられるため補強されることが多いと考えられるためである。また平面形により細分した1類と2類は、短軸／長軸の比で3/4を区分の基準とする。すなわち1類（円形）＞3/4（0.75）＞2類（楕円形）とした。

以上の分類に従い、平成24年度の調査成果のうち猪移り遺跡（15基）、コヤバ遺跡（5基）の遺構について整理したものが表1である。ただし、調査における作業手順がそれぞれに異なったことから計測箇所は統一した基準とはなっていない。図2に模式図で示した通りであり、検出面については表中に注記した。なお、これらは未報告資料を含んでおり、最終的には正式の報告書を参照されたい。

（2）猪移り遺跡の炭焼窯跡

猪移り遺跡では4,400㎡を調査し、A,B,Cの調査区内で15基を確認した（図3）。内訳はII類が11基、I-A類が3基、あと1基（B区020SK）は煙道部は不明であるが平面形からI類と想定されるものであり、壁面に被熱の痕跡はみられず構築途中で廃棄したものかもしれない。

I-A1類のB区001SYと002SYはそれぞれ長軸が4.4m、3.6m（煙道部端まで含めると5.2m）となる規模の大きなものであり、表土掘削以前に遺構の存在が確認できたタイプである。平面形は正円に近く、側壁がほぼ垂直に立ち上がる筒状の凹みとなっており、底面は平坦である。斜面下側となる側壁の一部が途切れて焚口（出入口）となっており、これと中心を通る延長線上に煙道部が設置されている。遺存状

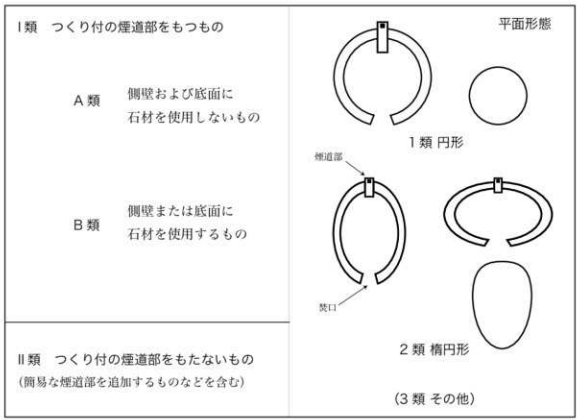
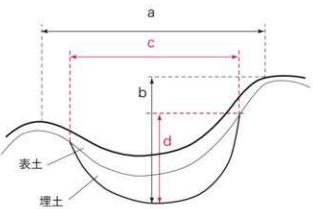


図 1　炭焼窯分類



表土で検出した場合（a, b）
表土除去後に検出した場合（c, d）

図 2　Ⅱ類の計測位置

況に恵まれた 001SY（図 4）の煙道部は上端に較べ下端の幅がやや広くなっている方形の筒状を呈し、背面にあたる基盤層を少し削り込むように整形して設置されている。筒内側も含めて表面全体にタールのようなものが固着して材質は判別できなかった。側壁と底面の表面は黒く焼け硬化した部分が厚く、容易に剥離する。焚口の幅は約 50cm であり、両脇は粘土で固めた石積みがある。底面については焚口から煙道部方向に若干傾斜すること、煙道部に接続する部分にはさらに浅い凹みが設けられていることなどを確認した。そのほか床面の下にも基盤層を一旦掘り込み、砂質土や木質のものを用いて整地を行った施設を確認した。また 001SY の周囲では大きく斜面が削られ、0.7 ～ 1.5m 程度の幅をもった平坦面がめぐる。その規模は主軸方向からみて左手へは 5.2m ほどのび、右手へは約 2.8m である。焚口より手前は大きく削平を受けていたが、周囲では広く灰原の痕跡が認められた。また周辺には土管、瓦、板状の大型の石材などを検出している。008SY は今回 I-A1 類に含めたが、平面形は主軸と直交する向きが長軸の小判形となるタイプである。床面積は 001SY と較べてかなり規模は小さいが、煙道部の材質や側壁が垂直に立ち上がる筒状の形態など類似する点は多い。

Ⅱ類は現況でもぼんやりとした凹みとして

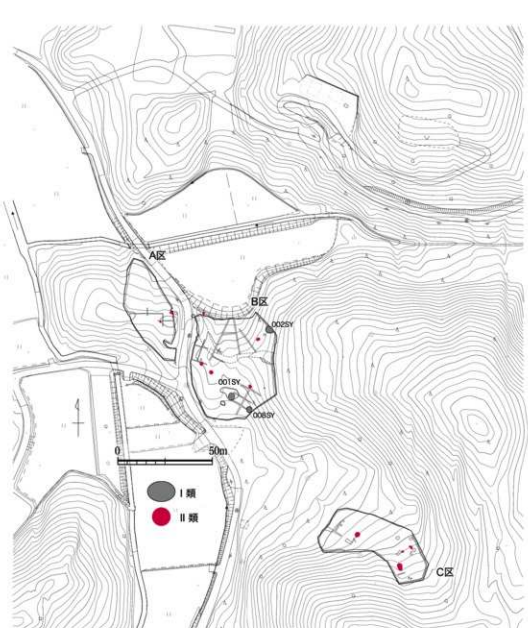


図3　猪移り遺跡の炭焼窯跡の分布（1:2,000）

視認できたものが多い。規模は長軸が1.2～3.8mとやや幅があるが、深さは1.0mを超える規模のものはない。埋土に少量の炭化物と焼土を含み、底面は曲面となるものが多く、平坦部は小さい。いくつかの遺構では底面の周縁部で部分的に赤変が認められる。

（3）コヤバ遺跡の炭焼窯跡と周辺遺構

コヤバ遺跡では南西に開口する谷部で500㎡の調査が行われた（図5）。ここでは炭焼窯5基とその周辺で土坑、ピット、石列など関連

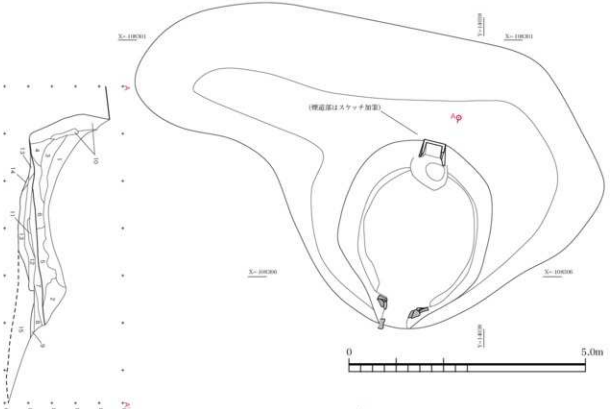


図4　猪移り遺跡B区 001SY (1:80)

すると思われる遺構群が検出されている（図6）。炭焼窯跡はI-A1類とI-B2類が各1基とII類が3基という構成であり、谷の緩斜面のやや上位にII類が近接して分布し、谷に面する南東向き斜面にI類が造られている。

I-A1類の001SYは直径約2.5mの規模をもち、焚口より手前は緩斜面となっており、灰原の広がりが認められる。焚口の手前右側には埋土中に礫（や炭化物）を多く含む土坑（009SK）が存在する。灰原下より近世末の陶磁器が出土している。

I-B2類の002SY（図7）は長軸約2.4m、後方より1/3程度の位置で最大幅が約1.3mとなる楕円形土坑であり、底面に用いられた石材が検出されている。主な石材は付近で採れる花崗岩で、礫の大きさは一辺が20～35cm程度のものがあり、平な面を上にして敷き詰められている。また煙道部は基盤層の岩盤を利用している。焚口の手前から灰原が広がり、焚口右側には土坑（008SX）が存在する。焚口から手前1.0mのところには主軸方向に直交する向きの石列があり、設置は灰原に先行することがわかっている。石列より谷側には土坑007SKが存在する。堆積状況の検討から002SYの操業が001SYに先行するとされ、灰原下より近世陶磁器が出土している。

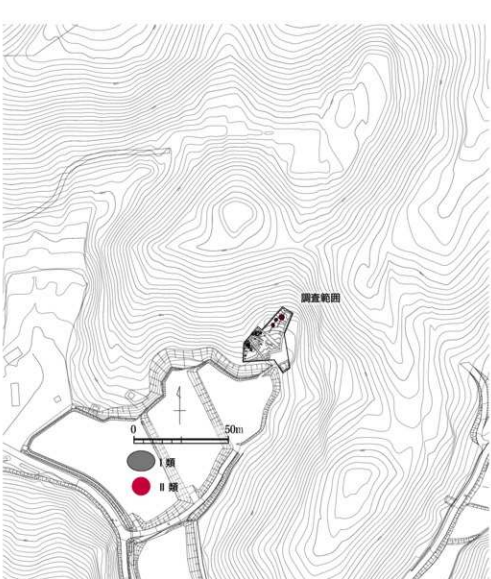


図5　コヤバ遺跡の炭焼窯の分布（1,2000）

II類は3基がある。規模は長軸が1.5～2.7mのものがあり、平面形は005SKと004SKが正円に近く、003SKは傾斜の方向に長軸をとる楕円形である。004SK（図8）はレンズ状の凹みの底より少し上の位置に帯状に赤化した範囲が認められる。特徴的な被熱の痕跡は3基にすべてにみられ、ほぼ全周に近い環状にめぐることが確認されている。堆積状況の検討からこれらの新旧関係は、003SK→005SK→004SKであると考えられる。

（4）遺構の立地と分布傾向

まずII類の分布状況をみておきたい。猪移り遺跡のA区、B区が設定された場所は一続きの尾根であり、調査区内で標高は430m前後である。ここでのII類はすべて尾根の鞍部のような場所の頂部を少し降りた緩斜面に造ら

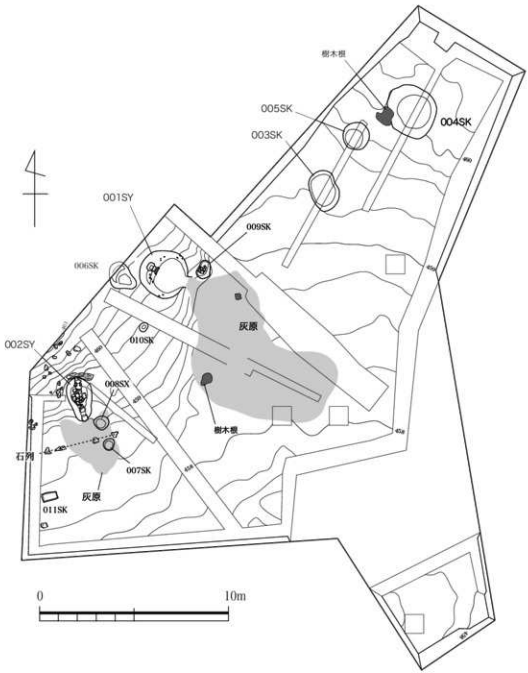


図6　コヤバ遺跡主要遺構配置図（1:200）

れている。北向き斜面に２基、北西向きに１基、南西向き斜面に４基がある。C区では西に開口する幅の広い谷部の緩斜面を利用しており、標高 450m 前後の北西～北向き斜面に４基が確認されたが、他にも周辺の調査区外に数基の凹みが視認できる。これらは重複関係にはなく、少なくとも 5.0m 以上離れて分布している。次にコヤバ遺跡についてみると、３基は 8.0m ほどの範囲に収まり、ここでの分布密度は猪移り遺跡に較べ非常に高いといえる。今回取り扱った２遺跡の資料ではⅡ類同士の重複関係はみられなかったが、猪移り遺跡の西側に近接するトヨガ下遺跡の試掘調査において１カ所が確認されている。

Ⅰ類は煙道部や側壁の高さを確保できるような安定した基盤層を掘削して構築されている。

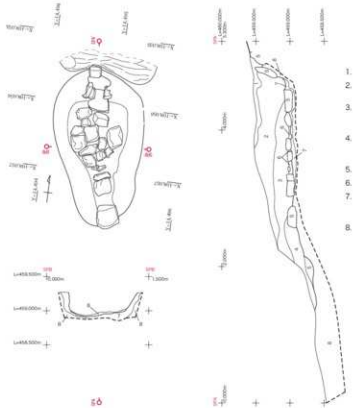


図7　コヤバ遺跡 002SY（1:50）

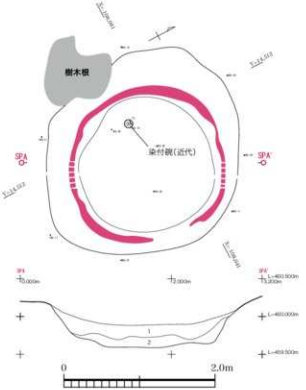


図8　コヤバ遺跡 004SK（1:50）

しかも傾斜地の裾部に近く、前面にやや平坦な面が広がる傾斜変換点付近を選んで構築されている。猪移り遺跡では南向き斜面に多く、コヤバ遺跡は南東向き斜面に造られている。やや例外的な立地とみられるものが猪移り遺跡B区002SYであり、現況では斜面中腹に位置し窯の前方に広い平坦面はみられない

（5）炭焼窯遺構の新旧関係

近接して検出されたコヤバ遺跡では、堆積状況から002SY → 001SYという関係が確認されており、ここではI-B2類がI-A1類に先行して存在したことがわかる。Ⅰ類とⅡ類については近接あるいは重複するものが少なく、前後関係を見いだすことは困難である。またⅡ類は単純な構造でもあり、今のところ遺構の規模・形状に特徴的な差異を見いだすことはできない。

（武部真木）

表1　猪移り遺跡・コヤバ遺跡の炭焼窯跡

遺跡名	調査区	遺構番号	分類	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	検出面 (計測位置)	灰原の有無	出土遺物	備考（付属施設、立地など）
猪移り遺跡	12A	001SY	II 類	0.96	0.72	0.06	基盤	-		基盤層で検出,緩斜面,尾根付近,炭化物含む埋土
猪移り遺跡	12A	007SY	II 類	-	-		表土	-		調査区東壁にかかる,尾根稜部付近,底面付近周縁の一部が赤化
猪移り遺跡	12B	001SY	I-A1類	3.78	3.11	1.72	表土掘削後	○	周辺から板状石材,レンガ,土管	急傾斜地斜面の裾部,出入口端は石積み,窯の背後に帯状の平坦部
猪移り遺跡	12B	002SY	I-A1類	5.20	3.38	2.74	表土	○	周辺から陶器土瓶,レンガ,床下と煙道部から土管	急傾斜地斜面の中腹,煙道部が後方に延びる
猪移り遺跡	12B	003SY	II 類	2.02	1.56	0.80	表土	-		緩斜面
猪移り遺跡	12B	004SY	II 類	1.28	1.17	0.56	表土	-		緩斜面
猪移り遺跡	12B	005SY	II 類	2.04	1.82	0.48	表土	-		緩斜面
猪移り遺跡	12B	006SY	II 類	2.09	1.90	0.36	表土	-		緩斜面
猪移り遺跡	12B	007SY	II 類	1.76	1.37	0.36	表土	-		緩斜面
猪移り遺跡	12B	008SY	*I-A1類	3.02	2.94	1.28	基盤	○		急傾斜地斜面の裾部 *主軸方向が短軸となる小判形
猪移り遺跡	12B	020SK	I-A2類？	2.84	2.12	0.60	基盤	-		緩斜面
猪移り遺跡	12C	001SY	II 類	3.76	2.24	0.88	表土	-		緩斜面
猪移り遺跡	12C	002SY	II 類	3.72	2.44	0.60	表土	○		緩斜面
猪移り遺跡	12C	003SY	II 類	2.76	2.44	0.56	表土	○		緩斜面
猪移り遺跡	12C	009SY	II 類	1.24	1.20	0.24	表土掘削後	-		緩斜面
コヤバ遺跡	12	001SY	I-A1類	2.54	2.51	0.94	基盤	○	灰原は樹齢70年程の檜の切株の下。灰原下の層から近世末の陶磁器が出土。	煙道は石組み。焚口の向かって右側に長軸0.97m,短軸0.67m,深さ0.14mの土坑あり,尾根斜面
コヤバ遺跡	12	002SY	I-B2類	2.36	1.32	0.34	基盤	○	001SYよりも古い,灰原下の層から近世陶磁器が出土	尾根稜の緩斜面,窯の前に平場あり,焚口の向かって右側に直径0.74m・深さ0.18mの土坑あり,焚口前に礎石と思われる石列（5コ）煙道は石積み,窯底面は石敷き
コヤバ遺跡	12	003SK	II 類	2.13	1.46	0.41	基盤	-		緩斜面,ほぼ平らな面,煙道無し,壁面全面に被熱痕
コヤバ遺跡	12	004SK	II 類	2.68	2.55	0.31	基盤	-	埋土下層から完形の明治期染付け碗が出土	緩斜面,ほぼ平らな面,煙道無し,壁面全面に被熱痕
コヤバ遺跡	12	005SK	II 類	1.48	1.42	0.29	基盤	-		緩斜面,ほぼ平らな面,煙道無し,壁面全面に被熱痕

3. 炭焼きの民俗学的分析

豊田市下山地区における平成23年度の範囲確認調査と平成24年度の本調査に携わった旧東加茂郡下山村在住の藤澤鉦文氏、清水三代治氏と旧額田郡下山村在住の「ぬかた炭焼きの会」会長高木田洋氏に協力をいただいて実施した聞き取り調査の結果をまとめた。

（1）築窯場所の選定

炭を焼くためには、まず炭山（原木を入手する山）を手に入れなければならない。山を持っていない者は山林所有者（下山では「大家さん」と呼んだ）から、原木を伐る権利だけを期限付きで買う。築窯場所は、良質な原木を得られる所が良いわけであるが、それだけでなく、湿気が少ないこと、水場が近くにあること、窯づくりに適した土（粘土）があること、作業場となる平場があること、原木と製品の搬出に便利であることなどが条件となった。しかし、それらの条件を全て満たすことは容易ではないので、築窯のための良い土が無ければ他の場所から運び、平場を造成することもあったようである。

（2）原木

炭に適した木は広葉樹で、下山では、一番良い木はカシ、二番目はクヌギ、三番目はナラだとされており、「ドンゴロ」（アベマキ、ナラなどの落葉性のどんぐりのなる木）や「かな木」（落葉樹）が適している。広葉樹であってもクリの木は爆ぜるので適さないとのことである。下山では、高級炭と言われる「備長炭」の原木のウバメガシは少ない。炭材には樹齢20～25年の木が丁度良いそうで、理由は薪割りの手間を省くためとのことであった。

（3）築窯

築窯する場所によって差異があるが、山の斜面を利用すればかなり手間が省ける。山の斜面を直角に削って地面を掘り込み、削った土で前方に床張りをして窯とそれに付随する作業場をつくる。炭焼きの番をするため、寝泊まり用の小屋も窯の近くに建てた。

焚口と煙道下部の排煙口は石を組んでつくる。煙道（うど）は粘土を使って石を積み上げていく。焼く炭の種類によって窯の大きさや、排煙口の大きさ・形状が異なる。窯ができると、炭にする原木（炭材）を窯奥から立てて並べていき、並べ終わったらその原木（炭材）の上に短く切った直径4～5㎝程の枝を寝かせて乗せていく。更にその上にムシロをかぶせ、ムシロの上に粘土（赤土）を積み上げる。天井頂部は厚さ10㎝程、裾は20㎝程、頂部は薄く裾に向かって厚くなるように「土タタキ」*といわれる平たい板で叩いて固めた。

下山では窯をつくることを「カマをうつ」といい、窯ができると酒と塩で清め、山の神への捧げものをして、その後は家族や手伝いの人たちでお祭り騒ぎとなったそうである。（昭和30年代頃）

窯の焚口に向かって右側に深さ30㎝程の穴を掘り（右手で作業をするのに都合が良いため）、焚口を塞ぐための粘土をこねた。窯は何度も使うため、焚口を塞ぐのに使った土を取っておいて、再び窯を稼働させる際には水でこねて使った。

窯の上には萱で葺いた屋根を張った。焚口の前の炭出し作業を行う部分にも庇（出し屋根）が付けられた。昭和40年代頃からはトタン屋根となったそうである。

（4）炭焼きの方法（白炭と黒炭）

炭は白炭と黒炭に大別できる。その違いは消火方法にある。白炭は窯から火のついた状態の炭を掻き出し、消粉（灰と砂を混ぜたもの）をかけて消火する（窯外消火）。炭を掻き出したらすぐに消火しなければならないので、炭の量が多いと間に合わない。よって、必然的に窯は小型のものになる。白炭の特徴は、硬質で叩くと金属音がし、火つきは悪いが火持ちが良い。これに対して黒炭は、炭化の最終段階で焚口と煙道（うど）を閉じ、窯全体を密封して消火する（窯内消火）。自然に消火するのを待って炭を取り出せば良いので、大型の窯が多い。黒炭の特徴は、樹皮が残っており、もろいので火つきは良いが火持ちが悪い。

下山では黒炭だけでなく白炭も土窯で焼いていたようである。もっとも、同じ土窯であっても、白炭用と黒炭用とでは窯の大きさと排煙口

* 築瀬一悟 2003「炭焼き」『下山村史』通史編Ⅱ 第2編 近代・現代 第7章 民俗、下山村に紹介されている。

の形状が異なるとのことである。白炭窯の床面は炭を掻き出しやすいように登り窯様に焚口に向かって下げる。また、高温とする必要から通気を良くするために排煙口を大きくする。逆に黒炭窯では床面は排煙口に向かって下げ、排煙口は小さくする（通気が良くなって窯内が高温とならないようにするため）。排煙口の具体的な大きさや形状は、白炭窯のものが一辺30㎝弱の正方形に近く、黒炭窯のものは高さが5～10㎝、横幅は30㎝程である。因みに聞き取り調査では、石積みの窯（石窯）や床面に石を敷いた窯については見たことがないとのことであった。

（5）土坑状の炭焼窯

大正時代初め頃の生まれという下山在住の90歳代の方が、子供の頃（昭和初期か）に祖父が地面に掘った穴で炭を焼いているのを見ている。炭が焼きあがると砂をかけたそうである。このような簡易な製炭方法も昭和初期までは行われていたようである。この穴を「灰炭穴（かいずみあな）」と呼んでいたとも聞いた。

（6）炭焼きの時期

夏は木の水分が多いので焼かない。12月末頃から4月初め頃に焼くのが普通であるが、7月初旬ぐらいまでは焼くことがあるそうである。

（伊奈和彦）

4. 下山の炭焼きの歴史と性格

先に下山地区の発掘調査により確認された炭焼窯跡の考古学的分析と下山地区の民俗学的分析を行った。これらの分析成果について、下山地区と周辺地域の炭焼きの歴史との関係、発掘調査により確認された炭焼窯跡の関連遺構の分析、下山地区の炭焼窯跡の時期と特徴、そして今後の課題について検討したい。

（1）下山と周辺地域における炭焼きの歴史

下山地区において、炭焼きがいつ頃から行われていたのかは判然としない。『下山村史』*によると、明治時代には大沼に炭問屋があったとしている。また、『三州足助炭焼き物語』**は、昭和11年に作成された『東加茂郡木炭同業組合沿革並成績』に東加茂郡の製炭起源は天明（1781～1789年）頃とする記述があることを紹介している。

下山では炭焼きは農家の副業として全村域で行われていた。現金収入を得るために、ほとんどの農家が冬の農閑期に行っていたようである。聞き取り調査によると、炭を焼いていたのは農家だけでなく、村外から炭焼きの専業者が入っていたと聞いた。彼らは山の所有者から一定の範囲の木を伐る権利を買って山の中に暮らし、炭を焼いた。買った範囲の木を焼いてしまうとまた別な場所へ移動する。その際には、炭焼窯の焚口天井部に使用する平らな石（縦横60×45㎝、厚さ20㎝程の石）を携行したとのことである。焚口の天井に使うのに丁度良い形の石がなかなか入手できなかったためらしい。こうした村外の専業者のことについては、和歌山県在住の元「炭焼き」宇江敏勝氏の著書『山びとの記　木の国果無山脈』に詳しい***。因みに同じ西三河山間部でも、足助町中立では他所から炭焼きに来る人はいなかったようであり**、下山地区とは状況が異なるようである。

炭焼窯の改良に関しては、戦前から戦後にかけて度々実施されていた製炭の共進会や品評会の影響が大きい。良い炭を焼くために炭焼きの先進地で教えを受けることが全国的に行われていたようで、戦後、下山でも岩手県に赴き、技術を持ち帰って村人に伝えた人がいたそうで、その時に広まった窯を「岩手式」と呼び、昭和30年代頃から盛んにつくられたとのことである。足助町では昭和30年代に千葉県や島根県に出かけて教えを受けたとの記録がある**ので、下山と足助の地域差が認められる。ただし、前出の『三州足助炭焼き物語』では、明治時代以降、東加茂郡における炭焼きの先進地は足助であったことを紹介****しており、聞き取り調査

* 『下山村史』資料編別巻（『東加茂郡下山村誌』（昭和16年刊）の再録）

** 炭焼物語編集委員会編『三州足助炭焼き物語』(1989年)

*** 宇江氏によると、新たに築窯する手間を省くためにその土地に残る炭焼窯を修繕して再利用することもあったとしている。

**** 明治・大正期の椎茸栽培や製炭事業の指導者であった田中長嶺（1849～1922年）を日本炭焼き中興の祖とし、田中が明治26年に起稿した『産業絵詞』で「三州（三河国）東加茂郡は、各村で炭を焼いている。足助町周辺が特に多いので、足助炭の名前がある。」と記していることを紹介していることもその一例である。

でも、「岩手式」の窯が広がるまでは足助町で築窯方法や製炭方法の指導をうけていたとの話を聞いた。昭和30年代頃までは足助町の製炭技術が周辺村落に影響を及ぼしていたと考えられる。

築窯方法に関して書かれた文献の多く*は、平場に木を組んで枠を作り土や石を積み上げる方法や、排湿構造として、窯の床面下に竹管を埋設する方法を紹介しているが、下山においては平場に窯をつくることは少なかったようで、我々が発掘調査で検出した窯は全て斜面を利用しており（「掘抜窯」）**、竹管を埋設した窯も検出していない。また、白炭窯は窯内温度が高温（1000℃以上）となるために耐久性の面や、掻き出す作業で窯を壊す危惧からも石窯が適しており、黒炭窯は白炭窯と比べて窯内温度が低い（400～700℃）ので、耐久性はそれほど考慮する必要がなく、築窯しやすい土窯が多いとの記述が多い。しかし、第3章（4）で述べたように、下山では土窯で白炭を焼いていた。このことも下山の炭焼きの特徴としてあげることができる。

また、『下山村史』によると炭焼窯の構築にはレンガが使用されたことが記されているが、聞き取り調査によればレンガを使用し始めたのは戦後からのことで、煙道部（うど）には土管を使用したとの話も聞いた。戦後の窯はレンガでつくることが多かったとのことである。平成23年度の堤立遺跡範囲確認調査において、煙道部に土管を使用している炭焼窯1基を検出している。また、平成24年度の猪移り遺跡の調査においても検出した窯の近くからはレンガや土管が出土している。このことは、下山における炭焼窯遺構の時期を考察する上で重要な判断材料となりそうである。

下山での炭の流通については不明な部分が多い。聞き取り調査によると、農家では、炭は2～3俵あれば自家用には足りるので、残りは問屋に売って現金収入としていたそうである。前述のように、『下山村史』によると明治時代には東大沼に4軒程の炭問屋があって、戦前までは年中出荷しており主に岡崎方面へ出荷していたとある。しかし、現在は炭問屋は存在せず、元炭問屋だった店が現在はガスなどを扱う燃料店になっているそうである。炭焼きについて、統計的に見てみると、下山での林産物産額は、昭和8年には合計96,100円（林産物として用材、薪材、樹皮、竹材、椎茸、木炭の産額合計）で、その内木炭の産額は63,000円となっており、林産物産額全体の約65.6%を占めていた。それが昭和14年には約55.7%となり、戦後の昭和31年には約21.1%と大幅に減少している。現代の木炭の産額は未調査であるが、現在も稼働している窯数は下山地区が14基との報告がある***。

では、白炭と黒炭との割合はどうか。東海農政局豊田統計情報出張所編集の『矢作川水源の森と暮らしを守る―炭焼き讃歌―』によれば、昭和元年の製炭種類の割合は白炭57%、黒炭39%、鍛冶炭4%である。（旧豊田市、旧藤岡町、旧小原村、旧足助町、旧下山村、旧旭町、旧稲武町、旧三好町を合わせた矢作川流域地域での割合）昭和初期、この地域での木炭生産量の60%近くは白炭だったわけだが、年を追うごとに白炭は減少し、昭和10年を境に黒炭が白炭を上回った。その後の調査報告は不明であるが、同書では、平成14年時点での矢作川水源地域には94基（旧豊田市18基、旧藤岡町0基、旧小原村5基、旧足助町26基、旧下山村14基、旧旭町14基、旧稲武町17基、旧三好町0基）の炭焼窯が稼働していたとの報告があり、その内白炭窯は旧稲武町の1基のみである。因みに、平成14年の製炭種類の割合は黒炭84%、竹炭16%となっている。（伊奈和彦）

（2）遺跡における炭焼窯跡と関連遺構

今回分析を行った猪移り遺跡とコヤバ遺跡において炭焼窯跡の関連施設が二つ挙げられる。

一つ目は、炭焼窯跡の焚口の向かって右側に位置する場所にある径0.7m～1.0m程、深さ0.15m程の平面円形の丸底の土坑である。こ

* 秋田山林會編纂『木炭と其製造法』（大正13年刊行）など。

** 「山ノ傾斜ヲ利用シ所謂掘抜ト窯ガ多ク使用サレテキテ形モ個人々々ノ思ニマカセテ作ッタガ（後略）」（『東加茂郡下山村誌』（昭和16年刊）

*** 平成14年現在の東海農政局豊田統計情報出張所調査による。

昭和36年93基、昭和47年12基。ただし、平成14年の調査も含め、竹炭窯を含んだ数である。（愛知県農林水産統計年報）

の土坑は先の民俗学的分析から、炭焼窯の焚口を閉じる際に使う粘土（砂土）を入れておく穴と考えられるもので、この土坑を使って粘土をこねることも推定できるものである。コヤバ遺跡001SYと002SYに伴ってみつかっている。

二つ目は、炭焼窯跡の焚口手前に広がる平場の存在である。最も典型なものはコヤバ遺跡の002SYの南側にひろがる平場で、南北5m、東西10m前後のひろがりが確認できる。この平場は一度元の緩斜面を整地したようで、地山を平坦にやや掘り込んだ後、その面に小屋組の柱を支えたと思われる礎石列が確認されている。この礎石列は焚口の南1.0mの位置に長径0.30m程の板石を0.8m～1.8mの間隔で5ヶ所並べたもので、この炭焼窯跡の焚口付近を覆った屋根に伴うものと考えられる。礎石列の上には、厚さ0.10m前後の江戸時代後期末～明治時代の陶磁器を含む堆積層があった。また同じコヤバ遺跡の001SYの南東側にも幅と奥行きが8m前後は確認できる緩斜面があり、コヤバ遺跡の平場には炭焼窯跡の焚口からのびる灰原（炭化物）層が重複してみられる。猪移り遺跡では001SYの南側は遺跡の調査区の間を通る現道路に面した地点が平場と考えられるが、近年の削平を受けており、灰原（炭化物）層が広がる辺りに本来は平場が存在した可能性が高い。002SYでは焚口の手前（北西側）は灰原も含めて、既に丘陵下に流れ落ちて平場は確認できなかったが、002SYの焚口南西側に平場状の小段が尾根道に向かって形成されており、尾根道と炭焼窯跡の間に作業場的空間が広がっていた可能性もある。このような平場はⅠ類の炭焼窯跡には確認できるが、Ⅱ類の炭焼窯跡には明確な平場がみられない。Ⅰ類の炭焼窯跡が緩斜面から傾斜が変わる丘陵斜面を利用して築窯されている占地と関連するものと考えられ、遺構としては確認できていないが、この平場のある空間に作業小屋などの施設が存在した可能性が高い。

（3）下山地区の炭焼窯跡の特徴

以上の分析から、下山地区の発掘調査で確認された炭焼窯跡の特徴を述べる。

炭焼窯跡の種類は、Ⅰ－A1類の煙道付きで平面大型円形の窯、Ⅰ－B2類の煙道付きで平面楕円形の床面石敷きの窯、Ⅱ類の円形丸底の土坑状の窯である*。これらは相互に重複するものはほとんどなく、堆積の重複関係においてⅠ－A1類の方がⅠ－B2類の窯より新しいものである。

続いて炭焼窯跡の時期は、Ⅰ－B2類の窯であるコヤバ遺跡002SYは南に隣接する平場の整地層やその埋土中より江戸時代後期～明治時代の陶磁器の出土がある。Ⅰ－A1類の窯である猪移り遺跡12 B区001SY・002SYの付近からは、レンガや土管が出土しており、それらが煙道や排水用の施設に用いられた可能性が高く、002SYの灰原付近で比較的新しい時期の土瓶が出土した。またコヤバ遺跡のⅠ－A1類の窯である001SYの灰原上には樹齢70年余の樹木が植林されていた。Ⅱ類の窯では、良好な出土遺物に恵まれていないが、コヤバ遺跡の004SKの埋土下層中より明治期の染付碗が1点出土している。また先の聞き取り調査では、現在90歳を超える男性が児童期に、祖父がⅡ類の窯により炭焼きを営んだこと、当時（1920年代）においてⅡ類の窯による炭焼きが古風なタイプであった。以上の分析によると、下山地区の炭焼窯跡は、Ⅰ－B2類からⅡ類、そしてⅠ－A1類の順に営まれたものと考えることができる。この変遷の中で、Ⅰ－B2類とⅡ類、Ⅱ類とⅠ－A1類は同時に存在した時期があった可能性があり、先に述べた大正13年刊行の秋田山林會編纂による「木炭と其製造法」によれば、昭和期の埼玉県にみられる「埼玉黒炭窯」のような奥下りの改良がなされている黒炭窯が類例として既に紹介されていることから、Ⅰ－B2類の窯からⅠ－A1類の窯への変遷時期は大正期から昭和初期に他県においてもみられる現象と連動するものととらえることが可能である。

（蔭山誠一）

（4）下山のⅡ類の炭焼窯跡

本稿で取り上げた猪移り遺跡とコヤバ遺跡における炭焼窯遺構の数は合計20基で、その内Ⅱ類が14基を数える。Ⅱ類の多さが際立っているが、平成23年度の範囲確認調査において

* 鶴ヶ池遺跡A区においてIA—2類の炭焼窯跡が3基確認されている。IA—1類とIB—2類との関係は今後の発掘調査成果をまって検討される予定である。

写真1　オンボ遺跡 TT26 全景（南西より）

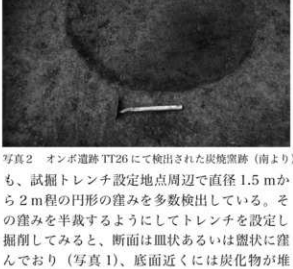


写真2　オンボ遺跡 TT26 にて検出された炭焼窯跡（南より）

も、試掘トレンチ設定地点周辺で直径 1.5 mから2 m程の円形の窪みを多数検出している。その窪みを半裁するようにしてトレンチを設定し掘削してみると、断面は皿状あるいは盥状に窪んでおり（写真 1）、底面近くには炭化物が堆積し被熱痕が見られるものもあった。多くは腐葉土下の表土からの掘り込みであったが、中には地表面下 30 ～ 60 ㎝程の地山の再堆積層から掘り込まれたものも見られた（写真 2）。これらの遺構の性格として、火葬施設、焚火の跡、松根油を採るために松の木を引き抜いた跡、炭焼窯跡など様々な推論が出されたが、炭化物の堆積や被熱痕があることと、聞き取り調査の内容（3 章（5））から、炭焼窯の一形態である可能性が高くなった。

今回の分析においてⅡ類とした炭焼窯跡と類似する遺構に関して、村田文夫氏は「坑内製炭遺構（坑内製炭法）」とし、「坑内製炭遺構（坑内製炭法）」は白炭窯や黒炭窯遺構である築窯製炭遺構（築窯製炭法）」以外の炭焼窯遺構として挙げているものである。村田氏のいう「坑内製炭遺構（坑内製炭法）」の中で、直径 1.5 m前後・深さ 30 ～ 40 ㎝の坑を穿って炭材を焼く方法を「伏焼法」（「無蓋製炭法」）として整理している*。また他地域における同様の遺構は、富山県大山町の一ノ瀬遺跡（1994 高梨）では「焼壁穴」、東京都の多摩ニュータウン遺跡（2000 長佐古）では「伏窯」、島根県の尾白Ⅱ遺跡（2003 是田敦）では「小炭窯」、鳥取県の久蔵谷遺跡（2005 野口・阪上）では「製炭土坑」として報告されている。他地域において報告されているⅡ類と類似する事例は、報告例が多いわけでなく、報告例についても、出土遺物を伴わない場合が大半であるために時期について不明なものが多い。しかし、詳細な時期は不明ではあるものの、近世以後の比較的新しい時期のものを少なからず含む点は下山地区における事例と共通する。また管見に及ぶ報告事例だけでも、全国の各地に確認できるものであることは、日本における炭焼きを考える上で重要であることは言うまでもない**。　（伊奈和彦）

（5）まとめ

今回の分析は、下山地区という限られた地域におけるものであり、また発掘調査で確認できた少数の類例により検討を行った結果である。従って今後の発掘調査による新しい成果をまって、再検討をする必要があることはいうまでもなく、またこれまでに研究されている周辺地域の成果と併せて考えることにより、新たな歴史

* 村田文夫「発掘された炭焼窯の基礎的研究―多摩丘陵における近世および近・現代の発掘事例から―」『物質文化』55 号（1991 年）によると「坑内製炭遺構（坑内製炭法）」には「伏焼法」（「無蓋製炭法」）の他に木材を上に積み上げて土を被せ、焚口・煙道を設けた「堆積製炭法」（「長野式伏焼法」）もあるとしている。

** 秋田山林會編纂 1924「木炭と其製造法」の中で、「鍛冶炭」を焼く方法として、以下の記述がある。「鍛冶炭は多くは軟質の木炭にして、用途の関係上着火し易く、且つ一時に強烈なる温熱を発し、又消火し易しきものを貴ぶ（中略）針葉樹炭を普通とす。一般に鍛冶炭は針葉樹においては松、闊葉樹は栗を原料とする（中略）。之ぶ焼製は地上深さ数尺の穴を穿ち、枝條を燃焼せしめたる中に炭材を投入して燃焼せしめ、炭化せる部分より土砂を掩ひて消火し、後土砂を除ひ分ち、木炭のみを集取するか如き粗放なる方法に依るを常とす。」

Ⅱ類の炭焼窯跡とこの「鍛冶炭」との直接の関係は指摘されていないが、下山においても、主要な木炭になる木材とは別に、雑木として扱われるような木材に関しては、鍛冶炭や自家消費用の炭として生産された可能性もある。

像が結ばれる可能性も高い。また第３章において述べたように、炭焼きは林産業の一部として存在していたものであり、炭焼きによる木炭生産も林産業の諸生産や農業とも関連して山間部における一連のサイクルの中で、考えていく必要があるものと思われる。今後の調査・研究の進展と関連諸学の学見の助言をまって校を結びたい。（藍山誠一）

謝辞

本稿の執筆にあたり、下山地区在住の藤澤鉦文氏と清水三代治氏、「ぬかた炭焼きの会」の高木田洋氏には多大なご協力とご教示を頂いた。また下山地区において一緒に発掘調査にあたった皆様には多くのご協力とご助言を頂いた。末筆ではあるが、お礼を申し上げたい。

参考文献

秋田山林會編纂 1924「木炭と其製造法」
愛知県林務課 1962「木炭検査制度30周年記念誌 愛知の木炭」愛知県
畠山剛 1971「炭焼物語」雄山閣出版
磯田佳久 1975「林業」『足助町誌』第三編 現代 第三章 第二節、愛知県東加茂郡足助町
鈴木茂夫 1975「村の生活」『足助町誌』第二編 歴史 第四章 近世 第四節、愛知県東加茂郡足助町
高橋順平 1978「林業の展開」『豊田市史』三巻 現代、豊田市
小山佳二 1975「かわりゆく村と町」『足助町誌』第二編 歴史 第五章 近代 第三節、愛知県東加茂郡足助町
岸本定吉・杉浦銀治 1980『改訂新版 日曜炭やき師入門』総合科学出版
下山村 1989『下山村史』資料編別巻（『東加茂郡下山村誌』（昭和16年刊））
築瀬一悟 2003「炭焼き」『下山村史』通史編Ⅱ第２編 近代・現代 第７章 民俗、下山村
新編岡崎市史編旧資料編集委員会編集 2011『新編岡崎市史編旧資料編Ⅲ』近現代、岡崎市
山口慶一 1983「Ⅵ まとめ 多摩ニュータウン地域の炭焼窯について」『多摩ニュータウン No.587 遺跡』第４集第３分冊（財）東京都埋蔵文化財センター
福田敏一 1984「Ⅴ 考察 炭焼窯の類型化と今後の展望」『多摩ニュータウン No.392 遺跡』第５集第２分冊（財）東京都埋蔵文化財センター
朱通祥男 1988「比企地方の炭焼き―嵐山町遠山の白炭窯の製作工程について―」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第10号、埼玉県立歴史資料館
岸清彦 1988「埼玉における木炭生産と炭窯の変遷」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第10号、埼玉県立歴史資料館
炭焼物語編集委員会 1989『三州足助　炭焼き物語』愛知県東加茂郡足助町足助町森林組合
武井朗 1989「近世宮ヶ瀬における炭焼きについて（予察）―宮ヶ瀬遺跡群検出炭窯の歴史的背景を中心として―」『神奈川考古』第25号、神奈川考古同人会
村田文夫 1991「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究―多摩丘陵における近世および近・現代の発掘事例から―」『物質文化』55号、物質文化研究会
長佐古真也 2000「多摩ニュータウン遺跡の炭焼窯」『東京都埋蔵文化財センター研究論集 XXVI』東京都埋蔵文化財センター
東海農政局豊田統計情報出張所編集 2003『矢作川水源の森と暮らしを守る―炭焼き讃歌―』愛知県農林統計協会
高堅清志 1994『富山県大山町一ノ瀬遺跡発掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター
杉本良 1995『Ⅲ調査結果　遺構』『Ⅵまとめ』『北上市埋蔵文化財調査報告書第18集　南部工業団地内遺跡Ⅱ』北上市埋蔵文化財センター
杉本良 1997『ⅢN区調査結果～ⅤP区調査結果』『Ⅹ Ⅰまとめ』『北上市埋蔵文化財調査報告書第27集　南部工業団地内遺跡Ⅲ』北上市埋蔵文化財センター
宇江敏勝 2006『山びとの記　木の国果無山脈』新宿書房
野口良也・阪上志緒里 2005「第３章第２節（２）土坑」『第５章まとめ』『鳥取県教育文化財団調査報告書97 一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ 久蔵谷遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター
是田敦 2003「第４章尼Ⅱ遺跡」『第７章まとめ第４節炭窯について』『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１　尾白Ⅰ遺跡　尾白Ⅱ遺跡　家ノ脇Ⅱ遺跡３区　川平Ⅰ遺跡』島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
岸本定吉・杉浦銀治 2012『大人の週末遊び 日曜炭焼き師入門　完全改訂版』総合科学出版

研究紀要　第 14 号

発行年月　2013 年 5 月

編集・発行　(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　新日本法規出版株式会社

本書は再生紙を使用しています。